

---

# 千冬と束は似た者同士

彩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

千冬と束は似た者同士

### 【Nコード】

N0576Z

### 【作者名】

彩

### 【あらすじ】

千冬と束がひたすら仲良しな話。そして千冬の性格が全く別人な話。とりあえず、親友仲は恋仲にシフト？姉弟、姉妹仲は良好です。そして束はやっぱり天災のままでした。どことなく空っぽな千冬と、千冬への愛が最初から最後までMAXな束による、百合物語です。構成分は千冬への愛と、千冬と束の百合への愛。ただ今、千冬と束の学園生活編。

## 似た者同士たちの出会い

「ああ、嫌ね。面倒だわ」

よる、めをさましたら、おかあさんのこえがきこえた。

「今更、そんなこと言っても仕方ないだろ」

リビングでおかあさんと、おとうさんがはなしてた。

「でも私、言ったわ。結婚するときに」

なにをはなしているのかな？わたしはドキドキして、ろっかからおかあさんとおとうさんのはなしを、きいてみた。

「私、子どもは絶対にいらなくて、言ったわ」

わたしは、いらなくともなんだって。

とある幼稚園の、入園式。一クラス三十人あまりで、計三クラスクラス名はあさがお、たんぽぽ、ひまわりと幼稚園らしい可愛らしいもの。

全体を通しての入園式が終わり、クラスごとの部屋に来て数十秒。イスに座ったままはしゃぐ子、緊張したように周りをキョロキョロと見ている子、立って歩き回ろうとして早くも注意されている子。

少しだけ見慣れてきた毎年毎年の光景と、子どもたちの騒ぎ声に、部屋に入ってきた今年で二年目の若い女の先生が、笑顔で口を開いた。

「はい、みんなー！こんにちわー」

「こんにちわー！！！」

元気に挨拶をすれば、殆どの子どもが元気よく、中には恥ずかしそうに小さな声で、返事をしてくれる。彼女はそれに笑みを深めて、大きな身振りで自分を示して子どもたちを見渡した。

「今日からみんなの先生をする、佐々木加奈です。加奈先生って、みんな呼んでねー」

「かなせんせー！」

「はい！」

上々の反応に、加奈はうんうんと頷く。出だしは好調に見えた。にこやかに笑顔を浮かべたまま、加奈は子どもたちを見回す。笑顔の子、おどおどした子、隣の子に話しかける子、たくさんいた。

「（……………あれ？）」

その中に、加奈は予想しない存在を見つけて、少しばかり驚いて目を瞠る。

見つけたのは、どういうわけかパソコンを持ち込んでいる女の子。周りを一切気にせずにカタカタとキーボードを打ち鳴らす姿は、子どもとは思えないほどに異様に映る。

加奈が特に気になったのはこの子ども。けれどその疑問も、次々に消化しなければ無い恒例行事の為にすぐに思考の外へと追いやられた。

「それじゃ、まずは自己紹介をしましょう。お友達に、自分の名前を元氣よく教えてあげてくださいね」

一番は、相田君。そう彼女の言葉で順調に始められた自己紹介に、  
またも彼女が少しばかり目を見開いたのは、あ行が終わる直前の事。

「  
織斑千冬です」

席を立ち、名乗り、また座る。僅か三秒の出来事に、加奈は何も  
言えずにあぐりと口を開けた。

どの子どもも、もじもじと照れたり、元氣よく名乗ったりと子ど  
もらしさが見えるのに、たった今名乗った女の子にはそれが無い。  
ただの事務作業のように、それを終わらせてしまった。

「……あ、そ、それじゃ次は、川内藍ちゃん」

「ひゃ、ひゃい！」

思わず呆けてしまった彼女は、慌てて次の女の子を促した。今は  
順調に自己紹介を終わらせることが第一とされ、一人だけを気に掛  
けるわけにはいかないのだ。

そのまま、彼女の思うところの子どもらしい自己紹介が続き、さ  
行に差し掛かったところで。順番は、彼女が気にしたパソコンを持  
ち込んだ女の子の番となった。

「それじゃ、お名前を言ってくれるかな？」

「……」

「あ、あれ……？」

促しても、女の子は彼女を見ようとしめない。ただ無表情に、一

切の音を遮断しているかのようにパソコンを打ち鳴らしている。

「えっと、お名前、言ってくれるかな？」

再度、困惑しながら聞いて、初めて女の子がパソコンから一瞬、視線を加奈へと向けた。その視線はまたすぐにパソコンに戻されたが、ぼそりと小さな呟きが一つ。

「……………篠ノ之束」

これで良い？とばかりに響いた名前に、加奈は思わず頷いてしまつて、自己紹介は次へと進む。

「（ど、どという事かしら…………？）」

子どもたちの自己紹介を聞きながら、加奈は困惑に頭を悩ませた。自己紹介前半にして、既に問題児候補が二人。それも、やんちゃで困るというのはまた別の意味で困りそうな、そんな問題児候補。これから彼女は、そんな問題児たちがいるクラスを受け持たなければならぬ。

「（……………がんばれ、私！）」

心中で激励して、こっそりと握った握りこぶしは、じつとりと汗ばんでいた。

入園式のみで終わったその日の翌日。

大きな部屋ではあちこちで遊ぶ子どもたち。鬼ごっこやままごと、

積み木遊びとジャンルは幅広い。

先生である加奈が声をかけるのもあって、人見知りで混ざりたくても混ざれないでいる子どもは、すぐに何かしらのグループに入れられる。そのおかげで、一人で遊んでいる子どもは残すところ二人だけだ。

「千冬ちゃん、皆と遊ばないの？」

「いいです」

千冬は、二人のうちの一人だった。誰とも遊ぼうとせず、ただ眺めているだけ。加奈が声をかけても、淡々と素っ気ない返事をするだけだ。

「（厳しいわね……）」

実は彼女、千冬に声をかける前にもう一人、パソコンを持ち込んだ女の子にも声をかけている。が、女の子には返事さえしてもらえず、その存在を認識すらされずに終わってしまったのだ。

「あつ……」

困惑する加奈を前に、千冬はてくてくとその場を離れる。放っておけないが、扱いに困ってしまって、触れるに触れられない。

「かなせんせー!!」

「あ、はいはい」

他の子どもに呼ばれて、加奈はそちらへ向かう事にした。

一方、加奈から離れた千冬は、折り紙や絵を描く為に用意された机のある一角に座っていた。

椅子に座って、他の絵を描く子どもたちからは十分すぎるくらいに距離を取っている。そうしてただばんやりと、遊び回る子どもたちを眺めていた。

「（うるさい……）」

沸き起こるのは子どもらしからぬ感情のみで、千冬は椅子の背もたれの寄りかかる。

静かな場所で、一人になりたい。それが少女の望みだった。

けれどその望みとは裏腹に、少女の周りは騒がしさに溢れていた。すぐそばを走りまわる子どもたちの足音とはしゃぐ声に、少女は椅子を飛び降りてまた歩き出す。

「（……静かな場所は、どこだ？）」

一人でいると、先生が声をかけてきた。子どもたちの近くにいと、そこはいつそう騒がしかった。

出来るなら一人でいたかった。静かな場所にいたかった。

それが無理でも、せめてこの騒がしい空間で一番静かな場所は、と千冬は壁沿いに部屋を歩いて探し回る。

そうして辿り着いたのは、もといた部屋の角の対角線にあたる部屋の角。そこは他の子どもたちも距離を置き、たった一人の子どもだけが占有する空間。部屋の騒がしさから僅かに離されたそこで、女の子がパソコンをカタカタと打ち鳴らす。

千冬は、この騒がしい部屋でようやく見つけた空間に、静かに静かに息を吐き出した。

「邪魔、する」

一応は、先住者である少女にそう声をかけて、千冬はすっと座



って壁に寄りかかった。それに驚いたように顔をあげたのは、先住者の少女だ。

少女はカタリとパソコンを打つ手を止めて、座り込んだ千冬を眺める。じつと見つめてくる眼差しに、千冬はただ無言で見返して、やがて面倒くさそうな様子で目を閉じた。

「……………ここ、東さんの場所なんだけど」

「そうか」

「邪魔なんだけど」

「少しだけ、いさせてくれ」

「なんで」

「ここは静かなんだ」

あつちは煩いと、千冬は思ったままに告げる。それから、少ししたらすぐに出て行くからとも言って、体育座りで立てた膝に額を押し付けた。

小さく縮こまったその姿は、邪魔だという少女の邪魔にならないようにしているかのようにだった。

「……………ねえ」

「……………なんだ」

「名前、なんていうの？」

少女は千冬の名前を覚えていなかった。けれどそれは千冬もまた同じで、千冬は少女の名前を知らなかった。過去形なのは、つい先ほど、少女が自分で名乗ったからだ。東さんと。

「織斑、千冬」

「千冬……………」

縮こまった体から発せられた声はくぐもっていた。少女は千冬の名前を繰り返して呟くと、今までの無表情が嘘のような笑みをパツと浮かべる。

「ちーちゃん」

「……なんだ、それは」

「東さんはちーちゃんと呼ぶことに決めたよ。いいでしょ？ いいよね！」

「……………好きにしろ」

一転して騒がしい少女に、千冬は投げやりに肯定の言葉を返した。そのそと近づいてくる音に顔をあげる。すぐ隣で少女が千冬を見ていた。

「ちーちゃん」

「……………」

「私はねー、篠ノ之東だよ。東さんだよ」

「……………そうか」

「そうなんだよ！」

意味も無く強く頷いて、東は千冬の隣でまたパソコンをカタカタと打ち鳴らし始めた。

二人のいる部屋の角は他の子どもから距離を置かれて、子どもたちの遊ぶ騒がしさからは少し遠い。

入園してから翌日に千冬が見つけたのは、パソコンのカタカタと鳴る音が響く、東という先住者のいる空間だった。

## 似た者同士たちの出会い（後書き）

転生者が千冬と束と同じ幼稚園で出会う二次創作では、束はともかく、千冬がとても子どもらしいです。

それを見て、思ったこと。千冬が束みたいな性格だったら、どんなんだろうと。

そんな千冬の、変わった話。ぶっちゃけこれが書きたかっただけとか、言えない。

## 問題児は問題児

翌日、空は晴れ渡る青空だった。

当然のように外で遊ぶことになって、千冬は照りつける太陽から逃げる様に日陰に入って座っていた。

遠目に砂場で遊ぶ子どもたちや、時折視界を走り去る鬼ごっこをする子どもたち。

千冬のいる日陰はそんな彼らから遠く、先生の目の届くギリギリの範囲だったため、子どもたちの騒ぎ声は遠かった。

「ちーちゃん、嬉しい？」

「……ああ」

静かで嬉しいか、と聞いた束に頷いて、千冬はぼんやりと木の葉を眺める。当然のように束がいるけれど、気にはならなかった。

「見て見て、ちーちゃん！」

軽く目を閉じた千冬に、束は身を寄せてパソコンを差し出す。横に細長いノートパソコンの画面に表示されている数式と何かの設計図に、千冬は首を傾げた。

「これは？」

「束さん特製の最新パソコンだよ！空中投影型ディスプレイ&キーボードでいつでもどこでも大画面で大容量だよ！すごいでしょ！」

「へえ」

「……………信じてない？」

「いや」

軽い返事に不安そうに瞳を揺らした束に、千冬は首を振る。そうしてじっとパソコンの画面を眺めて、もう一度首を傾げて答えた。

「理解は出来ないが、凄いのはその説明で分かった」

「本当!？」

「ああ。束は頭が良いんだな」

「うんっ!!」

千冬のその肯定は、束にとって初めての肯定だった。

子どもの身でありながら、大人ですら完成させることのできない理論を完成させる束を認める大人は、束の周りにいなかった。両親ですら、束を腫物のように扱う。

同じ子どもでも、束の傍には誰も寄らない。無表情でただパソコンを打ち続ける少女は、幼い彼らにとって理解できない不気味な存在だった。

「えへへっ、ちーちゃん!」

「……?」

そんな束に近づいてきたのは、千冬だった。

昨日一日、束は千冬と一緒にいた。千冬は何にも興味が無いようだった。子どもたちが遊び回るのを、煩そうに見たりはしていなかった。

それは、まるで束と同じように思えた。束は興味が無いものに一切の関心を抱かない。それは物だけではなく人間にも同様である。

ただ無関心に世界を見る束にとって、千冬は初めて興味を抱けた人間だった。いや、もしかすれば既に、それだけでは無くなっているのかもしれないけれど。

「千冬ちゃん、束ちゃん」

「……」

「……」

抱き着いてくる束を、千冬が首を傾げながら受け止めていると、先生が声をかけてきた。

途端に表情を消す束。千冬もまたチラリと視線を向けて、けれどすぐに視線は先生を越えて空へと向く。ぼんやりと眺めた空は、雲一つ無い青空。

「みんなと遊ばないの？」

「いいです」

「……そんなこと言わないで、遊びましょ？」

「………いいです」

「あ、ちーちゃん待ってー！」

何度も誘いをかける先生に、千冬は一言告げると立ち上がり、日陰から出て行く。それを追って束もまた日陰を飛び出し、千冬の隣を並んで歩いた。

「ちーちゃんちーちゃん」

「……なんだ？」

「束さんを置いて行かないでほしいんだよ。泣いちゃうよ？」

「………そうか」

「ああっ、待って待って!!」

束がふざけて泣き真似をしてみせると、千冬はまったく気にした風も無く歩いて行ってしまふ。それを慌てて追いかける。

そうして辿り着いた次の日陰は、少しばかり騒ぎに近い場所だった。

「ちーちゃん、ご機嫌斜め？」  
「いや」

千冬は、煩くは感じてても不機嫌になっただけではいなかった。昨日の騒がしさに比べれば、まだずっとましである。

二人はそのまま日陰の中で、束が千冬に寄りかかるようにしながら、座っていた。パソコンを打ち鳴らすカタカタという音が、千冬の耳を刺激する。その音を聞きながら、少女は目を閉じていた。

「……………」

自分の周りに溢れる子どもたちに、千冬は困り果てていた。  
切欠は偶然。日陰でぼんやりとしていた千冬たちの元に、ボールが転がってきたことだった。

ボールで遊んでいたのは、二人から随分と離れた場所にいた子どもたちで、千冬は仕方なしにボールを持って子どもたちに渡しに日陰を出た。投げ返すには遠すぎたからだ。

束は行かなくてもいいと言ったが、目の前にボールが転がったままなのも千冬にとっては鬱陶しくて、それゆえの行動だったのだが、問題は、その帰り道。先ほど撃沈した先生が、砂場を通りかかった千冬と一緒に遊ぼうと誘ったことだった。

子どもの一人が先生の真似をして、千冬を遊びに誘った。そうしてそれが広がり、砂場の子どもたちから揃って遊ぼうと誘われ、囲まれた。

「……………煩い」

せつかく騒ぎの外にいたのに、気づけばその中心に連れてこられて、千冬は不機嫌だった。表情には一切の変化を見せないが、その実、早くこの場から立ち去りたい気持ちでいっぱいだ。

「お城作ろう！」

「作るー!!」

そんな千冬的心情など知ったことじゃない子どもたちは、えっさえつさと砂を盛り上げお城を作ろうと奮闘する。しかし、全員が全員、好きなように作ろうとするものだから、出来上がるのはぐしゃぐしゃの砂の山。

できなーいとたくさんの方が上がって、騒がしさが増す。それに耐えかねて、千冬は砂に手を伸ばした。

「みんなでいつしよに作ればいいよ。さいしょは、おしろのかべを作ろう」

「うん！」

「ぼくもつくるー!!」

千冬の実似をして、子どもたちがお城づくりを再開する。ところどころで千冬が指示を出して、皆で同じものを作り上げた。

結果として、小さいながら先ほどの砂の山とは泥雲の差のお城が出来上がった。

「できたー!!」

「ちふゆちゃん、すごい」

「……………」

尊敬のまなざしで千冬を見る子どもたちに、本人はといえばもう良いだろうかと考えていた。



遊んだのだから、もう良いだろうか。もう離れても良いだろうか。楽しそうな子どもたちを前に、千冬は小さな笑みを浮かべて見せると、緩慢な動きで立ち上がり歩き出した。

「あっ」

「ちふゆちゃん、どこに行くの？」

さながらハーメルンの笛吹が如く、歩き出した千冬の後ろをぞろぞろと着いて歩く子どもたち。砂場をいったん離れて、他の子どもたちの様子を見ていた先生は、それを見てあんぐりと口を開けてしまった。

昨日一日、束以外の子どもと話す姿を見なかった少女が、子どもたちを引き連れている。それに驚いたのだ。

引き連れている本人は、全くの無表情で楽しそうには見えなかったけれど。

「千冬ちゃん」

「せんせい、なんですか？」

「皆、千冬ちゃんともっと遊びたいんだって。一緒に遊びましょ？」  
「……………」

千冬が振り返ると、そこには目をキラキラさせた子どもたちがたくさんいて、加奈の言葉が嘘ではないと肯定しているようだった。

「……………つかれ、ました」

「え、もう……………」

言った千冬が、疲れるほど遊んでいたようには見えなくて、加奈は思わず聞き返してしまった。それに返ってきたのは無言の頷きで、うーんと頭を悩ませる。

子どもたちは、千冬の事情などまるで気にした風も無く、立ち止まったその周りを囲んで遊ぼうと誘いをかけてきた。

「（……煩い、な）」

騒がしいのは嫌いだった。千冬は加奈を見上げるが、彼女は困ったように笑うだけ。

助けは期待できない状況に、千冬は子どもたちを見て一つ提案をした。

「かくれんぼをしよう」

「かくれんぼ？」

「やるーやるー！」

否は無く、その提案に全員が乗ってくる。千冬は加奈を見て、小さく首を傾げて聞いた。

「せんせい、おにやってくれませんか？」

「あ、私？ええ、いいわよー」

「じゃあ、ひやくかぞえて。みんな、かくれて」

「わー！！」

千冬が言つと、一斉に子どもたちは散り散りに走っていく。加奈はその無邪気な様子に笑みを浮かべて、それからふと、千冬がその場に立ったままなのに気づいて首を傾げた。

「千冬ちゃんも、早く隠れないと」

「私は、いいです」

「え？」

「私は、遊ばないです」

呆氣にとられて固まってしまった加奈に、千冬はくりと背を向けて歩き出す。向かったのは東が座る日陰で、加奈が見送る先で少女はそこに座り込んだ。

「……困った、わねえ」

人気者になったけれど、少女にその気は無いらしい。  
視界の中で、東が千冬に抱き着いていた。

「ちーちゃん、おかえり！！」

「……ただいま？」

首を傾げて言った。東はギュウツと千冬を抱きしめて、体全体で喜びを表現するかのようにしながら笑っている。

「ちーちゃんがなくて東さんは寂しかったんだよ」

「……束もくればよかったんじゃないか？」

「え、嫌だよ。束さんにはちーちゃんだけがいれば、それでいいの！」

「そうか……」

自慢げに言う東に、千冬はただ小さく返しただけで、視線は晴れ渡る空へと向けられた。首に回った腕に軽く手を添えて、軽く目を閉じる。ここは、東の声は聞こえるけれど、他の音は遠くて静かだ。

「東の傍が、一番落ち着くな」

「えっ、本当？本当ちーちゃん！？」

「……静かで、いい」

「つつれしいな、束さんもちーちゃんの傍が一番いいよ!!」

ギユウウと抱きしめられる腕に力が籠められる。少しばかり苦しくなつて、ポンポンと軽く腕を叩いて知らせると、慌てたように束が力を緩めた。

静かなこの空間で、千冬はのんびりと目を閉じて微睡んでいた。

## 問題児は問題児（後書き）

初投稿なので、二話連続で。あとはのんびり更新です。  
ちなみにこの作品、束の千冬へのデレ度は常にMAXです。

## 正反対の少女たち

日曜日、千冬は自分の部屋でぼんやりとしていた。

朝食は食べ終えた。両親はリビングにいたが、千冬は食べ終えて  
そうそうに部屋に戻って来ていた。

「……………」

静かで、自分一人の部屋が、千冬の好きな場所。誰の存在も、声  
も、視線も、何も気にしなくて良い場所。千冬はここが好きだった。  
千冬の両親は、そんな千冬に何も言わない。ある日、何の前触れ  
も無く部屋に籠る事の増えた我が子に、何も言わない。千冬は、こ  
れが本来の姿だったのだと受け入れた。

「……………」

置物のようにぼんやりと、ただそこにいる。それだけ。

「ちゃん！」

「……………」

「ちーちゃん！ちーちゃんちーちゃんちーちゃん！！！」

「……………」束？」

立ち上がり、からりと窓を開けて身を乗り出す様に外を見ると、  
束がいた。二階の窓から顔を出した千冬に、束が満面の笑みで大き  
く手を振り飛び跳ねる。

「おっはよー。ちーちゃん！」

「おはよう……何をしているんだ？」

「遊びに来たんだよ！！」

「……ちよつと待ってろ」

トンツと窓を開けるために乗っていた机から下りて、パタパタと玄関へ向かって扉を開ける。部屋を出る直前に見た目覚まし時計は、八時を指していた。

開けた扉に手をかけたまま、千冬は考える。一度、家の中を見てから束に首を傾げた。

「うち、入るか？」

「いいの！？」

「……たぶん、構わない。どうぞ」

「わーいわーい！」

大喜びの束を家に招き入れて、千冬は扉を閉める。二階への階段を上ろうとしたところで、トイレから出てきた母親と目が合ったけれど、何の言葉も無かった。

自分の部屋へと連れて行き、そうすると束はキラキラと目を輝かせて室内を見回し始める。

「ちーちゃんの部屋！」

「そうだな」

興奮する束に、千冬は何が面白いのかと首を傾げた。

千冬の部屋には、特に目新しい物は無い。何の変哲も無いベッドに机、本棚はあるが、あまり本は置いていない。プラスチックのタンスも普段から着るような服があるだけで、玩具と呼べるようなものは何も無かった。

「ちーちゃんの匂いがするよ」  
「あまり嗅ぐな」

ボスツとベッドにダイブした束が枕に顔を埋めて言ったのに、ベッドに腰掛けて返す。

遊べるような物も無い部屋で、一応はどう歓迎するべきかと千冬は頭を悩ませたが、答えは出なかった。

「束」

「な〜に？ちーちゃん」

「したいことはあるか？」

「したいこと？」

問われて、束ははてと首を傾げる。したいこと、したいことと呟いて、パツと笑った。

「特に無いね！」

「……なら、何をしに来たんだ？」

「ちーちゃんに会いに」

「……………会いに？」

「うん」

最近は楽しみになってきた幼稚園が、今日は休みだったから。楽しみの理由である千冬に会えないとなって、束はそれならと会いに来たんだという。

たったそれだけ。ただそれだけ。自分に会いに来たという束に、千冬は心底不思議そうに聞いた。

「なぜ私に会いたがる？」

「束さんはちーちゃんにフォーリンラブ！」



「ふぉー、りん……？」

「ちーちゃん愛してるー！！」

「……………愛？」

ますます分からない、と目をパチパチと瞬かせた千冬に、東は笑う。

「ちーちゃんは、東さんと一緒にいればそれでいいんだよ」

「一緒に、か？」

「そうだよ。それでいいんだよ」

「……………わかった」

今度は単純な答えに、千冬はあつさりと頷いた。東の笑みが深まる。

腰かけていた体勢からベッドに倒れ込んだ千冬は、同じように横に寝転んだ東に、思ったままに伝えた。

「東の傍は落ち着くから、一緒にいい」

「その返事は最高だよちーちゃん！」

ギュウツと抱きしめられる。柔らかなベッドの上で抱きしめられて、千冬はそのまま目を閉じた。

幼稚園の子どもたちの千冬と東への評価は、正反対なものだった。千冬は、子どもたちの人気者だ。見た目は目つきが鋭く怖い印象を与えるも、一度触れてしまうと、不思議なほどに子どもたちは千冬に懐く。それはもう、先生以上に子どもたちを統率してしまうくらいに。

束は、子どもたちに距離を置かれている。話しかけても見向きもされず、それ以前に常に無表情でただパソコンを弄り続ける束が、子どもたちには異質で恐かった。そう思うのは子どもだけでは無く、大人までもそうだった。誰もが束を扱いかねて、近寄ることが出来ない。

そんな正反対の評価を受ける千冬と束だが、当人たちはとても仲が良い。遊び始めると、子どもたちは挙って千冬を誘おうとするが、千冬本人はその前に既に束の傍にいる。それによって、子どもたちは千冬を誘うことが出来ずにやきもきする羽目になる。二人にとって、それは全く関係の無い事らしいが。

「ちーちゃんどう？これすっごいでしょ！！」

「……よく分からないが、何をするためのものなんだ？」

「空を飛ぶんだよ！着るだけで飛べるんだよ、びゅーんって！！」

「それは、確かに凄いな」

束の見せる設計図は、相も変わらず千冬には理解できない数式や言葉でいっぱいだったが、彼女は嫌な顔一つしない。束の単純明快な説明を聞き、言葉少なに思ったままの感想を言う。その繰り返し。千冬と束は、いつも一緒にいる。幼稚園に來ると束が千冬に突撃し、それから基本はずっと一緒だ。時々、千冬が先生に引っぱられて、他の子どもたちの輪に入れられることもある。その際に束は絶対に一緒に行きはしない。無表情に不機嫌なオーラを出しはするが、けれど千冬は、子どもたちの遊びに一度付き合つと、もう良いだろうとばかりに束の元に戻っていく。そうなると誰かが引き留めようとも、全くの興味を示さなくなる。そうして千冬はまた、束の話を聞きながら時間を過ごすのだ。

「ちーちゃんは、笑わないね」

「……なんだ、突然」

話しの最中、束は何を思ったのか呟くように言った。千冬が首を傾げて見ると、彼女は拗ねたように唇を尖らせて返す。

「あの子たちには、ちーちゃん笑うのに。束さんにはちーちゃん笑ってくれないんだよ」

子どもたちと遊んで、遊び終わると千冬は決まって小さな笑みを浮かべる。そうしてから、束の元に戻る。

けれど束にそうした笑みを千冬が向けた事は無くて、束はそれが不満で仕方が無かった。

むうっと説明した束に、千冬はパチクリと目を瞬かせて聞く。

「……………笑ってほしいのか？」

「笑ってくれるの？」

「別に、それくらいなら」

笑えというなら、笑えると。千冬は、束の願いに答える様に小さな笑みを浮かべて見せた。

じっと見つめてくる束の目を、笑みを浮かべたままで見返す。喜ぶかに思われた束は、とても不思議そうな表情をした。

「ちーちゃん、無理してる？」

「……………どうしてだ？」

「だって、楽しそうじゃないよ。面白そうじゃないよ。笑ってるけど、泣きそうだよ」

「……………」

矢継ぎ早に言われた言葉に、千冬はふっと笑みを消して束を見る。そうすると、束は何処か安心したように千冬と入れ替わりで笑みを

浮かべた。

「ちーちゃんは、そっちの方が楽なんだね」

「……そう見えるのか？」

「見えるよ。束さんにはなんでもお見通しなのさ！」

「……そうか？」

「あれ、なんでそこで首傾げちゃうの？そこは、凄いなって言うところだよ！？」

「……」

「ちーちゃん、黙っちゃ嫌だよー。何か言ってー！」

「……束は、凄いな」

呟くように言われたそれは、普段とはどこか違う響きを持っていた。

「べつに、楽しくて笑うわけじゃない。ただ、笑った方が楽に離れられるから、笑うだけだ」

「ふうん……束さんは、あの子たちと遊ぶことがよく分からないけどね」

「私も、興味は無い」

なのに連れて行かれてしまうから、困るのだ。千冬は一度として自分から子どもたちの輪に入って行った事は無い。連れて行かれ、置かれ、穏便に輪を離れるためにその場を一度満足させてから、次が始まる前に離れる。

それは千冬が徹底して子どもたちとの間に壁を作っている、何よりの証拠だった。

「わざわざ、関わる気にもならん。騒がしいのは好きじゃない」

「束さんはちーちゃんに関わるの大歓迎！」

「……束の傍は、一番落ち着く」

「おおつ、殺し文句だよー。束さんはそんなちーちゃんの愛に溺れそうだよ！」

「そうなのか？」

「そうなんだよー！」

全身全霊の肯定を前に、千冬はもう一度、そうなのかと呟いた。よく分からないままに納得したらしかった。

基本的に、千冬は束の言葉を否定しない。というよりも、束だけでは無く誰の言葉も否定しない。

全てを受け入れる。まるで千冬の中には何も無いかのように、何かの器のようにその言葉を受け入れて、受け止める。言葉にすれば簡単だが、実際に出来るかとなるとそれは難しい事だった。

「束さんもちーちゃんの傍が一番だよー」

「そうか」

「……むう、嬉しいとは言ってくれないねちーちゃん  
「嬉しい？」

束の言葉に、不思議そうに千冬は聞き返した。

「束さんはちーちゃんに、落ち着くって言われると嬉しいんだよ」

「……？」

「あ、嬉しいじゃなくて愛してるでも良いんだよ！むしろそっちの方が嬉しいんだよー！」

「………愛してる？」

「ぐはっ」

それは、束の想像を絶する破壊力を持っていた。

歡喜のあまりに血を吐き出してぐたりと倒れた束の体が、びくび

くと痙攣する。その顔に至高の笑みが浮かんでいるのを確認して、千冬はあまり気にした風も無く床を眺めた。

「……………煩いのは、嫌いだけれど」

唇を指でなぞる。笑おうと思えば、すぐに唇が曲線を描いた。そこには千冬の感情など、関係が無い。

ただ事務的に、必要だから千冬は笑える。笑みを浮かべて見せる事が出来る。そうするのが楽かと言われれば、全く楽じゃないと言えたけれど。

「束」

「んんっ？ なにかなちーちゃん。束さんはちーちゃんの愛に溺れて溺死寸前救援求だよ」

「私は好きじゃない相手の傍に、いたりしない」

「……………」

「笑ってなくても、たぶん私は、束の傍にるのが　楽しいと思う」

「大好き、ちーちゃん！！」

千冬の告白は、いつものように無表情で。それでも束を喜ばせるには十分すぎた。

笑いかけはしなくても、千冬も束も互いを想う気持ちは、同じだった。

## 正反対の少女たち（後書き）

課題、いかに千冬と束を百合にできるか。

## 束の秘密基地

興味が無いものに興味を示さないのって、普通でしょ？

「~~~~~」

カタカタとパソコンを打ち鳴らす。三つの画面に三つのキーボードが、今私の目の前にある。

次々と画面に表示させていく数式も、図形も、全部分かる。だって考えのたのは私だから。

「~~~~~」

見かける人間は皆同じ人間に見える。違いなんて無い、皆同じ。

唯一、ギリギリでうちの両親を身内だって判断できるくらい。

誰だって、ただ街ですれ違っただけの人間を覚えていたりしない。私にとってはそれが、興味の無い人間や物だっただけ。

考えようと思えば何でも考えられた。一から十まで完璧に、とてもあつさりと理解して考えられた。

「~~~~~」

私の興味を惹くものは何も無かった。両親が私を気味悪く見ていたのも知ってるけれど、まったくもってどうでも良かった。興味が無いから。

考えたものをパソコンに打ち込むのだって、ただ考えを外に出すだけで楽しくない。だって私の頭の中に既にあるものなんだから。でも、最近はそれが凄く楽しくなっている。



「~~~~~」

これをちーちゃんに見せても、きっと分からないんだろうなあ。  
それでもいいんだけどね。

分からないなら分かるように私が説明してあげる。それだけの事  
なんだよ。

ちーちゃん、私が初めて興味を持った女の子。ちーちゃんの傍は  
とっても落ち着いて、心地よくて、離れる事なんて考えられない。  
なのにちーちゃんってば人気者さんだから、他のに連れて行かれ  
て東さんはいつもジェラシー。

でもすぐに戻って来てくれるちーちゃん。そのちーちゃんの愛に  
東さんは常に溺死寸前だよ。

「~~~~~でーきた!」

ちーちゃんはこれを見て、なんて言うのかな。東さん的には愛  
してるって言うてほしいな。言ってくれないかな。

「待っててね、ちーちゃん」

らぶりい東さんは、今日もちーちゃんまっしぐらー。

時が少し経ち、千冬と東は小学生となった。  
一学年三クラスと、少子化の昨今にしては大きい方といえるかもし  
れない。

「見て見てちーちゃん!」

いつものように、束は席に座っていた千冬の前にパソコンを差し出した。そこにはまた、千冬には分からない数式や図形が表示されている。

「いろんな物を量子変換！どこでもいつでもなんでも取り出し可能！これで必要らずだね！！」

「へえ。それは便利だな」

「でしょでしょ？ってなわけでさっそく作ってみるんだよ！」

「駄目だ」

うきうきわくわくとする束を、千冬は首を振って止めにかかった。

「えー、なんでなんでなんでー？」

「束の考える物は凄いいからな。誰かに見つかったら、きっと煩くなる」

「ちーちゃんは煩くなるのが嫌いだねー」

「……でも、そんなに作りたいなら、作ればいい」

「うっん、作らないよ。ちーちゃんが嫌ならやらない」

おおよそ、小学生になったばかりとは思えない会話をする二人は、クラスでも浮いていた。幼稚園の頃から何も変わらない光景だ。

ちなみに、束がなぜ千冬と同じクラスにいるのかと言えば、簡単な話で同じ小学校だったからである。偶然にも二人の住所から見ると通う小学校は同じで、クラスについても束が何かする前から同じクラスに振り分けられていた。

そして、偶然はさらに続き席は二人とも隣同士だ。千冬の席が廊下側の一番後ろで、束は二列目の一番後ろ。さとして始まる苗字が随分と多いクラスだったようだ。

「はい。おはようございまーす」  
「おはようございまーす」

千冬と束が、いつものように話しているうちに、彼女らの担任となる教師が教卓の前に立っていた。

そうして、二人の小学校生活の幕が開いた。

学校からの帰り道、束は千冬に言った。

「ちーちゃん、うち来ない？」

「束の家？」

「そうそう。ちーちゃんに見せたいものがあるんだよー」

見せたいもの、と言われて千冬は僅かに首を傾げる。思いつくようなものは無かった。

一瞬、今日の今後の予定を考えてみる。家に帰るだけだったから、頷いた。

「えっへへ、ちーちゃんがうちに来るのは初めてだね！」

「ああ……そういえば、そうだな」

幼稚園の頃から、休みの日は束が千冬の家を訪れたので、千冬は束の家に行ったことが無かった。束も、こんな風に誘ったことが無かった。

にこにこ満面の笑みで千冬の手を握って、束は家へと帰る。こんな風に笑顔で家に帰ったのはおそらく初めての事だった。

「さあ、ちーちゃん。どんどん入るといいよ」

「お邪魔します」

奥へ奥へと進める束を前に、千冬は常識を捨ててはいなかった。儀礼的に玄関で挨拶をしてから、靴を脱いで中へと上がる。

束の家は神社のすぐ傍にあった。千冬は前に一度、束の家が神社で、他にも剣道の道場を開いていると聞いていたが、神社と道場とはまた別の場所に、家があるらしい。

一戸建ての家はどこにでもありそうな、普通の家だ。小さな庭もある。それは千冬の家と大差なかった。

「こっちだよー」

「……？」

束は千冬を庭へと連れて行った。靴を脱いでいたので、置かれたままのサンダルを拝借する。

庭に下りた先で、束はトントンと地面を二度、つま先で蹴っていた。そうするとどういう仕組みか、土に丸い円が描かれ、それを二つに分ける様に縦に切り込みが入り、半円になった土がウィーンと左右に開かれていった。

ぽつかりと、庭に出現したのは人間の子ども一人が通れるサイズの縦穴で、その内側は鉄板で覆われ梯子が設置されていた。

「さあさあ、入って入って」

「束、これは？」

「見てからのお楽しみだよ！すつごいんだから！」

千冬は、束に促されるままに梯子を使って穴を下りていく。穴は五メートルほどの深さで、下りた先には広い部屋があった。

「じゃじゃーん！！なんとなんと、束さんは秘密基地を作っちゃい

ましたー！！」

「秘密基地？」

「入れるのは、束さんとちーちゃんだけだよ！それ以外の人が入ろうとしたら、電気がバシンッとなる仕組みだから。ま、それ以前に入口を開けられないんだけどね」

「……………いつ作っただ？」

「三日くらい前かな。束さんにかかればお茶の子さいさい、朝飯どころか卵を割るより簡単にできちゃうのだよ」

「そうなのか…………」

千冬は、きよろきよろと辺りを見回したり、壁となっている鉄板に手をはわしたりと、しばし部屋の中を観察して回っていた。その表情は少しばかり驚きが滲んでいて、それは束を大いに喜ばせる。

「ちーちゃん、楽しい？面白い？」

「……………まあ、少しはな。束の考える物が凄いののは分かっていたが……実際にこういうのを見ると、驚くな」

「ふふつ、束さんが考えるのはこんなものじゃ無いよー。こんなの、ただの部屋でしかないからね」

上機嫌に束は笑うと、鞆を適当に放り投げてパンツと手を打ち鳴らした。すると、何カ所かの部屋の床がくるりと回転し、裏返った床からテーブルやベッドといった家具が現れる。

さしずめ、からくり屋敷というかのような光景を目の当たりにして、千冬は僅かに目を瞠った。

「どう？どう？本当は量子変換で作ろうかなって思っただけけど、それはまた今度ね」

といっても、千冬に止められているうちは作らずに終わりそうだ

が。

束は千冬の手を引いて、現れたベッドにダイブする。鉄板の壁に覆われていはいるが、そこは一つの部屋だった。

「ここはね、束さんとちーちゃんだけの、秘密基地なんだよ」

「そのようだな」

「誰も見てないし、気づかないんだよ。ここにいるのは、私とちーちゃんだけ」

「…………束？」

妖しげな気配に、千冬は自分の首に腕を回したまま寝転ぶ束の方に顔を向けた。

刹那、唇に押し付けられた感触にパチパチと瞬きを繰り返して、次には唇を割って入ってくるぬるりとしたそれに目を見開いた。

「ん、ふっ…………」

「んっ、ちーちゃん…………」

気づけば千冬の体にのしかかる様に、束の体が上にあつて。押し付けられた感触が束の唇だと、割って入ってくるのがその舌だと、そう千冬が気づいたのはその息が絶え絶えになったころだった。

「っん、ぷぁ…………はっ、ふ…………」

ようやく離された唇に、千冬は新鮮な酸素を貪るように肩を上下させて呼吸を繰り返す。

その千冬の様子を、束は彼女の上にのしかかったままで見下ろしていた。じっと、見つめている。

「ふ、は…………束…？」

「ちーちゃん……」

見つめてくる束を、千冬はどうしたんだと首を傾げて見上げた。  
その頬は微かに赤く染まっている。

「……嫌がらないの？」

「何を……今のを、か？」

「そう。キス……嫌じゃ、無いの？」

「……どう、なんだろうな」

嫌悪を感じたかといえば、感じず。それ以前に、今の行為に何かを感じたのかといえば、何も感じず。

ただ、幼いながらに千冬も今の束の行為の意味するところは分かるわけで、彼女が真に求める答えが何かも分かっていた。

「……私には、分からないよ。束」

その結果として、千冬の出せる答えはそれだった。  
告げられた答えに束は一切の感情を見せず、千冬を見つめる視線を逸らさない。そのままの体勢で口を開いた。

「束さんは、ちーちゃんが好きだよ」

「みたいだな」

「束さんが興味を持ったのは、ちーちゃんだけだよ」

「興味……私以外には、興味が無いのか？」

「無いね」

束はあっさりと、千冬以外の他を切り捨てる。それが当然のように、事実彼女にとってはそれが当然で。

その答えを受けて、千冬は考える様に視線を辺りに彷徨わせて、

そうして束を見た。

「なんで私に興味を持ったんだ？」

「さあ、なんでだろう。何となく……運命？」

「運命か……そういうのも、あるんだな」

気づけばただ、狂おしいほどに求めていた束にとって、なぜ千冬に興味を持ったのかは、ある意味では興味を惹かれたがそれほど重要では無く。

重要となるのは、今日の前に千冬がいる事で。そして千冬が、こうして会話しながら、自分を一切否定してこない事だった。

「……ちーちゃんは、不思議だね」

「……束は、なんでもお見通しなのでは無かったか？」

「そうだよ。そうなのに、ちーちゃんは不思議なんだよ。束さんは、ちーちゃんが分からなくて不思議なんだよ」

「……それは、そうだろうな」

「……？」

千冬は、何も難しいことなど無いように呟いて、言った。

「私は私の事をお前にそれほど、話していないだろ？」

「……そう、だね」

「知らないのなら、分からなくて当然なんだ。そんなに不思議に思う事でもないだろう？」

「……じゃあ、教えてよ。ちーちゃんの事」

「いいぞ」

別に隠すことは何も無いのだと、千冬は軽く頷いた。

さっそく話そう口を開いて、けれどそれからふ、と口を閉じて、



束に聞く。

「何から聞きたいんだ？」

「なんでもいいよ。ちーちゃんの事、たくさん知りたい」

「……と、言われてもな」

いざ話そうとすると、何から話せばいいのかわからなくなってしまい、千冬は少々困惑気味に眉尻を下げた。

「じゃあ、束さんが質問してもいい？」

「ん、ああ。良いぞ」

その方が助かると、千冬は束の提案に賛成して、束の質問を待った。束の質問は早かった。

「ちーちゃんの好きなものは？」

「静かなところだな。自分の部屋は、静かだし一人になれて好きだ」

「嫌いなものは？」

「煩いことは嫌いだな」

「一人が好きなの？」

「ああ」

「束さんと一緒にいるのは？」

「束の傍は落ち着くから好きだぞ？」

それは、前にも言ったたろ、と。千冬の答えに、束はそれまでの表情を破顔させた。

無の表情から一転、いつものように笑った束に、千冬は何となく落ち着く気分を味わいながら、そのまま投げかけられた質問に答えに行った。

「家では何をしてるの？」

「部屋にいるな。寝ていることが多いか」

「なんで？」

「なんで、と言われてもな……………それが、落ち着くからだ」

「ちーちゃんの親は？」

「親？」

東の口から飛び出したのは、彼女からは予想もつかない言葉で、千冬は思わず鸚鵡返しにそれを聞き返していた。

「東さんの親は東さんを嫌がってるけど、ちーちゃんの親は？」

「……………そうだな」

それまですらすらと答えられていた千冬の口が、止まった。

「……………」

「ちーちゃん？」

戸惑ったように東が千冬に声をかける。ハツとしたように千冬が目を瞬かせて、それから笑みを浮かべて答えた。

「親にとって、私はいらぬ子どもらしいぞ」

何度も聞いているから、間違いないと。そんな確信を持って千冬は答えた。

浮かんだ笑みはとても綺麗に作られて、それがあまりにも綺麗だったから、東は無性に腹立たしかった。

「ちーちゃん、また無理してる」

「ああ、そうだな」

「否定しないね」

「嘘じゃないからな」

千冬は、素直だった。束が見破ると、それを浮かべたままで肯定してみせるくらいに。

「笑っちゃやだ」

「なんだ、前は笑えと言ったのに」

「無理して笑ってほしくないよ」

「マンガみたいな事を言う」

さながら主人公のようだと、千冬はそう言って笑みを消した。笑みが消えれば浮かぶのは無で、鋭い目つきがさらに鋭くなったように思える。

けれど束はむしろその表情に満足して、いつかのように入れ替わりで笑みを浮かべた。

「ちーちゃんが無理するのは、束さん嫌だよ」

「そうか」

「だから、ここでは無理、しなくていいからね」

「……束と私だけだからか？」

「そうだよ。束さんとちーちゃんだけの、秘密基地。誰にも見られない秘密の場所だよ」

「……言っておくが、お前と一緒にいて無理をしたつもりは無いぞ」

「知ってるよ。束さんにはなんでもお見通し！」

当たり前のように束が言った。

束は千冬のすぐ横に体を寝転がせて、まるで抱き枕のように千冬の体を抱きしめて、耳に唇を寄せて囁くように言う。

「束さんは、ちーちゃんに会えてうれしいよ」

「……そうか」

「束さんは、ちーちゃんが大好きだよ」

「……知ってる」

ギュウツと抱きしめられて、押し付けられた少しだけ柔らかな胸に、千冬は目を閉じた。

閉じられた目から一筋、涙が伝うのを束は黙って見ているだけだった。

## 束の秘密基地（後書き）

小学生、彼女たちは小学生、だからまだいろいろと早い……と思うていたのに、気づけばどうして束が暴走。どうしてこうなった。つまりこれはこの小説における二人の方向をすでに示しているという事。つまりはそういうことです。

## 彼女たちの日常

学校では授業を受けながら束の相手をし、放課後は束の家に招かれ彼女の部屋か、秘密基地で過ごす。

千冬の日常は、入学してから一週間でそんな風に固まっていた。もつとも、その間に早くもクラスメイトに懐かれたり、担任から真面目で生徒たちの中心人物という評価を貰ったりしていたが。

「今日は何する？何するちーちゃん！」

「束のしたいことで良いが……ああ、そうだ」

その日もまた、千冬は束の家に向かっていた。束が後ろ向きで歩きながら千冬に尋ねて、千冬は言ってから少し考え、ふと思いついた事を言う。

「束の家の……篠ノ之神社、だったか？見てみたい」

「神社？ん、いいいいいよ。それじゃいこっか！」

「ああ」

それじゃあ近道、と束はくりりと方向転換をすると、脇道に入っていく。束の家と神社は近いけれど別の場所にあつて、この道の方が早く着けるのを束は知っていた。

既に近くまで来ていたのもあつて、方向転換から十分ほど歩くと、たくさん木に囲まれた大きな神社が見えてきた。ただし、通ってきた道は神社の裏側に通じていたらしく、まず目に入ったのは建物の後ろ側だったが。

正面へと回り込んで、千冬はまじまじと神社を見上げる。参拝客

の姿も無く、風に揺れる木々の葉の音が静かに響いた。

「これが篠ノ之神社だよ」

「結構大きいんだな。お参りしていくべきか……」

「ちーちゃんがそんなことする必要無いよ!」

「……神社の娘が何を言う」

「だって興味無いもん」

あっけらかんと言いつ束に、千冬はまあいいかと思い、気まぐれに辺りを見回してみる。広い境内は見通しが良くて、神社の傍に立つまた別の大きな木造の建物に、千冬は首を傾げて指差した。

「あれは？」

「剣道の道場だよ。見る？」

「いいのか？」

「いいんじゃないかな」

それじゃあ、と千冬は東に導かれるままに道場の扉を少しだけ開けて、中を覗いてみる。

中では、千冬と同じくらいかそれ以上の子どもたちが、師範であろう男性の掛け声に合わせて竹刀を振るっていた。

男性と子どもたちの掛け声が、千冬の耳を大きく揺さぶる。それに溜息を吐いて、千冬は扉を閉めた。

「ちーちゃん？」

「……中、凄いな」

「そう？東さんはこの中を見た事無いからな」

「見てみたらどうだ？」

「いいよ、興味無いもん」

「そうか」

いつもと同じ束の答えに、千冬もいつものように返して。

二人がそろそろ行こうかと歩き出そうとしたところで、道場の扉が大きく開かれた。

「……束、何をしている？」

「何もしてないよ。束さんはちーちゃんとお散歩してただけ」

「君は、束の……友人か？」

「はい。織斑千冬です、束ちゃんと仲良くさせてもらっています」  
「……………」

淡々とした挨拶をする千冬に、扉を開けた男性 束の父親、柳韻はどことなく苦虫を潰したような顔をした。

「………先ほど、中を覗いているようだったが、剣道に興味があるのか」

「いえ。何をしているのかと思ったので、覗かせてもらっただけです。ご迷惑をおかけしました」

軽く頭を下げて、千冬はそれっきり、興味を無くしたように道場に背を向けて歩き出す。束がそれを追いかけてその手を掴み、そのまま歩き出したのを、柳韻はじっと見つめていた。

それから数日が経った頃、千冬と束は秘密基地にいた。

秘密基地は最初に比べて見違えるほどに物が増え、束のいうところラボに変わっていた。

床のあちこちに伸びる配線避けながらベッドに辿り着いた千冬は、そこに腰かけて上機嫌でパソコンを弄る束を眺める。



束の使うパソコンは、ディスプレイもキーボードも全て空中に投影したもので、そのスペックは束曰く世界一だった。

「ね、ちーちゃん。今日は何をつくるつか！」

「束の作りたい物で良いんじゃないか？お前が作るの、どれも凄いし」

「えっへへへ、ちーちゃんに褒められた」

嬉しそうに笑う束は、話ながらもそのキーボードを打つ手を緩めていない。

束は、前々から考えていた発明品を続々と作りだしていた。というのも、今までは全て千冬に止められていたが、お許しが出たのだ。束と千冬しか入れない、この秘密基地で。その中でなら作っても良いだろう、と。

言っておくが、千冬は束が作るのを無理に止めていたわけでは無い。ただ、束が千冬の言葉に素直に頷いたが為に、作られていなかっただけ。

束の発明は、世に出れば一躍注目されるものばかりだ。そうなる  
と自然と束の周りに人が群がるのは必須。騒がしくなるのも必須。  
それを千冬が好まず、また千冬を第一に考える束がそれを望まなかっただけ。

見つからないと言い切れる保証があるこの空間でなら、騒がれる心配も無いからと。千冬が言い、束が頷いたから、この秘密基地は束の発明ラボと化している。

「何から作ろうかな。ちーちゃんセンサーにしようかなあ」

「……待て、なんだそれは」

「ん？ちーちゃんを探すセンサーだよ！ちなみに超小型GPSはもう開発済みだから、実はいつでもどこでもちーちゃんを発見出来るんだよ！！」

「ちなみに、そのGPSはどこにある？」

「言ったらちーちゃん、取っちゃわない？」

「とらない」

んー、と束は少しばかり悩んで見せたが、すぐにパツと笑ってここ、と首筋を指差した。

言われた千冬はそこに指を這わせ、すると確かに薄っぺらい何かが肌に張り付いているのを見つける。

「いつの間に……」

「ちーちゃんに抱き着いた時だよ。肌の色と同化するからまず見つけるのは不可能！」

「……………」

千冬は無言で、這わせていた指に力を籠めると、パキリと押しつぶした。

「ああっ!？」

「とりはしないが、壊す」

「ガガン……そんな、ちーちゃんへのプレゼントが……」

「プレゼントならもっと平和的なものにしろ。こんなの付けなくたって、私はお前の傍にいるだろうが」

「そうだけど、でもでもー……………」

「いいな？」

「……………はい」

睨みと共に凄まれて、束はしょんぼりと頷く。どうやらGPSは千冬の好みでは無かったらしい。そもそも、いつでもどこでも相手に分かる状態で、喜ぶ子どもの方が少ないだろう。

「んゝ、それじゃ、今日は量子変換装置にしよう!」

「ああ、この前言っていたやつか」

「そうだよ。いつでもどこでも必要らずゝ」

歌うように束は言って、タタツとキーボードを打ち鳴らす。それと並行して、束の座る椅子から伸びた機械の手が何かを組み立て始めて、千冬はそれを眺めていた。

千冬は束のように天才的な頭脳は無く、未だに彼女の作る物の仕組みは一切分からない。分かるのは、束が噛み砕きに噛み砕いて単純にした説明で聞いたことのみだ。

「ふんふふゝん」

「……楽しそうだな」

「んゝ、楽しいよゝ。ちーちゃんがいるからねゝ」

こうしてまた、一つの発明が生まれて、彼女たちの一日は終わりに近づいていく。これが彼女たちの日常だった。

そろそろ帰る時間だと、千冬が秘密基地から出た時。普段ならばまだ道場にいる柳韻が、道着姿のまま縁側から千冬と、続いて出てきた束を見下ろしていた。

「剣道を、やってみないか」

「……………はい?」

唐突なその提案に、千冬は彼女にしては珍しくぱかんとした顔で、何とも間の抜けた返事を返す。

柳韻は縁側から庭に下り立ち

何も履かずに裸足で

千冬に

竹刀を差し出した。

千冬は差し出された竹刀を間近に見つめ、首を傾げて不思議そうに柳韻を見上げて聞く。

「なぜ、私に？」

「……あまり、言うべき事では無いのかもしれないが、君は私の娘と同じように思えたからだ」

「束と、同じ？私がですか？」

「ちーちゃんと束さんが同じだと、なんか文句でもあるの？」

不機嫌を露わに千冬の隣に並んだ束が、柳韻を睨み付けた。柳韻が何とも言えない複雑な顔をして、二、三度首を横に振る。

「そうでは無い。だが、お前にも言っただろう。もつと物事に興味を持てと」

「別に何にも興味が無い訳じゃないよ。すぐに飽きちゃうだけ」

「それがいけないと言っているんだ。何にも興味を持たず、それを受け入れずにいるなど、決して」

「どうでもいいよ」

束が、ギュツと千冬に抱き着いた。

「ちーちゃんがいるもん。他はどうでもいい」

「束……」

「興味を持ってないものにどうやって興味を持てって言うの？完璧に理解できるものにそれ以上どう理解を示せて言うの？面白くないものを面白くないと思う事の何がいけないの？」

「……だからといって、全てを拒絶するのはいけない」

「別に拒絶なんてしてないよ。ただ興味が無いから気にしないだけ」

「……」

取りつく島も無いとは、このことだろう。柳韻は娘の答えに頷垂れた。

束の中には既に束なりの考えが根付いており、それが間違っていると分かっている。柳韻には正すことが出来ずにいる。正すことが出来ないから、柳韻は束に触れる事が出来ないままだった。

「……剣道のお話、お受けします」

「ちーちゃん……？」

重苦しいともいえる沈黙の中、千冬はそれまでの会話などまるで無かったかのように、答えを紡いだ。それに驚いたのは束だった。

「束と私が似ているかどうかは、お話しするつもりはありませんが……剣道については、お教えいただけるなら、教わりたいと思っています」

「……そうか」

「なんで？なんで、ちーちゃん？」

淡々と、紡がれる言葉に柳韻は頷き、束は疑問を投げかける。千冬はそんな束を見て、なんてこと無いように答えを告げた。

「教えてくれると言うのなら、教わるだけだ。他意は無い」

「そうなの？やってみたかったんじゃないの？」

「さあ……少なくとも、誘われなければやらなかったと思うぞ」

「そっかあ……じゃあじゃあ、束さんが誘ったら、ちーちゃん束さんに付き合ってくれる？」

「私の出来る事ならな」

あっさりと言ったのける千冬に、束は約束だよ！と笑みを浮かべ

た。それに頷き返した千冬に、柳韻はやはり、と内心で苦い思いを抱いていた。

「（この子は、束と似ている……）」

誘われなければ、やらなかった。けれど誘われたから、やる。

束は誘われてもやろうとしないが、千冬は誘われればやるという。そこは決定的な違いがあったけれど。

やると言いながら、そこに一切の千冬の感情が無い。彼女は束同様に、他の事に興味を抱いていないのが分かった。

「（どうして、こうも）」

笑顔で千冬に話しかける束と、それに無表情ながら答える千冬を見つめて、柳韻は竹刀を握る手に力を籠めた。

## 彼女たちの日常（後書き）

束にいつウサミミをつけさせるか、それが問題です。

## 家族、二人

束が秘密基地を作ったり、千冬が剣道を習ったり、束が発明をしまくったり、千冬が人気者になったりしながら、三年が経った。

束と千冬は九歳になり、七月になって束に妹が産まれた。

「箒ちゃん」

「……デレデレだな、束」

「だって可愛いんだよ！見てよほら」

「はいはい……」

両親への冷淡な態度がどこへ消えたのか、束はキャッキヤとベビーベッドで寝転んで笑っている妹、篠ノ之箒にだらしのない笑みを浮かべている。

それを呆れたように溜息を吐いて見ながら、千冬もその横に並んでベッドの中を覗き見る。伸ばされた小さな手が、束の指を握っていた。

「赤ちゃんって結構力持ちなんだね」

「そうなのか？」

「うん。だって、ほら」

「うっ」

束は悪戯に手を上へと持ち上げて、そうすると自然と、束の指を握っていた箒の体が少しばかり持ち合がる。

なるほど、確かに力持ちだと、指にしがみ付いたままの箒に千冬は納得した。



「ちーちゃんも、もうすぐ産まれるんでしょ？」

「そう話しているのを聞いたな。弟、らしい」

東同様、千冬にも姉弟ができる。もともと、両親から直接言われたわけでは無く、日に日に膨らむ母親のお腹と、両親が話している内容から判断しただけなのだが。

「あゝ、うゝ」

「……そろそろ、私は行くよ。剣道の時間だ」

「むう、最近ちーちゃんが東さんと一緒にいる時間が短くて、東さんは不満だよ」

「筈がいるだろ。終わったら寄るから、許せ」

傍らに置いてあった竹刀の刺さった鞆を持って、千冬は立ち上がる。最近の彼女は、師範と対等に渡り合うだけの力を持っていた。

それから、二カ月が経った。千冬には、弟が産まれていた。

「一夏」

「……………」

ベッドで眠る弟、一夏に千冬は少しばかり目を細める。

最近になって家へと来た一夏を、千冬はよく眺めていた。可愛くて仕方が無い、とでも言おうか、東の気持ちがよく理解できた。

自分と同じ血を持つ、血を分けた家族というのは、千冬には一夏が初めてだったのかもしれない。家族と言ふには、千冬と両親の間には壁があり過ぎた。

「……お前は、私が守るからな」

姉としての義務感か、それとも千冬の持つ感情ゆえか。

彼女は一夏の頬を撫でながら、誰にも見せたことの無い笑みを浮かべて呟いた。

気温も下がり、すっかり寒くなった十二月。ぱらぱらと雪が降り、帰り道を、千冬と東は歩いていった。

「明日から冬休みだねー、ちーちゃん」

「そうだな。宿題、やらないとな」

「あんなの一時間あれば終わるよ。東さんに任せなさい！」

「……分からないところはな」

東にかかれば、宿題などあつてないようなものなのだろう。

「そついえば、箒ちゃんはどんな様子だ？」

「可愛いよ」。既に東さんの心を掴んで離さない小悪魔さんだよ！」

「……小悪魔はともかく、元気みたいだな」

「いつくんはどうなのさ？見たい！」

「一夏も元気だぞ。来るか？」

「行く！久々ちーちゃんのお家だね」

「確かにそうだな」

千冬が剣道を習っているのもあつて、東の家に行くことの方が多くなっていた。一夏見たさに何度か来たことはあったが、比率的には東の家の方が圧倒的に多い。

「ただいま」

「いっくーん！束さんだよー！！」

「待て」

「ぶぎゅっ」

ぐざり、と束の首のあたりから嫌な音が鳴った。というのも、千冬がさっそく玄関を上がろうとした束の襟首を掴んだからである。

「挨拶くらいは、しろ」

「ち、ちーちゃん…首、首しまって……」

「しろ」

「……お邪魔します」

「よし」

パツと離れた束が、そのままボタンと廊下に倒れ込んだ。

初めて束が千冬の家を訪れた時以外、千冬は束が挨拶なしに家に入ろうとすると、実力行使で止めに入っている。

倒れた束を溜息を吐きながら跨いで、千冬はそのまま一夏の眠るベッドが置いてある両親の寝室へと向かう。

「一夏」

「……」

一夏は眠っていた。その寝顔に頬を緩めて、千冬はふ、と部屋を見回して首を傾げる。

見たところ、大きく変わったところはない。けれど感じる違和感に、千冬は鞆をその場に置いて部屋を漁り始める。

「ちーちゃん？」

「……」

千冬は険しい顔つきで、開けたタンスの中を睨み付けていた。首を抑えながらやって来た束が、その様子に気づいて名前を呼ぶと、タンスを閉めて振り返る。

「どうかしたの？」

「服が無くなっていた」

「服？」

開けたタンスの中身は空っぽだった。だがさすがに、これだけの情報では束にも事態を把握することは不可能で、首を傾げるばかりだ。

千冬は寝室を出てリビングを覗いた。こちらもまた大きな変化は見られなかったが、細かな物が無くなっているのに気付く。

正体のわからない違和感の中で、千冬はテーブルに置いてある封筒を視界に収めた。

「……………」

真っ白の封筒に入っていたのは、手紙だった。

たった一枚の手紙に目を通して、千冬は静かに目を閉じる。手紙を握る手に力が籠って、ぐしゃりと皺が出来た。

「ちーちゃん、どうしたの？」

リビングに入ってきた束は、そんな千冬の様子に心配を露わに声をかけた。目を開けて振り返った千冬が、手紙を握った手をだらりと下げて束を見る。

いつものように無表情で、束の良く知る彼女の表情のままだった。

「私と一夏は、捨てられたみたいだ」

「……なにそれ」

「さあ。常々、子どもは欲しくなかったと言っていたし……要らなくなっただんじゃないか？」

それは一夏が産まれてから更に増えた、両親の陰での言葉。こうなる日が来るのを、千冬はどこかで分かっていたのかもしれない。知らず知らずに覚悟を決めていたのか、手紙に書かれた両親の言葉を読んだ後も、然したる衝撃を受ける事は無かった。

「……ちーちゃん」

「なんだ？」

「ちーちゃんが望むなら、ちーちゃんを捨てた人たちを見つける事は出来るよ？」

「……凄いな。そんなことが出来るのか」

「東さんに出来ない事は無いよ」

「ああ、そうみたいだな。でも、必要ない」

「……いいの？」

「いなくなった人たちよりも、これからどうやって暮らすかのほうが大事だからな。親がいなくなると、まずはどうするべきなんだろうな」

千冬の中であっさりと、全てが処理される。消えた両親に一切の感情を抱かず、興味も無く　ただ、必要となることを考えるその姿は、子どもと言うには、奇妙過ぎた。

「……ん？どうかしたのか、東」

「……ちーちゃんは、泣かないんだね」

東はジツと、興味深そうに千冬を見つめている。見えないその奥を探る様な視線に、千冬は困ったように眉尻を下げた。

「……最近になって、思うんだが」

「ん？」

「私はどうにも、あまり感情が動くタイプでは無いらしい」

人や物を問わず、特に興味を抱くことも無く。喜びや悲しみといった感情に、左右されることも無い。

千冬は手紙をひらひらと揺らして、まあそんなことはどうでもいい、と呟いた。

「幸いにも、いくらかのお金は残してくれたらしいからな。すぐに生活に困ることは無さそうだ」

「なら、どうするの？」

「さあな。両親の親戚など知らんし、こういう場合は何処か施設にでも入るんじゃないか？」

「ええっ、それは駄目だよ!!」

考えながら言った千冬に、東は慌てて首を振った。

「ちーちゃんが遠くに行くのは、絶対駄目!!」

「そうは言ってもな……」

「んむ……あっ、そうだ!ちーちゃん、家に来ればいいんだよ!」

「はあ?」

何を言い出すのか、と千冬が目を丸くして驚いて見せると、東はえっへんとかかりに、小学生にしては大きくなり始めている胸を張った。

「東さんがちーちゃんといっくんの生活を保障してあげよう。目指せヒモ生活だよ、ちーちゃん！」

「……………ヒモ生活が何かは知らんが、とりあえず却下だ。断る」

「ええっ、なんでなんでちーちゃん!!」

「一方的に世話になるのは嫌いだ」

とはいえ、実際問題、千冬は手に持ったままの手紙を封筒に仕舞いながら考える。

そうして、一刀両断されて嘆く東を見て、声をかけた。

「頼みたいことがあるんだが」

「なにになに!!? 東さんなんでもするよ!!」

「…………両親の親戚、探せるか?」

「もっちろん!」

東は大きく頷いて、空中にパソコンを起動させる。

とりあえず、大人を探さなければと。千冬の出した結論はそれだった。

「…………ああん」

「ん?」

「うああああん」

「ありゃ、いっくん泣いてるね」

「のようだな」

封筒をテーブルに投げ捨てて、千冬は一夏が眠る寝室へと向かう。覗き込んだベッドで大泣きする一夏を抱き上げて、その体を揺らしてあやし始めた。

「一夏、泣くな。ほら」

「うああああん」

「大丈夫だ、大丈夫。お姉ちゃんが、守ってやるからな」  
「う……」

泣き止んだ一夏に、千冬はくすりと小さく笑った。

「お姉ちゃんは、ずっと一緒にいるからな」

抱いた温かな体を、離さないように抱きしめる。

その日、千冬の家族は二人になった。



## 家族、二人（後書き）

千冬の両親が蒸発したのっていつだろう……思いつつ、一夏が誕生してすぐに消えてもらいました。

ところで、この作品に転生者っているのだろうか。  
パターンとしては

- 1・まともな転生者（転生物の主人公のような、下心があまりない寧ろ原作にかかわるのを最初は拒否するようなタイプ）
- 2・テンプレ転生者（下心満載ハーレム願望の強い馬鹿のタイプ）
- 3・1と2両方が出る
- 4・出さずに原作キャラで頑張る

どのタイプでも、千冬と束が百合で仲いいのに変わり無し。

1のタイプなら、観察日記にでもなりそうかなあ。なんか俺の知ってる千冬と束と違うみたいな感じです。2はうざくなります。

どのタイプも楽しそうですが、さてどうするか……悩みどころですね。

参考までに、皆様の考えを聞かせていただけると幸いです。数字だけでなく、もちろんコメント有りでも喜んで！……あくまで参考までですが。

## 世界を変えるきっかけは

結果から言うと、千冬と十二歳になり、一夏は三歳になった。

束に頼んで探してもらった親戚は、母方の叔母、千冬の母親の妹にあたる人物だった。

どうやら姉妹仲はあまりよくなかったようで、会いに行ったはいが歓迎はされなかった。

ただ、事情を説明して一応は、有事の際の連絡先ということで承知してもらった。というよりも、千冬がそれ以上を望まなかったとも言っ。

どうしても大人の手が必要な場合のみだけという、何とも事務的な関係が出来上がった。

なので、千冬と一夏は変わらず、同じ家に住んでいる。そして今、千冬は一夏を迎えに、束の家に向かっている最中だった。

「ちーちゃん、今日は晩御飯食べてくの？というよりも食べていくと良いと思うよ！」

「……一昨日もごちそうになってるからな。遠慮しておく」

「えー。束さんはちーちゃんに、はい、あーんをしてもらわないとご飯が美味しくないんだよ！」

「そうか。ならば今後はしないとしよう」

「……あれ？可笑しいな、最近のちーちゃんの切り返しが冷たいよ？」

「気のせいだ」

じゃれ合うような会話をしているうちに、束の家の目の前までやって来る。

千冬が学校に行っている間、一夏は篠ノ之家に預かってもらっていた。織斑家の事情を知った柳韻が言い出したことである。

そのおかげで、赤ん坊の一夏の面倒を見てもらうことが出来て、千冬としては安心したのも懐かしい話だ。

「お邪魔します」

「ちふゆねえ！！」

千冬が玄関に入ると、待ち構えていたようにぶつかってくる小さな子ども。受け止めた子どもを、千冬はポンポンと頭を撫でて歓迎した。

「一夏、いい子にしてたか？」

「してた！ほーきちゃんと遊んでたよ」

「そうか。一夏と遊んでくれてありがとうな、箒ちゃん」

「ん、いえ、わたしは……」

「ほーきちゃん束さんがいなくて寂しくなかった？束さんは箒ちゃんがいなくて寂しくて寂しくてうさぎさんだったよー」

「……束、離してやれ。箒ちゃんが苦しそうだ」

「えっ……ああ、ごめんねほーきちゃん！」

「きゅう……」

力いっぱい、ぐりぐりと抱きしめられていた箒が、束の腕の中でぐったりとしていた。

束の箒への溺愛は止まることを知らず、未だに上昇中だ。他に興味を持たない分、興味を持った相手に注がれる感情は桁違いなのだろう。

「ちふゆねえ、今日はもう帰るの？」

「ああ。道場も休みだしな……もう少し、遊んでいくか？」

「いいの？」

「私は良いぞ。箒ちゃん、一夏と遊んでもらえるか？」

「えっ、あ……うん」

束に抱きしめられたまま、箒は千冬の言葉に小さく頷いた。一夏がそんな少女の手を取って、勝手知ったるなんとやらの勢いでリビングに向かうのを千冬は見届ける。

「いつくんにほーきちゃんとられたー！！」

「すまん」

駄々っ子のように喚く束に、千冬は形ばかりの謝罪をして玄関に上がった。一夏が衝突してきたのは入ってすぐだったので、まだ靴すら脱いでいなかったのだ。

「さて、一夏がまだ遊んでいるのなら、私はどうするかな……」

「ちーちゃんはもちろん、束さんのお部屋へゴーだよ！いざ二人の愛の巣へー！！」

「一夏の情操教育に悪い言葉を言うな」

「ついたたああああい！！ちーちゃん、ちーちゃんの愛が痛い、痛い痛い！！」

ガシツと束の頭を掴んだ手が、ギリギリと力を籠める。束の部屋に置いてあった本を千冬が読んだことで会得した技だが、早くも千冬の必殺技の一つとなりつつあった。

一騒動を起こしてから束の部屋へとやって来て、千冬は定位置となっているベッドに腰掛ける。束は当然のように千冬の隣に座った。

「ねえ、ちーちゃん。ちーちゃんは中学、どこに行くの？」

「近いところだな。束は、進学校か？」

「うつん。ちーちゃんと同じところ」

「……お前、頭良いだろう」

もったいないぞ、そう続いた千冬の言葉に、束はむっと頬を膨らませる。不満そうに千冬を見ていた。

「ちーちゃんは、束さんと離れ離れになっても良いって言うの?」

「別に、学校が違ったくらいでお前と友達で無くなるわけじゃないだろう?」

「それでもやなの!ちーちゃんは束さんと一緒にいないと駄目なんだよ」

「誰が決めた」

「私が決めた」

ドサリと、千冬の体がベッドに倒れ込む。原因は、千冬の体に覆いかぶさる束だ。

そういえば前にも、こんな風に束がのしかかって来たことがあった。千冬はそう他人事のように思い出していた。

「それとも、ちーちゃんは束さんと一緒にいたくないの?」

「いいや?いれるものなら、一緒にいたいな」

「それは、どうして?」

「……どうしてだろうな」

ただ、一緒にいてくれるというのなら、一緒にいたいと思う。きつと束がそれを望まなかったなら、千冬はまた無表情でそれを見送るのだろう。

束には、それがよく分かった。自分は千冬が離れていくと行ったら、勝手に着いて行っても一緒にいたいと思うのに。

「ちーちゃん、大好き」

「ん……知っている」

「ちーちゃんは？」

「さあな。少なくとも、嫌いでは無いぞ」

答えはいつも変わらず、千冬は淡々と束の問いに答えるだけだった。

いつもなら、束もそこで引き下がる。けれど今日は、いつもと違った。

「ちーちゃんにとって、一緒にいたいのは誰？」

「…束？」

「教えて」

「……………一夏と、束だな」

大事な弟と、幼稚園からの大事な友達。一緒にいたいと思うのは、当然の事だろう。

「離れたくない？」

「ああ」

「一緒にいたい？」

「ああ」

「……………なら、一緒にいようよ。ちーちゃん」

離さないで、離れないで、一緒にいようよ、と。

下りてきた唇に唇を塞がれながら、千冬はその願いを受け入れたかのように、目を閉じた。

夕日でオレンジに世界が染まる頃、千冬は一夏の手を引いて帰り道を歩く。

結局、晩御飯を御馳走になることはしなかった。柳韻たちに声をかけられはしたが、またの機会にと丁重にお断りした。

「今日の夜ご飯は、何がいい？一夏」

「んと……ハンバーグ！」

「そうか。なら、一緒に作ろうか」

「うん！」

無邪気に頷く一夏を見て、千冬の顔は自然と綻ぶ。束の前でも、他の誰かの前でもない、一夏を見る時だけにする表情。それは、一夏の姉としての顔だった。

「箒ちゃんとは、何をして遊んでいたんだ？」

「鬼ごっこ！それから、かくれんぼと……」

何をしたのかを、一夏は事細かに千冬に話す。鬼ごっここの最中に箒が転んで、泣き出したのをおまじないで泣き止ませた、だとか。とても楽しそうに話す一夏の笑顔を、千冬は穏やかな気持ちを抱えて見つめるのだった。

空に輝く星を見ながら、束は彼女にしては珍しく、ぼんやりとしていた。

天才の思考が止まることは無い、といったのは彼女だったが、そんな彼女の思考が止まる。正確には、ある一つの事柄のみに集中する事があった。

「ちーちゃん……」

織斑千冬、愛称はちーちゃん。東にとって初めて興味を持った人間で、その存在は彼女の中で大きくなっている。

「ほーきちゃんも、いつくんも好きだけど……ちーちゃんだけは、違うんだよね」

もしもこの先、箒が東の傍を離れていくとして。東は向こうが接触を望んでいなかったとしたら、自分から接触しに行きはしないだろう。一方的に見ているのは別として。それは一夏にも同様であるけれど、もしも、仮に、有り得ないだろうけれど、たとえば、千冬が東から離れて行き、接触を望まなかったとして。東は、それでも接触するのだろう。千冬が望んでいなかったとしても。

「離したくないんだよねえ」

離したくないし、離せないのだ。それほどに千冬が存在は、東の中で大きくなりすぎている。

だから、東は千冬の望まない事をしない。開発した物も、世間に発表する気にならない。

千冬が凄いと言ってくれたなら、東はそれで満足していた。

「どうしよっかな」

東が望む限り、千冬は東の傍にいろだろう。絆が切れる事は無いだろう。それならそれで、いいはずだった。

だけど、それだけでは駄目だと思ってしまった。今の絆とはまた別の、繋がりが欲しかった。

東と千冬、二人の繋がりが。



「…………あ」

考える束の眺める中、夜空を流れ星が光って消えた。

束はパチパチと瞬きを繰り返して、星を眺める。キラキラ光る星と、ポンと空に浮かぶ月。それら全てを視界に収めて、閃いたそれに思考が一気に加速する。

「うん、いいね。そうしよう」

誰に言うでもなく、束は満面の笑みを浮かべて部屋を飛び出した。お風呂に向かうところだったらしい筈が、階段を飛ぶように下りてくる姉の姿に目を丸くするのも気にせず、庭へと出ると秘密基地への扉を開く。

梯子を下りるのがもどかしくなりながら、最後のメートルをピヨンと飛び降りて、先日作りだした球体の椅子に座った。椅子が、束の体に合わせて形を作り、彼女の後ろの背もたれ部分から、何本もの手が生える。

そうした作業用の椅子に座った束は、すぐにパソコンを呼び出して空中に現れたキーボードを叩く。六枚のディスプレイと、六つのキーボード。それら全てを操って、彼女はディスプレイを数式と図形で埋めていった。

「束さんが作って、ちーちゃんが乗る。うんうん、いいね。完璧だよ」

それは、彼女が求めた繋がり。製作者を自分、使用者を千冬とした、初めての事。

「ちーちゃん専用の、すっごいの作っちゃおう」

そうして二人で、宇宙へ行こう。まだ誰も知らない事がたくさんある、彼女の好きな静かな場所へ。

天才は、人知れず天災へと変わる。きっかけはとても些細な願いから、けれど彼女にとっては、大きな願いから。

世界を変えるきっかけは（後書き）

束がやりそうですね。天災少女がどうするのか、ご覧あれ。

そうしてそれは作られた

「インフィニット・ストラトス？」

場所は、秘密基地。

空中に投影されたディスプレイに表示された名前を読み上げて、千冬は不思議そうに首を傾げた。

「何をする物なんだ？」

「ふっふっふ、これはね、宇宙へ行く為の物なんだよ！」

「宇宙？」

そうだよ、と束が大きく頷いた。千冬はまた、思いもよらない単語に驚きながら、ジッと別のディスプレイに表示される設計図を見つめる。

今年から中学生となった千冬だが、やはり束が手掛ける設計図は難度が高すぎて読み取ることが出来ない。

「宇宙へ行くには、訓練が必要だと聞いたぞ？」

「大丈夫だよ。このISは、宇宙空間での作業を前提としてるからね。訓練なしでも自由自在!!」

「……………本当に、お前は作る物が現実離れしているな」

「えっへっへ、もっと褒めて褒めて」

「凄い凄い」

ディスプレイを消して抱き着いてくる束を、千冬は受け止めて頭を撫でる。

「ねっ、ちーちゃん。完成したら、乗ってくれる？」

「いいのか？」

「もっちゃん！というより、ちーちゃん専用にするからね。ちーちゃんに乗らなきゃ意味が無いよ！」

「私、専用？」

「乗り手に合わせて、機体が成長するんだよ。だから、ちーちゃんに乗ったらそれはもうちーちゃん専用だよ！」

「それは、また……」

随分と凄いものを作ったなと。千冬はそう思いながら、束の説明を聞き続けていた。

千冬と束は、地元の中学校に進学していた。

元の小学校の近所に中学校があったことから、持ち上がるようにして殆どの生徒が、千冬と束も知っている生徒だった。もっとも、束の場合は一方的に知られているだけで、彼女は周りに興味が無かったので知らなかったが。

ただ困ったことに、千冬は入学して早々に、またもクラスの中心人物という役割を与えられてしまった。同じ小学校の出身者が、クラスの三分の一を占めていたのが原因でもある。

「織斑さん、相談があるんだけど」

「あ、織斑。ちょっと聞きたいんだけどさ」

「織斑さん」

「織斑」

お手洗いに少し席を立って、束から離れただけでこれである。普

段は、束の傍にすることから、千冬に話しかける者は少ない。

「ちーちゃん、相手にしなきゃいいのに」

「話しかけられてそれを無視していたら、人間、集団の中で生きていけないぞ」

「束さんはちーちゃんがいればそれでいいのー」

特製ノートパソコンを机に置いて、束は拗ねたように言った。

空中投影のパソコンは、千冬以外の人間がいると使われない。騒ぎになるのが目に見えているからだ。

ちなみに、千冬と束は同じクラスで、席も隣同士だ。入学前日、クラスを確認しようとした千冬に、束がすぐに情報を教えたことから、彼女が操作したと発覚している。

「束はマイペースだな」

「む……ちーちゃんだってそうでしょ？」

「そうか？」

「そうだよー」

「……そうか」

腑に落ちない、といった表情で、千冬は束の言葉を聞いていた。

「ところで束。今日もISの調整をするのか？」

「もちろんするよー。機動性とか色々と改良したいからね！」

「……もつと凄くなるのか」

「当然。だって束さんがちーちゃんの為に作るんだよ？あの程度で満足するわけ無いよ」

千冬が、束にIS>インフィニット・ストラトス<の設計図を見せられてからというものの、実際に組み立てられたそれを、千冬は毎

日のように起動させていた。

外で試すわけにはいけないので、その為に束が秘密基地を広げた程だ。広くなったそこで、ISを使い飛び回るのを、千冬も少しばかり楽しみにしていた。

「ちーちゃんも、ノリノリだね!」

「まあ、宇宙というのは面白そうだしな……何より、飛べるというのが面白い」

「なら、今度は外で飛ぼうか?」

「煩くなるから駄目だ」

「ぶー」

結局は、千冬にとって静かに過ごせることの方が重要で。それは束も十分に承知していたけれど。

「ちーちゃん、外で飛びたくないの?」

「……飛べたら楽しいとは思うが、きつと騒がしくなるだろう?お前の作る物は、凄すぎるんだ」

「ちーちゃんは気にし過ぎだよ」

「束が気にしなさすぎなんだ……とりあえず、声をかけられたら返事くらいはしろ」

「えー」

「いいな?」

「……………ぶー」

先は長そうだと。千冬は束の反応に、小さく溜息を吐いた。

放課後、千冬と束は保育園に立ち寄る。一夏と篤も今年で五歳、

二人揃って同じ保育園に入園したのだ。

「ほーきちゃーん!!」

「一夏」

「ちふゆねえ!!」

「姉さん」

一夏と箒は迎えを待っていたらしく、二人とも玄関にいた。ダダッと駆け出し千冬に飛びつく一夏を追って、箒も駆け足で追いかけてくる。

「待たせてすまなかったな」

「ううん。箒と一緒にだったから!」

「そうか。ありがとう、箒」

「い、いえ、別に……」

少しばかり頬を染めて、箒が首を振る。

「箒ちゃん、かわいい〜〜!!」

「ね、姉さん……」

相も変わらず束の箒へのデレ度はMAXだった。若干、箒が引いている。

千冬はそんな束に呆れた表情を見せながら、一夏の手を取って保育園を後にする。置いて行かれかけた束が、騒ぎながら追いかけてきた。

「待つて待つてちーちゃん!!」

「煩い、黙れ」

「束さんを置いて行かないでほしいんだよ!あ、それとも箒ちゃん



にじえらしい？大丈夫安心していいよ、何せ束さんのちーちゃんへの愛情は規格外」

「だ、ま、れ」

「ああ、あれね？ちーちゃんの愛が痛いよ？束さんの頭パーンってしそっだよ？」

「させる気だからな」

「ちーちゃんの愛がいたたたたっ！！！！」

「ふんっ……」

「ぶぎゃ」

ガシツと頭を掴みアイアンクロー。千冬の束への使用率がダントツである。

地面に落とされそのまま悶える束を、一夏と箒がおー、と眺めている。毎度毎度見ている光景なので、二人とも慣れ切っていた。

「さて、馬鹿は放っておいて帰るか」

「ちふゆねえ、今日は仕事は？」

「休みだ。一緒にいられるぞ、一夏」

「やった！」

千冬はほぼ毎日、生活費を稼ぐために働きに出ている。それは一夏も知つての事だ。

夜を一人で過ごす事が多くなってしまっ一夏にとって、千冬が休みで一緒にいられるのはとても嬉しい事だった。

「今日は久々に、私のご飯を作ろう」

「本当！？」

「ああ」

「へへっ、やった！」

「うゝ、いいーないーな。いいなゝいっくん。ちーちゃんの手料理束

「さんも食べたい!!」

「来るなよ」

「あれ?なんでバレタの?ちーちゃんエスパー?」

「さあな」

やはり、乗り込むつもりだったらしい。先手を打たれて、束がむうっと頬を膨らませる。

一夏と箒は、頭上で飛び交う二人の会話に、ふと顔を見合わせて首を傾げた。それは二人だけが気づいた違いだった。

「あ、織斑さん!」

「……………」

なぜか後ろから名前を呼ばれて、千冬は首を傾げつつ振り返る。後ろを歩いていた束の向こうで、同じ制服を着た少女が三人、走り寄ってくるのが見えた。

「奇遇だね、織斑さん」

「ああ」

「織斑さんたち、今帰り?」

「その子、織斑さんの弟?」

「……ああ、そうだが……私に、何か用事か?」

束の横を回って来た三人に、千冬は少しばかり体をずらす。一夏が背中に隠れた。

自分を隠した背中を見上げて、一夏はパチパチと瞬き。箒もまた、先ほどまでの楽しそうな表情とは打って変わって無表情の束に、不安そうに瞳を揺らす。

「(まただ)」

「（姉さん、どうしたの？）」

子どもは、時に大人よりも敏感に、他人の心を察する事がある。  
二人は自分の姉たちが、自分たちという時と全く違う態度で、目の前の少女たちに対応している事に、不思議な思いを抱いた。

「えっと、用事っていうか……」

「あの、よかつたら一緒に帰らない？」

「私たちも、帰りこつちだから……」

「ああ……」

ようやく少女たちの目的が分かって、千冬はちらりと束と、背後の一夏と箒を見る。

「悪いが、弟たちもいるのでな。遠慮させてくれ」

「そ、そっか」

「その、ごめんね？」

断られた少女たちが、そそくさと退散する。それを見送ることも無く、千冬は一夏に向き直って小さく笑った。

「さて、帰ろうか」

「ちーちゃんちーちゃん、束さんもちーちゃんの手料理食べたいよ

ー……」

「また今度な」

「えっ、本当？今度作ってくれるの？」

「……………」

「あれ？なんでそこで黙っちゃうの？ねえねえねえ」

「煩い、黙れ」

どこか柔らかくなつた千冬の声と、明らかに変わった束の表情。一夏と箒は顔を見合わせて、そんな姉たちの変化に首を傾げるのだった。

「なあ、一夏」

「んん？」

「姉さんはどうして、あんな顔をするんだろうな」

千冬と束の後ろを歩きながら、箒は先ほどの姉の変化について首を傾げていた。

「さあな。でも、ちふゆねえだつて、なんか違ったぞ？」

「……たしかに」

「それに、束さんと話してる時のちふゆねえ、俺と話してる時とどっか違うし」

「そうなのか？」

「うん……でも、よくわかんねえよ」

「私もだ」

二人には未だ、自分たちの姉が何を思ふのか分からず。

一夏は束にじゃれつかれている千冬が、自分に向けるような笑みを一切浮かべない事に気づきながら、変わらず首を傾げていた。

「なんでだろうなあ」

「なぜだろうな」

二人が答えに辿り着くのは、まだ先のようにだった。

## そうしてそれは作られた（後書き）

千冬と束ばかりが出るので、その他に対する彼女たちの反応がなかなか書けない……。

ついに作られたIS。束と千冬がどうなるのか……どうなるのでしょうか。

## 家族仲は非常に良好

「……………ん、うう」

「くか」……………」

ある日曜日の事。千冬は抱き枕よろしく抱きしめていた一夏をそのままに、目を覚ました。

一夏が赤ん坊の時から一緒に寝ていたのがそのまま続いて、現在も同じベッドで一緒に眠る毎日だ。冬場は温かくて良いらしい。

「……………」

無言でベッドヘッドに置かれた目覚まし時計を見る。七時少し前だ。

今日は珍しく、学校と仕事の休みが被っていた。それを知った一夏がはしゃいだのが昨日の事だ。

「……………起きるか」

それはともかく、朝食を作らねばと。千冬はそつとベッドから抜け出すと、眠り続けたままの一夏の頭をさりと撫でて、キッチンへと向かった。

一夏が目を覚めたのは、それから十五分後の事だった。何やら自分を包んでいた温もりが減った気がしながら目を開けると、昨日

の話では今日は休みだと言っていた姉がいない。

驚いた一夏は飛び起きて、バタバタと足音を立てながらリビングへと飛び込み、物音に気付いて姉の名前を叫びながらキッチンへと飛び込んだ。

「千冬ねえ！」

「おはよう、一夏。どうした？そんなに慌てて」

飛び込んできた一夏を、千冬は顔だけ振り返って首を傾げる。朝食作りの最中だったようで、野菜や卵といった材料がキッチンに並んでいた。

一夏はそれらを確認すると、ぶんぶん大きく首を振って、慌てていた自分を少し恥ずかしく思いながら千冬に答えた。

「な、なんでもない。おはよう、千冬ねえ」

「もうすぐ出来るからな。顔を洗って来い。あと、着替えもな」

「うん」

とたとたと、飛び込んできた時とは反対に大人しい足音を立てながら、一夏はキッチンを出て行った。

千冬は止まっていた朝食作りを再開し、出来上がったものを盛り付けてテーブルに並べる。

箸まで並べ終えたところで、着替えを終えた一夏が戻ってきた。目を輝かせて並んだ朝食を見る一夏に笑いながら、千冬は椅子に座り言う。

「さ、食べるか」

「うん！いただきます！」

「いただきます」

嬉しそつに食べ始める一夏を見つめながら、千冬もまた朝食を食べ進めて行った。

朝食を食べ終え、後片付けは一夏と一緒に終わらせて、千冬はリビングのソファに座って考える。

「千冬ねえ、どうかした？」

「ん……いや」

テレビのリモコンを使ってチャンネルを弄っていた一夏が、何やら考え込む千冬に声をかけた。

時刻は八時過ぎ。日曜日放送のアニメのオープニングを聞きながら、千冬は一夏に尋ねた。

「せつかくの休みだし、どこか出かけるか？」

「え、どこに!？」

「そつ、だな……一夏はどこが良い？」

「俺は千冬ねえと一緒になら、どこでもいい！」

「……………」

一夏の回答に黙り込んで、千冬は頭を悩ませる。

「（遊園地とか、動物園は、金がな……どうしたもんか）」

生活こそできているが、基本は貧乏な織斑家の財布事情。日頃、一人で寂しい思いをさせている一夏を喜ばせてやりたいと思っても、なかなかいい考えが浮かばず千冬は困り果てた。



「……なあ、一夏。本当に行きたい場所」

「ちーちゃ~~~~ん!!!」

「無いのか？」

「んー、だって、千冬ねえと一緒にどこでも楽しいし」

「そうか……なら、どこが」

「ちーちゃ~~~~ん!!!」

「良いだろうな……」

そんな時、ピンポンという音が響いた。それに気づいて千冬が立ち上がり、つられるようにして一夏も立ち上がり、二人揃って玄関に向かう。

扉を開けた先に立っていたのは、箒と束だった。

「おはよ! 箒」

「お、おはよう、一夏。おはようございます、千冬さん」

「ああ、おはよう。遊びに来たのか？」

「あ、えっと……遊びに来た、といえますか……」

「やあやあちーちゃん! おはようちーちゃん! とりあえず朝の挨拶に口づけといこうか! ね、ね、ね!!!」

ちらり、と箒が戸惑いがちに視線をやった先では、今にも千冬に飛びつきそうな束がいた。というよりも、既に飛びつこうとしたのを、千冬に顔を押しさえられて止められているのだが。

「とりあえず入るといい」

「はい、お邪魔します」

「お邪魔しま〜す……あれ、ちーちゃんちーちゃん! なんで束さんだけ扉閉めちゃうの? まだ束さんが中に入ってないよ? なんで鍵閉めちゃうの? ちーちゃんちーちゃんちーちゃん」

「近所迷惑だ、やめろ」

箒が入り、束が入る直前で閉められた扉を前に騒いでいた束だったが、千冬が力いっぱい押し開いた扉に弾き飛ばされて沈黙。千冬は仕方なしに、顔を赤くして倒れる束を家の中に引きずり込んで、引き気味の箒と目を丸くする一夏をリビングに行かせた。

「で、箒は大方お前が無理やり連れて来たんだろうが……何の用だ？束」

「遊園地行こうよ、ちーちゃん！！」

廊下に投げ捨てられた束がガバツと起き上がり、千冬に抱き着いた。口づけは諦めてハグにしたらしい。

とりあえず抱きしめられたまま、千冬は束の言葉に首を傾げて見せた。

「遊園地？」

「そうだよ！実はね、昨日商店街でくじ引きがあったんだよ」

「ああ、そんなのもあったな」

「それでなんと！！箒ちゃんが特賞の遊園地フリーパスを当てたんだよ！」

「箒がか。それは凄いな」

「そうでしょ？凄いよね流石箒ちゃんだよ可愛い正義だよね。つてなわけで、遊園地に行こうよちーちゃん！！」

「……経緯は分かった。とりあえず、一夏にも話さないとな」

束をくつつけたまま千冬が話しに行った時には、既に一夏は箒から話を聞いた後だった。

行きたそうにしている子ども二人を前に、首を振るつもりなど毛頭なかった千冬は、すぐに準備に取り掛かることになる。

そんな経緯の元、やって来た遊園地。新しくできたばかりらしいそこは、日曜日ということも相俟ってたくさんの人で溢れていた。

「おお、ちーちゃんの眉間の皺がいつもの五割増しだよ」  
「……久々にこうも煩い場所に來たからな」

学校という人の集まる空間で慣れはしたものの、未だにこうした騒がしさが嫌いな千冬であった。

「千冬ねえ、どこから乗る!？」  
「お前と箒で決める。ああ、はしやぎ過ぎてはぐれるなよ」  
「分かった!行こうぜ、箒!！」  
「あ、ああ……!」

先導するように歩き出した一夏と箒を追って、千冬と束も人混みを進む。小さな二人を見逃さない様にしなければならず、大変な道のりであった。ちなみに、束は常に千冬の腕と自分の腕を組ませていたので、はぐれる心配は無い。

「千冬ねえ、束さん。これ乗ろう!」  
「おお、ジェットコースターとは、いっくん王道だね」  
「うう……」

乗る気満々の一夏の隣で、箒がそれを見上げて小さく呻く。その顔は心なしか青ざめていた。

「……恐いか?箒」  
「ち、千冬さん……う、はい……」

「ふむ……」

千冬は少しばかり考えて、不意にジェットコースターを見た。二人掛けの席で八席。コースも一回転があったりと、なかなかスリルがありそうだ。

「……一夏」

「ん？なに、千冬ねえ」

「箒が恐いらしい。お前、乗るときに手でも繋いでやれ」  
「ち、千冬さん！？」

千冬が言った途端に、ボンツと箒の顔が真っ赤に染まる。一夏が目を丸くして箒を見て、首を傾げた。

「箒、恐いのか？」

「うつ……こ、恐くなど無い！」

「んー、そっか？ま、いいや」

「い、一夏！？」

ギュッと、体の前で組まれていた手を取って、一夏はジェットコースターの列に並んだ。それに慌てたように声をあげた箒を、不思議そうに見る。

「なんだよ、どうかしたのか？」

「あ、いや、あのその……て、手を……」

「手？」

「箒」

握られた手と一夏を交互に見て、何事か言おうとする箒に、千冬はボンツと軽く頭に手を置いて制した。

「一夏、離すなよ」

「?うん!」

「あう……」

更に強く握られた手にドギマギする箒に、千冬は小さく笑った。

「あはは、箒ちゃん照れてるね」

「そのようだな」

一夏に笑いかけられて、しどろもどろに答えるその様子は、恋する少女そのもので。

はたから見ると明らかなその姿を、束は千冬に抱き着いたままで満足そうに眺めていた。

「箒ちゃんはいっくんのお嫁さんで決定だね!」

「さあ、どうだろうな」

「むう……ちーちゃんだって、その方が良いでしょう?」

「それは、まあそうだな」

束は当然ながら、千冬も二人を見て満更でもなさそうに笑っている。見守る瞳は細められ、その笑みはとても優しげだった。

「…………ちーちゃん」

「ん?」

ぽつりと呟くように名前を呼んで、振り返ったその表情は、またいつものように無表情で。

束はその変化に、子どものように頬を膨らませた。

「な〜んで、束さんには笑ってくれないのさ」

「なんで、と言われてもな」

「ぶーぶーぶー」

「……………煩い、黙れ」

「ぶぎゃ」

溜息と同時に、首に回っていた手を解いてその体を地面に落とす。潰れたような声があがった。

「（……………笑えと言われてもな）」

一夏を見て笑うのは、愛する弟だからで。箒もまた、束の妹ということで、また一夏の友達でもあるから、妹のように思えて。だから笑うけれど。

他人に向けるような、上辺だけの笑みを浮かべろというなら、浮かべられたけれど。

束はその誰とも違う。ある意味では、千冬の中の唯一の存在だった。

「うっ、ちーちゃんの愛情は今日もまた過激だね」

「嬉しいだろ？」

「もっちゃん！ちーちゃんの愛はいつでもどこでも大歓迎！！」

バツと両手を広げる束を呆れたように見やって、千冬はそれに背を向けて列に並ぶのだった。

一頻り遊び終えて、もうそろそろ日が沈みだしそうな頃。

一夏は遊園地を周る間、殆ど箒の手を握ったままだったし（千冬

が、迷子になると困ると言ったのも原因である）、束は千冬にくつついたままだった。

そんな彼女たちが、最後に乗ることにしたのが

「早く来ねえかな」

「そんなに慌てずとも、すぐに来るさ」

そんな風に話しながら、一夏と箒が見上げているのは、観覧車。ゆつくりとした速度で回る大きなそれは、遊園地の定番の一つかもしれない。

「……そうだ。ねえ、いつくん」

「ん？」

「せつかくだし、箒ちゃんと二人つきりで乗ったら？」

「ふえっ、姉さん!？」

何やら思い付いたらしい束が、一夏にそう提案して。箒は突然の姉の言葉に驚きを隠せない。

「いいでしょ？ね、そうしょ。そうするべきだよ」

「んー、でも、千冬ねえは？」

「ちーちゃんは私と乗るから良いんだよ。ねえ、ちーちゃん」

「……そういう事らしい。一夏、箒と楽しんで来い」

「……千冬ねえがそう言うなら、まあ、良いけど……」

頷きはするも、決して不満が無いわけでは無いらしく、唇を尖らせてムツとした顔をしている。

意外と早く順番が回って来て、千冬は先に乗り込む一夏の頭を軽く撫でてやってから、それを見送った。

そうして、今度は千冬と束が観覧車に乗り込む。ガシャンと閉め

られた扉と、二人つきりとなった空間に、束が満面の笑みで千冬の対面に座っていた。

「んっふふ、ちーちゃんと二人つきり！」

「……お前、これを狙っていただろ」

「まあね！いつくんと篝ちゃんと一緒に良いけど、ちーちゃんと二人つきりの方が束さんとしては超ハッピー！！」

「まったく、お前は……」

どこまでも自分中心な束に、毎度ながら溜息は禁じ得ない。ある意味、束の前で最も多い千冬の感情表現だった。

「まあまあ、良いじゃないちーちゃん。せっかくだしこの二人っきりの密室空間でとくと二人の愛を確かめ合おうよ！手始めにハグからね！！」

「……はいはい」

抱き留めるのも慣れたもの。そのまま眺めた窓の外は、綺麗な夕焼けが広がっていた。

「束」

「ん？なんだいちーちゃん」

「今日は、誘ってくれてありがとうな」

一夏も楽しそうだった、と。千冬はそう感謝を口にする。

それに呆けたような顔をした束だったが、すぐに感激したように頬を染めて千冬に抱き着く腕に力を籠める。尻尾があれば切れんばかりに振られている事だろう。

「いいよいいよ！もうその言葉だけで束さん溺死寸前、ちーちゃん



の愛は底が見えないよ!!」

「またお前は、いつも訳の分からんことを言っな」

少しばかり苦しく感じながら、千冬は言っつて、束の体を僅かに離れさせる。

そうして、もう一度抱き着かんとしてきた束の唇に、自らの唇を寄せた。

「！」

「んっ……自分からすると、結構恥ずかしいものだな」

すぐに離れた唇だった、千冬は微かに頬を染めて束から視線を逸らす。

「いつもは、お前からだから……礼だ。たまには私から」

「ちーちゃん!!」

「っん……」

感極まった声と共に下りてくる唇が、またも千冬の唇を塞いだ。くちゅりと音が響いたのは、千冬の唇を割って入ってきた舌のせいだろう。

逃げる隙も無く絡めとられた舌に、千冬は強く目を閉じたまま翻弄され続ける。小さな空間に響く水音が、やけに耳を刺激した。やがて息が限界に達して、千冬は束の肩をぐいと押し退けた。解放された途端に、苦しげに息を吐き出し、深く吸う。

「っは、ふ……」

酸素不足でくったりと力が抜けた体を椅子に預けて、目を開けた先で間近に迫っている束の顔に、また目を閉じた。

下りてくる唇を千冬は受け入れ、寄せられた温もりに心地よさを感じていた。

家族仲は非常に良好（後書き）

一夏と筭、仲がいいですね。千冬と束は相変わらず？それとも少し進展？

## 白騎士、完成

束がISを開発してから、千冬が試運転をし、調整を繰り返す日々。早くも一年が経っていた。

中学二年生になったある日、篝の家で遊ぶ一夏を置いて、千冬は秘密基地に下りていた。

「完成したんだよ、ちーちゃん!!」

「完成……?」

共に秘密基地に下りた束が、指差した先には待機状態のIS。

一年間調整を繰り返し、文字通り千冬専用となるようにされたISだ。見た目には、普段通りに見える。

「今までののは、未完成だったと言う事か?」

「そういうわけじゃないけど、コアの最終調整をしたんだよ。まあ、乗ってみるのが手っ取り早いかな?ってなわけで、ちーちゃんレッツトライ!!」

「……ふむ」

百聞は一見にしかず、とも言いかと。千冬は束に押されるままにISの前に立ち、いつものように起動させる。

纏うまではほんの一瞬。瞬き一つの後に、千冬は束の言葉の意味を理解した。

「これは、なるほど……」

「ね?ね?ぜんっぜん違うでしょ?」

「ああ」

生身のように、ISが自在に動く。軽く飛んでみようと思えば、ふわりと浮いた体が高く飛び、天井すれすれまで一気に昇る。慌てて急停止をして、一度考えてからもう一度、飛ばうとした。今度は思った通り、飛ぶことが出来た。

「反応が、今までと違うな。驚いた」

「今までのデータをもとに、一切の無駄を省いて効率よく動ける様にしたからね。反応速度その他もろもろ段違いにレベルアップやつたぜブイ！ちなみに、それはまだ初期化中だからね。後で最適化処理もしちゃうからね」

束の前に降り立った千冬の言葉に、得意げな笑みが返ってくる。

これでもまだ、完全では無かったらしい。

千冬はそれを聞きながら、展開してみた新たに増えたりリストに、知らないもの基、物騒な項目を発見して首を傾げた。

「この、近接ブレードというのは？というよりも、現在展開可能武器一覧というのは……」

「せっかくだから、IS専用の武器も作ってみましたー」

「……馬鹿かお前は」

「馬鹿じゃないよ！天才束さんだよー！」

「そう答える時点で馬鹿だ」

ただでさえ現存兵器を上回るスペックを持ちながら、専用の武器など持ってしまうば。

「世界征服でもするつもりか？」

「そんなの興味ないよ。束さんはただ、ちーちゃんと一緒に宇宙に

行ってみただけ」

「……………難しいだろ、それは」

目線まで上げたISの手を見て、千冬は目を細めた。

「これが見つかれば、世間は大騒ぎになるんじゃないのか？」

「かもね。でも、どうだっていいよ、そんなの」

「……騒ぎになるのが分かってて、外に出す気にはならんよ。束」

「ちーちゃんは、煩いのが本当に嫌いなんだねえ」

「そりゃな」

静かに越した事はないと言うのが、千冬の根本的な思考。少なからず、ISで外を飛べたらという思考は無いわけでは無いが、その誘惑も、千冬の根底を成す思考には敵わない。

だから、騒ぎになると分かったまま、これを外に、世間に出す気は千冬には無かった。遠くで騒ぎになるならまだしも、自分がその中心地点に持つて行かれると分かっているなら、尚更だ。

「じゃあさ、世間に認められたら、一緒に宇宙に行ってくれるの？」

「まあ、騒ぎにならないならな」

「なら、そうしよう」

初期化を終えたISの前に、束が上機嫌に笑っていた。

その三日後、学校にて。千冬は不機嫌な束と共にいる。

「まさか世界がここまで馬鹿だったとは思わなかったよ」

「私もお前がそこまで馬鹿だったとは思わなかったな」

場所は屋上。昼休みの時間、立ち入り禁止の屋上は学校で最も静かな空間だ。ちなみに、なぜ二人が入れるのかといえば、束が力ギを開けたからに他ならない。

「認めさせてISで宇宙に行こうと思ったただけなのに」

「現存兵器を上回る代物を、認める筈がないだろう」

「目の前に出された現実を認めないのが馬鹿だって言うんだよ。神様は信じて天才束さんを信じないなんておかしいね。あんなに丁寧に説明してあげたのにさ」

「……………丁寧に説明したから、余計に悪かったんじゃないのか？」

「えゝ、いかにISのスペックが高いかを教えてあげただけだよ？」

それが悪いと言うんだ。繰り返された言葉に束は不満げに頬を膨らませただけだった。

何があつたのかといえば、束がISを政府やらNASAやらに公表した。束の考えでは、ここで認めさせて堂々と千冬と宇宙に行く、といったものだったのだが。

当然ながら、どちらともに束の公表したISを一蹴。その対応に束が不満を持ち現在に至る。

「ま、認めないなら勝手に行くけどね。白騎士にステルス機能もつけよう！」

「……………白騎士？」

「あれ、言つてなかったっけ？あのISの名前だよ」

「ふむ。白騎士というのか……」

確かに、最適化処理まで終えたあのISには、相応しい名前かもしれないなかった。

真っ白のその機体は、まるで中世の鎧のようなフォルムだったか

ら。

「ステルスつけて、ついでに武器も追加しちゃおっか。宇宙は何があるか分からないからね」

「……………頼むから、また騒ぎになるような無茶はするなよ？」

「しないよー。というより、わざわざ世間に認めさせなくても、最初からこうすればよかったね。ぶいぶい」

「……………はあ」

さつきまでの不機嫌はどこへやら。早くも思考を切り替えている束に、千冬は毎度ながら溜息を吐いた。

次に乗るときに、あのIS（白騎士）がどうなっているのか、僅かながら不安を抱きながら。

「……………ただいま」

静かに扉を開けて、千冬は暗い玄関で小さく告げた。

仕事が遅くなり、帰ってこれたのは日付が変わる直前だ。家中の電気が消えており、案の定だが一夏は既に寝た後だった。

リビングに入り電気をつける。テーブルに並ぶのは、ラップのかかった食事。

「……………」

軽めに作られた食事なのは、千冬の食生活を考慮しての事か。スツンと椅子に座って、千冬は冷めた食事にそのまま箸を伸ばした。

「ん……………美味しいな」



誰にともなく呟く。思うのは、二階の寝室で眠る一夏の事だ。

小学生に上がった一夏は、箒と同じクラスになれたらしい。最近になって、アニメの影響が少し口が悪くなりつつある一夏だが、千冬にすれば可愛らしい甘えん坊のままだ。

千冬も箒も剣道をやっていることから、自分も一緒になってやり始めたが、筋は良い。続けて行けば高い実力を持つことが出来るだろう。

ただ、変わらず夜や朝を一人で迎えさせることが多いのは、千冬にとって心苦しい事だった。

「……………だんだんと家事の腕が上がっているのも、複雑だな…」

料理、掃除、洗濯と。幼いうちから主夫のスキルを身に付けていく一夏に、姉として少々複雑な心持となりながら、千冬は食べ終えた食器を洗ってしまう。

それから向かったのは、一夏が眠る寝室。静かに開けた扉を、これまた静かに閉めて。千冬はベッドの傍らに膝をついて、眠る一夏に頬を緩めた。

「ただいま、一夏」

返事はない。よく眠っているようだ。

シャワーは明日の朝にして、自分も眠ってしまおうかと。千冬は考えて、タンスから引っ張り出したシャツに着替えてベッドに潜り込んだ。

すぐ横の温もりを心地よく感じながら、そつと一夏の髪に指を通す。何度かそうしていれば、疲れなどすぐに吹っ飛んだ。

「……………ご飯、美味しかったぞ。ありがとうな」

聞こえてはいないだろうと思っても、口をついた感謝の言葉。明日の朝にもう一度、いう事になりそうだ。

やがて一夏の髪に触れていた手を離して、それにしても、と思う。まさか束が、ISを公表するとは思いもしなかった、と。

「（私のせい、か）」

束がISを開発したのは、千冬と宇宙に行きたかったから。そしてISを公表したのは、認められていなければ騒ぎになるといった千冬の言葉から、認めさせようとしたから。

「（まあ、これ以上は無いだろ）」

束の思考は既に、世間に認めさせるのを放棄している。今は絶賛、ステルス機能でもってこっそり勝手に宇宙へ行く算段だ。

千冬としてはそれもどうかと思うが、何よりも騒ぎにならなければそれで良かった。

ただ、一夏と、箒と、そして束と。一緒にいられたなら、それで満足だった。

「（……一夏が婿に行くとなると、寂しいがな）」

それはまだどれだけ先の未来か、分からないけれど思ってしまったて寂しくなる。妹のように思っている箒に対しても、それは同じだった。

「（いつそ、一夏と箒がくっ付けば、寂しくないか……？）」

箒の一夏への恋心は、おそらく疑う余地も無い。いつそ、このま

まくっ付いてくれればいいのではと、千冬は本気で考え始めた。

「……………まあ、まだ先の話か」

思わず声に出して思考を停止させて、千冬は軽く目を閉じる。  
なんとなく、一夏と箒の事を考えると、束の事まで頭に浮かんで  
きて。向けられた笑顔を思い起こすと、心が落ち着いた。

「（一夏や箒とは違うな、あいつは）」

全身全霊で、千冬への好意を示す束。軽くあしらいながら、それ  
がとても嬉しく感じるのは、どうしてか。

一夏や箒に対する感情とは別の、その感情が束に向けられている  
のには、気づいていた。

「（でも、まだ……………）」

言葉にするのは恐ろしく、受け止めるだけで。

今のまま、変わらず束の傍にいたいと、そう思っるのは千冬が、臆  
病だったからで。

「（……………束）」

求められるまま、求めても良いのかと。千冬は問いながら、眠り  
に落ちた。

## 白騎士、完成（後書き）

ついに完全に完成したIS。どうなることやらですが。  
千冬と一夏は目指せ仲良し姉弟です。

緊急非常事態は、突然に

「……………おやゝ?」

日曜日、秘密基地でせつせと新たな技術の開発に勤しんでいた束は、自動で表示されたディスプレイに首を傾げた。

「んゝ、これは大変だね。やっぱいね。まっずいね。日本の危機だね」

というわけでちーちゃんんと。束はベッドに放置されていた携帯電話に飛びついた。そのままコール、四回ほど鳴ったところで、はい、と千冬が電話に出た。

「あ、ちーちゃんちーちゃん、大変だよゝ、やっぱいよゝ」

『とりあえず、お前の口調から危機感が全く感じられないんだが』

「あ、そう? まあ束さん的には日本がどうなるうと関係ないからね。ちーちゃんと篝ちゃんといつくくんが無事ならそれでオッケー! この際だから皆で国外に移住しちゃうか?」

『……………よく分からんが、何があつたのか手短に説明しろ』

「んーとね、まあ簡単に一言で言っちゃうとゝ」

ベッドにダイブした体勢のまま、パタパタと足を揺らしながら束は言った。

「日本にミサイルが約二先発、発射されたみたい」

ガタツ、と落ちた音が電話口から聞こえた。それから突然の無音、束は慌てて呼びかける。

「ちーちゃんどうしたの？どっか痛いのか？具合悪いのか？」

音の正体は驚きのあまり千冬が携帯を落としたことだったのだが、束は全く見当違いな方向の心配をしていた。

電話の後、千冬は急いで秘密基地にやって来た。そこでは束が椅子に座って、六つのキーボードを打ち鳴らしている最中だった。

「いらつしゃい、ちーちゃん」

「ああ……それで、いったい何がどうなってる？あの説明だけでは危険だと言う事しか分かんらん」

「んー、どうやらね、束さんの公表したISを、危険だーって思った人がいるみたいなんだよ」

「……どういう事だよ？」

大雑把すぎる説明に、千冬は顔を顰めて更に聞き返す。

「なんかね、公表した人間以外に何人かがISの存在を知ったみたいだね。その人たちが、日本を射程圏内にするミサイルを所持する国の軍にそれぞれハッキングして、一斉にどーんと発射したみたいだよ。あれだね、テロってやつだよ」

「……………随分と大規模な……というよりも、本当に危ないな。大丈夫なのか？」

「大丈夫じゃないねー。ほら」

ひよい、と束が軽く手を動かすと、新たに出現したディスプレイから映像と音声が流れる。

どうやら日本政府も事態に気づいているらしく、着弾地と思われる場所からの住民の避難を行っているらしい。

「親切な事に、どいつもこいつもミサイルの狙いを国会に定めてるみたいだから、避難も楽で良いね。あ、ちなみにハッキングしたところの人たちは、みーんな束さんが居場所をバラしてあげたからね。そろそろ捕まってる頃じゃないかな」

「それでさつきから、ずっとカタカタやってたのか」

「それもあるけど、他にもね。でさ、ちーちゃん、どうする？」

いつものように笑いながら、束が首を傾げて問いかける。問われて、千冬はアナウンサーの切羽詰まった声を聞きながら、目を伏せた。

「被害無しでこの状況を打開するには、どうすればいい？」

「まず言っちゃうと、軍隊が出てても対処できる事じゃ無いよ。一斉に狙われちゃったんだもん、今の兵器で迎撃しきるのは無理」

「なら、それ以外だったら？」

「白騎士なら、出来るよ」

既存の兵器を上回るスペックを持った、IS。その力を持つてすれば、ミサイルの迎撃も遣って退けるだろう。

「やっちゃう？ちーちゃん」

「やるしか無いだろう」

やらなければ日本を見捨てるも同義。それはつまり、千冬たちの住む国を見捨てるということだ。

もつとも、彼女にとってそれ以上に重要な事があるようだが。

「万が一、一夏たちに何か被害が出るような事があったら、許せんからな」

「うんうん、そうだねそうだよね。それならさっそく、行ってみようか！」

束はディスプレイをそのままに、椅子から飛び降り待機状態の白騎士の前に立つ。新たに現れたディスプレイに表示されるのは白騎士のスペックで、千冬も束の後ろからそれを確認する。

「新たにステルス機能と、遠距離用に大型荷電粒子砲……ぶっちゃけレーザー？それも搭載してるよ。粒子砲は試作型だけど、ミサイル打ち落とすのくらい軽い軽いお茶の子さいさいだよ！」

「そうか……近接ブレードと、遠距離レーザーだな。分かった」

「直撃しても無問題だからね。シールドバリアーも絶対防御も展開されるから、ミサイル如きでちーちゃんに傷つけるのは絶対に無理」

「そこは信用するぞ。さすがに、死にたくは無い」

「死なせないよ。死なせるようなものに、ちーちゃんを乗せるわけ無いもん」

エネルギーや武器の状態の確認をして、束はディスプレイを閉じる。全て良好、何の問題も無い。

千冬は白騎士に体を預ける様に寄りかかり、装着する。ステルスモード、と表示される項目が新たにあった。

「問題は無い？ちーちゃん」

「大丈夫だ。ミサイル到達まで、あとどれくらいだ？」

「一番早いので、十五分後だよ」

「なら、急いで行った方が良いな」



腕を動かしたり、視界を確認したりと一通りの動作を確認して、千冬は言った。のんびりしていられる時間は、もう残っていないようだった。

「ふふつ、ちーちゃんつてばやつぱりすごいね！」

「私からすれば、こつも世界を騒がせるお前の方が凄い」

「でも、まるでいつくんの見るアニメみたいな展開だね。日本の未来はちーちゃんにかかつてるよ！！」

「……別に、日本の未来なんて大そうなものを背負うつもりは無い」

頼まれつてごめんだと、千冬は首を振る。

「私が守るのは、一夏と筭だけで十分だ」

「あ、あれ？束さんは？束さんを忘れてるよ？」

「お前は、守らなくても勝手に助かりそうだな」

「酷いよちーちゃん！？束さんはシヨックで泣いちゃうよ？の字書いちゃうよ！？」

「……お前が私の傍から、勝手にいなくならないのは知ってるからな」

いじけはじめた束に、ポツリと呟いて。次には抱き着いてきた束が、嬉しそうな笑顔で聞いてくる。

「ねえねえちーちゃん、それつてどついう意味！？」

「さあな」

「むつ、教えて教えて教えてー！！」

「早く行くぞ。間に合わなくなる」

「ああつ、ちーちゃーん！！」

ステルスモードを展開して、千冬は秘密基地を飛び出した。

空中に滞空して、ステルスモードを解除する。憎らしいまでに晴れ渡った空だった。

『あと五分だよ、ちーちゃん。カウントダウンしよっか？あと三百秒』

「せめて一分単位でしてくれ。あと、出来る限りそちらでも迎撃してくれ」

『んー、まあ誘導ミサイルでハッキング可能なのはあるけど、というよりも絶賛それ操って誘爆させてるけど、千五百くらいは無傷でどーんしてくるよ？』

「……………二千発以上飛んで来るよりは、ずっとマシだ」

いくらか減って、それでも千を超える数にうんざりした気持ちになりながら、千冬はハイパーセンサーで遠距離まで見渡す。遠くに確認できるようになったミサイルに、近接ブレードを右手に展開させた。

「一発でも漏らせば、アウトだな」

出来る限りの事はしてみせようと、息を呑み一気に加速する。ブレードでミサイルを真つ二つに斬り捨て、爆発が起こる前に次を斬る。時にはミサイル同士を衝突させて誘爆させながら、三百六十度から襲ってくるミサイルを次々に撃破していく。

「ッ」

回避が間に合わず、ミサイルに直撃する。衝撃はあったが痛みは無い、けれど当然ながら、体中の血液が一気に凍りついたような気分になる。

「……本当に」

近接ブレードをいったんしまい、大型荷電粒子砲を展開し持ち替える。

「束の作る物は、凄すぎるな」

呆れさえ滲ませて、放つ。そんな彼女に付き合う自分自身にも、呆れながら。

「おかえり、ちーちゃん！凄かったね、かつこよかったね、さすが束さんのちーちゃんだよ！！」

「お前になったつもりは無い、が……ただいま」

ミサイルを見事に迎撃し終えて、更には捕獲、または撃墜の為に向かって来た各国の軍事兵器の相手もして、千冬は秘密基地に戻ってきた。

騒がせるだけ騒がしておきながら、束は上機嫌に帰ってきた千冬を出迎える。

「で、被害はどうなってる？」

「被害は全く無し！ってわけじゃなくて、多少の破片とかで民家がぶつ壊れたりしてるけど、人間に被害は無いよ。死人怪我人無しやったぜばい」

「……まあ、さすがに破片まではどうにもならないしな」

疲れたように返して、千冬はISを解除する。そうすると、いつもなら待機状態になる筈のISが、千冬の首元にネックレスとなつてぶら下がった。

「……束、これは？」

「あ、それね、ちーちゃん専用にしたんだし、せっかくだからいつでも持てるようにしよっかな」って」

「……外に出す気は無いと、言っただろ？」

「もう遅いよ。だって、こうやって見せつけてやったんだもん。認めない事なんて、出来ないでしょ？」

笑つて束が指差したのは、一つのディスプレイで。そこには、ISを纏った千冬が（バイザーで顔は分からないが）、ミサイルを迎撃する様が鮮明に映されていた。

「せっかくだから、全世界に放送してみたよ。テレビはこの映像と、ハッキングした奴らの事で持ち切り状態。皆同じ事ばかりで、芸が無いね」

「………はあ」

数えるのも馬鹿らしい何度目かの溜息。

このまま帰って一夏の相手をしようかと思つたけれど、体は気づけばベッドに突っ伏していた。

「あれあれ？ちーちゃん、どつたの？」

「……疲れた」

驚くほどに体は元気だが、精神的な疲れがドツと襲ってくる。目

を閉じればすぐにでも眠れそうで、うとうとし始めた視界の中で束がベッドの脇に膝をついた。

「一時間もしたら、起こしてくれ。帰る」

「んー、良いけど……帰っちゃうの？」

「一夏が心配する……」

「そっかそっか。うん、いいよ。おやすみちーちゃん」

「……おやすみ」

千冬は目を閉じて、すぐに眠りについた。束の手が、そっと千冬の頭を撫でる。

幼さを残した寝顔を間近で見つめて、そうしてから束はピョンっと立ち上がり、浮遊して近づいてきた椅子に座った。

「さて、ちーちゃんが起きるまでに、いろいろやつちやわないとな  
」

主にISについて。さすがに政府も、ミサイルを迎撃したのがISなのは分かっているだろう。

展開したディスプレイとキーボードに、束は上機嫌の笑みを浮かべて指を滑らせた。

**緊急非常事態は、突然に（後書き）**

白騎士事件発生。ただし犯人は束じゃ無いです。

## 騒動は駆け足で

ソファ―に座ってテレビを見ていた一夏が、あ、と声をあげた。

「千冬ねえ、束さんが出てるよ！」

「またか？」

「うん。生放送だって」

「……生放送？」

買い物袋の中身を冷蔵庫にしまっていた千冬は、一夏が続けた言葉に首を傾げる。

IS公表からのミサイル発射、そしてISによるミサイルや他国の軍事兵器の撃破。騒動の中心、基、騒動の切欠となった束は、今や日本どころか世界中から注目される存在だ。

テレビでISについて見ないことも無ければ、同時に束を見ないことも無い。

そんな束だが、今まで生放送に出たことは一度も無かった。だから、千冬も気になって、一夏の隣に座りテレビを見る。

『では、篠ノ之博士はどうしてISの開発を？』

『それって、なんで君たちに言わないといけないの？それを知って君たちはどうすることも無いし関係ないでしょ？なら言う必要無いよね』

『えっ、ええつと……』

テレビに放送されていようと、全世界の人間に見られていようと、束には全く関係が無かったらしく、彼女は千冬や一夏の知る様に、

全くの興味を示さずに司会者の質問に言葉を返していた。

「束さん、忙しそうだなあ」

「……一夏、箒はどんな様子だ？」

「箒？んー、なんか疲れてるみたいだった」

「そうか……」

ISが世界中から注目されると、篠ノ之家はその対応に追われるようになった。

家には黒服の人間が何十名と訪れ、束への情報開示を求めたり面談を求めたりと、落ち着く暇も無い。箒もまた、そんな人間たちに家を囲まれ、学校に行っても開発者の妹という事で、妙に注目を集めてしまっている。

「俺に、なんか出来る事ないのかな……」

テレビを見ながら呟くように言った一夏に、千冬は視線を向けてそれからポンツと軽く頭に手を置いた。軽く撫でて、眉をハの字に下げる一夏を温かな目で見つめる。

「お前は、今まで通りにしてやれ」

「今まで通り？」

「心配してやるのは良いけれど、それでお前まで気を使っていたら、箒が本音で話せる相手がいなくなる。お前は、今まで通り一緒に遊んだりしてればいい」

「……そんなんで、良いのかな？」

「何かしてほしい時は、箒はすぐ顔に出るからな。それを見落とさない様にだけすればいい」

「……うん、分かった。俺、頑張るよ」

「ああ」



意気込んで見せる一夏に、千冬は応援するように頷いた。テレビは気づけば、CMへと変わっていた。

それを見て、夕食の支度をしようと千冬が立ち上がると、一夏も手伝うと言い、一緒にキッチンへ向かう。

「今日は、カレーにするか」

「俺、野菜切る！」

「なら、頼んだぞ」

材料を並べ、一夏が野菜を切る間に、千冬は肉の準備に入る。千冬がパックから出した肉を包丁で切り始めると、一夏はジャガイモの皮を剥きながら、ふんと思いついたように疑問を口にした。

「千冬ねえ、どうして束さん、ISを作ったんだ？」

「……なんだ、突然」

「さっき、テレビで言ってたから……ISって、本当は宇宙に行く為に作ったんだろ？」

「ああ……もつとも、そうは上手くいかなかったがな」

ISは、現行兵器をはるかに凌駕するそのスペックから、宇宙空間での活動を目的としたマルチフォーム・スーツではなく、兵器として世界に認識された。

最初から、束が目論んでいた、世界に認めさせ堂々と宇宙へ行くという考えは、成功するはずも無かったという事だ。束が兵器として認識されたのに対して、千冬に愚痴を言っていたのは余談である。

「束さん、宇宙に行きたかったのかな？」

「そのようだ。まあ、どうしてそう思ったかは、そのうちあいつも話すだろう」

「千冬ねえは知ってるの？」

首を傾げて見上げる一夏に、千冬は口を閉じる。少しばかり考える様に視線を動かして、ああ、と小さく頷いた。

「でも、秘密なんだ。だから、知りたければ束に直接聞け」  
「ん、分かった」

何となく、千冬は一夏に言う事が出来ず、そんな答えを返した。素直に頷いた一夏に、人知れず安堵する。

けれど一夏の疑問はそれだけでは終わらず、二度目の疑問が千冬にぶつけられた。

「あの白騎士って、誰なのかな？」

束と同じように、テレビで何度も見る、ISを纏いミサイルを迎撃した張本人。

バイザーで顔は分からず、その存在は女性である事しか知られていない。何度となく束に、その存在を明らかにするようという求めはあったそうだが、束はそれに答えず正体不明のままだ。

その正体について、一夏が疑問に思うのも当然だろう。千冬は包丁を水で洗い流して、疑問に答える。

「私だ」

「……へ？」

沈黙が場に満ちた。ぽとりと一夏の手から皮を剥かれたジャガイモが落ち、目を丸々とさせた瞳が千冬を見上げている。

千冬はその瞳を気にする事も無く、人参を手に取り皮を剥き始めた。



「……箒の家みたく、なる？」

「おそろくな。それが嫌だから、秘密にしてるんだ。一夏も、知らない人間に囲まれたら嫌だろう？」

「…………嫌だ」

顔を顰めて、一夏は千冬の問いに頷いた。そして、絶対に誰にも言わないと心中で誓いをたてる。

「（でも、千冬ねえが白騎士かあ）」

そうと分かると、どこか誇らしくなった。世間では、白騎士は日本を救った英雄と呼ばれてすらいるからだ。

さっそうと現れ、死人を一切出さずにミサイルから日本を守り、そして姿を消した白騎士。それは一夏が見る、アニメのヒーローのように思えた。

「かつこいいな…………」

見上げた千冬の横顔に、一夏はそう呟いた。

それから数日後、一夏は学校帰りに箒を家に連れてきた。

一足先に帰ってきた千冬に出迎えられ、箒は一夏に連れられリビングのソファ―に座っている。

その表情は力無く、一夏を心配させた。

「大丈夫かよ、箒」

「平気だ…………」

「無理はするなよ。疲れたなら疲れたと、はっきりと言った方が良

い」

顔を覗きこんで心配する一夏に、気丈に笑みを浮かべて首を振った箒。そこに千冬が、お茶を注いだグラスを二つ持ってやって来る。一夏と箒の前にグラスを置いて、制服のリボンを解きながらテレビをつける。

テレビでは、先日発足されたアラスカ条約、正式名称をIS運用協定というが、それについての説明がされていた。

内容としては大きく二つであり、一つはISの取引などの規制、そしてもう一つは、ISの技術を独占的に保有している日本に対する情報開示とその共有を定めるもの。

これに基づき、日本にISの知識、技術を学び、操縦者を育成する機関を設置するという話も出ているらしいが、未だはつきりとした情報は千冬たちの知るところでは無い。

「ISが公表されてからというもの、世界が変わっていくな」

「そう、ですね……」

「……こうなって、恨んでいるか？」

「え？」

未だ話し続けるアナウンサーの声を消す様に、千冬はテレビを消した。

唐突な問いかけに意味が分からず見上げてくる箒に、淡々と、感情を消し去った声音で千冬は聞く。

「世間も変わり始めているし、お前の周りも変わり始めている。知らない人間が家に押し寄せるし、友人たちだって今までと違う目で見えてくる。違うか？」

「……はい」

「そうなった原因は、言ってしまうえばISだ。更に言えば、開発し

たのは束で……開発する原因になったのは、私とも言える」

「えっ、それって……」

「千冬ねえ、どういうこと？」

箒が思わぬ言葉に目を丸くし、一夏もまた知らぬ事実食いつくように千冬を見つめる。

一方で、千冬は話し過ぎたと口元を抑え、それから二人を見つめてすまなそうに首を振った。

「実際の理由は、束に聞いてくれ。私からは言えん」

「なんでだよ。どうして教えてくれないんだ？」

「千冬さん……」

「……私も、はっきりと聞いた訳じゃ無いからだ。だから、聞くなら束からきちんと聞いてほしい」

頼むようにして言うと、一夏と箒は渋々とだが頷き返す。それに笑みを返して、けれどすぐにその笑みは消し去り、千冬は話を戻した。

「それで、箒の周りが変わる原因は、私と束にあると言えるんだ……変えた私たちを、恨んでいるか？」

「……箒」

「わ、たしは……」

一夏は箒を見つめて、その瞳を揺らした。友人が自分の姉を恨んでいるかもしれない、その事態は一夏の心を不安にさせるには十分すぎる。

そして箒は、見つめてくる一夏の視線と、問いかけてくる千冬の視線に膝の上に置いた手をギュッと握りしめて、緩く首を振った。

「こんなことになって、正直、困ってはいますけど……姉さんと千冬さんを、恨んだり、してません」  
「……そう、か」

内心では、言葉に出来ないくらいに気持ちが入り乱れているのだろうが、それでも箒は否定を言葉にした。

千冬は、それにひどく安心しながら、箒に笑みを向ける。箒の隣では、一夏もまた笑みを浮かべていた。

「……ところで、あの……姉さんから、聞いたんですけど」  
「なんだ？」

「あの……千冬さんが白騎士って、本当ですか？」  
「ああ……」

束には、一夏に教えたと話してあったから、箒に教えていたとしても別に問題も無いし、可笑しくも無い。

千冬は箒の疑問に頷いて、あっさりと肯定を示した。

「本当だ。束に事情を聞いてな」  
「………本当、なんだ……」  
「凄いやなあ」

改めて真実だと言われて驚く箒に、一夏が千冬を見つめてそう相槌を打つ。

「私では無く、あいつの作る物が凄すぎるんだ」  
「でも、千冬ねえも凄いよ。だって、ミサイル全部斬ったんだろ？」  
「……どうしたら、そんなことが出来るようになるんですか？」  
「どうしたら、か」

顎に曲げた人差し指を当てて、千冬は目を伏せた。考えてみると、浮かぶのは三人の顔だった。

「お前たちを守りたかったから、だな」

「俺たち？」

「一夏と箒と、束をな。守りたかった、それだけだ」

そう言った千冬の顔は、とても美しく、凛々しく、かつこよく。

一夏と箒は、自分たちを守りたかったと言った千冬に、言葉にならないほどの感情を抱いた。

それは決して負の感情などでは無く、どこまでも綺麗なものだった。

「千冬ねえ」

「ん？」

「ありがとう」

「……………ああ」

一夏にとってヒーローだった姉は、やはり姉でしか無く。自分を想うその気持ちに答えたいとした一夏の口から出たのは、ありふれた感謝の言葉だった。

それが千冬には何よりも嬉しく、彼女はふわりと笑みを浮かべる。一夏と箒もまたつられたように笑みを浮かべて、とても穏やかな光景だった。

「……………」

「……………何の、音だ？」

けれどそれは、ほんの微かな音に壊される。

ガリガリと掘り進めるような音は次第に大きくなり、初めは分か



らなかった一夏たちにも分かるほどに大きくなる。

音の出所が織斑家の庭というのもその時にはつきりとし、リビングから大きな窓を介して抜けられるそこを、三人は警戒するように見つめた。

そして庭に突如として現れたのは、オレンジ色の大きな人参で。地面からボコリと現れたそれに、千冬は表情を消し、一夏と箒が呆気にとられた。

パカツと人参が先端から真つ二つに割れて、中から飛び出してきたのは束だった。

「やあやあちーちゃん！会いたかったよちーちゃん！！ハグハグしようかちーちゃん！！キスしようかちーちゃん！！」  
「とりあえず、その人参を消せ、束」

一目散に抱き着いてきた束を受け止めた千冬は、キスを迫る顔を抑え込みながら命令する。

はいはいと束が千冬の手を逃れて、すぐさま後ろから抱き着きながら指を鳴らす。一瞬にして人参は無くなり、一夏と箒は驚いたように庭を見つめた。

「あー、ちーちゃんにやっと会えたよ。もう束さんはちーちゃんに会えなくてちーちゃん不足で餓死寸前飢餓状態。ちーちゃん不足で死んじゃうね」

「お前が自分で蒔いた種だろう。諦めるんだな」

「ちーちゃんが冷たい。いっくん、ほーきちゃん、慰めて」

「ね、姉さん……」

「っ束さん……」

二人揃って庭の穴を見ていた一夏と箒に、束が飛びついて来る。箒が何を言ったらいいのか分からず困惑した顔を向け、一夏は驚い

たように身を避けようとして捕まった。

「束、一夏と箒から離れる。あと、何をしに来たお前は」

二人から束を引き剥がしてソファーに投げながら、千冬は問う。  
束がソファーから起き上がり、そのまままた千冬に飛びついた。

「ちーちゃんに会いに来た!!」

「いつもの事だろう。それ以外には無いのか」

「えへへっ、ちーちゃん公認の束さんの愛だね!」つと、他なんだけど、箒ちゃん」

「は、はい!？」

千冬にじゃれついていた束が、突然矛先を箒に向ける。向けられた箒はびくりと体を跳ね上がらせて返事を返すが、少し上ずっていた。

「ごめんね、箒ちゃん、あの黒服たち嫌がってたでしょ？」

「あ、えと、それは……」

「あいつらね、二度とうちに来ないようにしたから。箒ちゃんにも近づかない様にしたから、何の心配も無いよ」

「え、あ……」

「……良かったな、箒」

「っは、はい」

どうにも混乱して頭が追いついていない箒は、千冬が助け船を出してやると大きく頷いた。束はそんな箒に嬉しそうな顔をする。

「それとね、ちーちゃん」

「今度は何だ」

「ちーちゃんは、ISの操縦者を育成する学校が出来るのは、知ってる?」

「……………テレビで言っていたが、実際にそんなものが出るのか?」

「出来るよ。名前はIS学園、日本に出来るって。一応は、高校の扱い。それでね」

千冬に抱き着いたまま、束は少しばかり体を離して笑みを浮かべた。

「ちーちゃん、IS学園に入る!」

明るく言われたその言葉に、千冬は抱きしめられたまま、束の頭に手を置き、力を籠めた。

雪が降り始める様になった頃。

世間では核に代わる抑止力としてISが普及し、それぞれの国で研究、開発が続けられている。

ただし、その存在に対する認識は、宇宙での活動を想定したマルチフォームスーツから兵器へと変わり、ISが公表されてから一年の間で、スポーツへとまた変わった。

これには各国の上層部の考えが色々複雑にあるのだが、当然ながら、リビングで普段通りの日常を過ごす千冬と一夏には、関係の無い事だった。

「千冬ねえ、今日の晩御飯どうする？」

「なんでもいいが……というよりも、私が作るからお前はテレビでも見てろ」

「俺が作るよ。千冬ねえ、勉強大変だろ？」

「なに、そうでもないさ」

リビングのテーブルに広げられた参考書やノート。誕生日を迎え十五歳となった千冬は、現在受験勉強の真っ最中だった。

「判定もAだったし、大丈夫だろう」

「そっか。でも、本当にいいの？千冬ねえ」

「何がだ」

「IS学園、受けなくていいの？」

「ああ」

一夏の問いに、千冬はあっさりと頷いた。

千冬が受験しようとしているのは、私立藍越学園。学費も安く、千冬と一夏の住む家からも近い。そして、千冬が重要視したのは就職率の高さだった。今も尚、学生の身で働きながら一夏を養う彼女からすれば、卒業後に優良企業に就職できる可能性が高いこの学園はとても魅力的だった。

「IS学園は、寮生活だからな。そうになると、お前を一人にしてしまっ」

「別に俺は平気だけど？」

「私は、お前の姉だぞ？弟を一人にしておけるか」

ノートに走らせていたペンを止めて、千冬はくしゃくしゃと一夏の頭を撫でた。満更でもなさそうに一夏が笑う。

そうした中、ピンポンと電子音が響いた。顔をあげて、千冬は来客を知らせるそれに立ち上がり玄関に向かう。一夏は、リビングから顔を覗かせて様子を伺った。

「……どちら様でしょうか」

招かれざる客は、スーツ姿の女性だった。

女性は、警戒を露わに玄関から顔を覗かせる千冬に笑みを浮かべる。人好きしそうな笑みだった。

「初めまして。貴女が、織斑千冬さんですか？」

「そうですが、貴女は？」

「日本政府の者です……名前は、垣根星子と申します」

「……………」

「貴女に、お話があつて来ました」

中に入れてくれませんか、言われた千冬は彼女越しに外を確認して、チラチラと視線を寄越している通行人に、彼女を家へと招き入れた。

一夏を二階の部屋に行かせて、リビングには千冬と星子。

テーブルに広げたままの参考書を閉じて、お茶を彼女の前に出した千冬は、別の部屋から引っ張り出してきた座布団に座った。

「それで、話とは？」

「察しはついていると思いますが……織斑千冬さん、貴女には、IS学園に入学してもらいます」

「………入学通知が来ていましたが、辞退した筈です。何度来られようと、私にその気はありません」

「申し訳ありませんが、そういうわけにはいかないんです」

星子は引かず、ピシッと背筋を伸ばして千冬を真正面から捕えて続ける。

「我々は、IS開発者の篠ノ之博士に、是非ともIS学園に入学してもらいたいんです」

「そうですか」

「しかし博士は、今現在それを拒んでいます。なぜなら」

「東さんは、ちーちゃんと同じ学校に行くからだよ!!」

パカッと、リビングの床が開いた。声と共に飛び出す様に現れたのは、束だった。

「し、篠ノ之博士!？」

「ハローハロー。君はいつたい誰かな？どうしてちーちゃんのお家にいるのかな？というよりもちーちゃんと二人きりってどういう了見？束さんとしてもじえらしいなんだけどなあ？」

「あ、えと、私は、日本政府の者で、垣根星子と申します。篠ノ之博士のご高名は常々」

「ああ、知らない。君が誰かとかどうでもいいし、長々した話も聞かないし」

「へ……？」

束の登場に驚きながらも挨拶をしようとした星子は、すぐに浴びせられた冷えた言葉に呆然とする。

それに溜息を吐いたのは千冬で、飛びついてきた束の頭に手を置いて力を籠めた。

「ち、ちーちゃん、痛い、結構というかだいぶ痛いよ！？このままいくと確実にらぶりい束さんの惨殺死体が出来上がっちゃうよ！？」

「埋める場所は山で良いな」

「あ、束さんはちーちゃんと同じお墓でおねがいだだだだっ！！」  
「尋ねておいて、話を切るな。あと、さっき言っていた意味も説明しろ」

「説明するから過激な愛情だけじゃなくてぬくぬく気持ちいい柔らかい愛情も束さんにプリーズミー！！」

「ふん」

「ぶぎゅっ」

投げ捨てられた束が、リビングの床で悶絶する。それを放って居住まいを正した千冬が、呆然としたままの星子に声をかけた。

「話を続けましょう」

「えっ、あ……はい、えっと……」

促されて、星子は千冬の横で早くも起き上がった。いる束にチラチラと視線を向けながら、思わずといった風で言った。

「仲が、よろしいんですね……」

「幼稚園から一緒ですから」

「とすると、篠ノ之博士とのご関係は、えっと……ご友人という事で良いんでしょうか？」

「彼女の交友関係くらい、調べているのでは？」

「……まあ、はい。そうですね」

「こそこそと嗅ぎまわってたもんね」。鬱陶しいったら無いよ。次やったら、束さん怒っちゃうよ？」

「も、申し訳ありません！」

「……束、余計な口を挟むな」

「はい。えへへ、怒られちった」

「……喜ぶな」

慌てて頭を下げる星子と笑顔の束に、千冬は溜息を吐く。話がなかなか進まなかった。

「……それで、どうして私がIS学園に入学しなければならないんですか？」

「あ、はい……我々は、篠ノ之博士には是非とも、IS学園に入学していただきたいのです。ですが、博士は、織斑千冬さんが入学しなければ入らないと……」

「そうなのか、束」

「んー、正確には、束さんはちーちゃんと同じ学校に行くって言うただけだよ。こいつら、あんまりにもしつこくてさ。家に来るなって言ったら、外で待ち構えてるんだよ？うっざいよね！」



千冬の目の前で、星子が縮こまった。あははと笑う束の笑みは、彼女からすればさぞ恐く映るのだろう。笑っているだけで、彼女に向けられる笑みに温度は存在しなかった。

星子と束の言葉で事情を理解した千冬は、お茶に手を伸ばし一口飲んで、静かに息を吐く。

「私が行くのは藍越学園だが、良いのか？」

「束さんはちーちゃんがいるなら何処でも良いよ。ちーちゃんさえいればそこは楽園だからね」

一応、確認として聞いてみれば当然のように頷かれた。千冬としては、それならそれで問題は無かったが、

「そ、それでは困るんです！」

彼女としては、問題でしかなかった。

「っお願いします、そちらの条件は可能な限り検討しますから、どうかIS学園にご入学ください！」

「だから、私はちーちゃんとじゃなきゃ嫌なんだってば。同じこと言わせないでくれる？」

「では、織斑さん！お願いですから、IS学園にご入学ください！」  
「……………」

先ほどもでは、どこか強制を含んでいた彼女の態度だったが、束が現れてから一転して下手となっている。束の機嫌を損ねない様だろうか。

だが、だからといって千冬の考えも変わることは無く、頭を下げる彼女に首を振った。

「お断りします」

「出来る限りの待遇をお約束します。ですからどうか、お考え直してください」

「そう言われましても……調べていただければ分かりますが、うちは私と弟の二人暮らしですから。寮生活をして弟を一人にはしたくありませんし、学費を払うだけの余裕もありません」

「なら、学費は免除致します。寮生活は……家からの距離を考えると、こちらからの通学は難しいですが……休日は自由に帰宅できるようにします」

「……勝手に決めて、大丈夫なんですか？」

「問題ありません」

寧ろそれで篠ノ之博士が入学するのなら、安いくらいだと。そんな言葉が聞こえてきそうで、千冬は眉尻を下げた。

どうやら彼女も、彼女の後ろにいるであろう人間たちも、本気らしい。面倒事に巻き込まれたと、千冬は隣で笑い続ける束を見た。

「あつはつは、ちーちゃん怒らないですよ」

「……私は、煩いのは嫌いだ」

「知ってるよ。うん、ごめんね」

「……はあ」

常に他人に興味を持たない束が、謝ることは少ない。そしてこれもあつさりと謝る時は、本当にそう思っている時で。

それが分かるくらいには千冬は束の事を知っていて、謝られるとそれ以上、責める気持ちは消えてしまう。

「……弟とも相談したいので、返事は後日で良いですか？」

「構いません」

「では、決まりましたらこちらから連絡します。必要の場合は条件

もその際に伝えますので、今日はお引き取りを」

「……分かりました。色よい返事をお待ちしています」

連絡先です、と渡された紙を受け取って、立ち上がった星子を玄関まで見送った。そうして千冬は、疲れたように頭に手をやる。後ろから抱き着いてきた束が、そんな彼女の顔を覗いて笑った。

「ちーちゃん、お疲れだね！」

「原因はお前だな」

「ごめんね」。あいつらしつこいんだもん。私はちーちゃんとじゃなきゃ嫌だって言ってるのにさ」

「……それで私の所まで来られても、煩わしいだけだ」

リビングに戻って、テーブルに置きっぱなしのお茶の入ったコップを洗う。束は引っ付いたままだ。

「最初にお前が言って来た時にも、断っただろう」

「言われたね」

「それでお前も、納得しただろう」

「したよ。あいつらが勝手に騒いでるだけ」

最初、まだ千冬たちにIS学園の情報がはつきりとしていなかった頃。

既に政府から入学するように言われていた束は、それに千冬を誘った。IS学園なら、自由に（許可など必要な物はあるだろうが）ISに乗れる。外で乗って騒がれるような事は無い。

だから、千冬がISに乗って空を飛べると思ったから誘ったのだ。外で飛ぶことに魅力を感じながら、千冬は騒がれるのを嫌って外で乗ることをしなかったから。

IS学園に入学する事自体が騒がしいと、千冬にアイアンクロー

を喰らったけれど。

「で、どうしよっか。ちーちゃんが望むなら、別に断ることも簡単だよ?」

「どうするんだ?」

「これ以上誘って来たら、一切のISの情報を開示しないって言う」「……………何も考えずに、筈たちに手を出す輩が出てきそうだから、やめろ」

そんなことをすれば、騒ぎになるのは一目瞭然。もれなく千冬や一夏に飛び火するのも目に見えた。

「まったく、お前は どうして私を面倒事に巻き込む」

「東さんとちーちゃんは一心同体だからだよ!」

「……………とりあえず、まずは一夏に相談か」

「あれ、無視?スルーされちゃったよちーちゃん」

「その辺で大人しくしてろ。私は一夏と話してくるから」

「ええっ、やだやだ置いて行かないでよちーちゃん!!」

二階への階段を上り始めた千冬を騒ぎながら東が追いかける。

部屋を訪れた姉と、いつの間にやら来ていたその親友に、一夏は目を丸くするのだった。

I S o r 藍越（後書き）

千冬が素直にI S学園に入学するのか、と思いきやそんなこともなく。

でも、思っにこんなスローペースでいいんだろうかと……。千冬と束の学園生活を見たい人がどれだけいるのだろうと思いつつ、今日も彼女たちの百合は続く。

## IS学園、入学

IS学園。IS操縦者の育成を目的とした教育機関であり、アラス力条約が締結してからすぐに設立が決定され、日本に作られた正式名称を、IS操縦者育成特殊国立高等学校という、全寮制の学園である。

入学式までは生徒の立ち入りは一切許されず、四月の初め、開校日にようやく賑やかさを得た学園に向かう電車の中で、千冬は窓から見える海に考えていた。

「夏になったら、一夏と海に行くのも良いな」

「おおっ、ならちーちゃんの水着を用意しないとね！ひらひら可愛いのにしようか？すけすけにくいにしようか？」

「少なくとも、お前に選ばせることは無い」

「そんなあ！！」

ガガンとショックを受けて見せる束と、気にせず外を眺め続ける千冬の周りには、満員電車にも関わらず僅かにスペースがある。ハイテンションで騒ぎ続ける束と、無表情で淡々と切り捨てる千冬の空気が原因だろう。

「もうすぐ着くんだ。大人しくしている」

「ちーちゃんが冷たいよ」

「そうでもないだろ」

「束さんとしては、ムギユツと抱きしめてキスしてほしいな」

「今すぐ海に飛び込むか？」

「ごめんなさい」

コンコン、と千冬が軽く窓を叩いて視線だけを向けると、束はすぐさま謝った。頭につけた金属製のウサミミが何故だかしょんぼりと垂れている。

「……気になったんだが、その耳は何だ？」

「これ？これはね、ちーちゃんリーダーだよ！」

「……………壊せ」

「ええっ！！」

電車から下りるまで、束は千冬の手からウサミミを守る為に必死の抵抗を続けることとなった。

ウサミミを死守してIS学園に到着した束が、機嫌よく笑っている。

「……………束」

「ん？なあに、ちーちゃん」

「離れる」

「それは出来ない相談だよちーちゃん」

一年一組、それが千冬と束のクラス。

教室にて、偶然にも席が隣同士だった千冬と束だが、それが本当に偶然なのか誰かが操作したもののかはさておき。

千冬が席に座るなり束が抱き着いたまま離れなくなり、そうすれば当然ながら、IS開発者として顔が知れている束の行動に、周りで様子を伺っていた生徒たちが騒がない筈も無く。

「誰？あの子」

「篠ノ之博士のお知り合い……？」

「綺麗な子ね」

「どうすれば博士とお近づきになれるかしら」

女子生徒たちがこそそと会話を交える。

ISの研究が進められ発覚した重大な欠陥、女性しか操縦できないという事実。その事実によって、IS操縦者を育成するIS学園は、意図せずして女子高となっていた。

女三人寄れば姦しい、聞こえないようにしているつもりかもしれないが、囁きも増えれば騒がしいもので、聞こえてくる内容を鬱陶しく感じた千冬が束を引き離しにかけ、それを束が拒否した事が、冒頭での出来事。

「黙らせよっか」

「よせ。面倒事を起こすな」

「でもちーちゃん、ご機嫌斜めでしょ？」

「……………お前が気にする必要は無い」

「駄目だよちーちゃん。我慢は体に毒だよ……………ってなわけで束さんの胸に飛び込んで癒されると良いと思うよ！」

「黙れ」

ヘイカモン、とばかりに千冬から離れた束が両腕を広げるのを一蹴して、千冬は机に頬杖をつく。

騒がしさと好奇の視線に目を閉じて、千冬は家に残してきた一夏の事を思った。

日本政府の女性、星子が来たあの日、千冬は一夏に相談した。そうしてあっさりと返ってきた一夏の言葉は、IS学園に入るのを勧めるものだった。



千冬がIS学園では無く藍越学園に入ると決めた後も、頻りに確認してきた一夏である。その答えは分かり切っていたとも言える。その結果から、千冬は抗うのを諦め、IS学園への入学を決めた。その際に、政府に提示した条件もあり、

- ・ IS学園にて発生する諸々（学費、食堂代、寮費等）の免除
- ・ 毎週土日は家へと帰宅、宿泊が可能である事
- ・ 生活費の支給
- ・ クラス、寮部屋は篠ノ之束と同じである事

以上である。最後の一つは、束が勝手に追加したものだった。最初は、生活費の支給では無く、放課後のバイトの許可だったが、それは政府によって却下され、代わりに提示された案である。一夏の事を考えれば、どちらにしろお金は必要となるわけで、千冬もそれに頷かざるを得なかった。学費その他費用についても同じである。政府としては、これだけで篠ノ之束をIS学園に留める事が出来るのだから、安いものだったかもしれない。

「ふんふふん」

「……お前は何をしている、束」

千冬が目を開けると、束は彼女の左手首のところで何やら弄っていた。正確には、左手首のブレスレットをである。

束の傍には空中投影された小さなディスプレイがあり、そこには様々な数値が表示されていた。

「いい感じに成長中だね。さっすが束さんのちーちゃんだよ」

「馬鹿が。で、成長というのは？」

「暮桜の事だよ」

束の言葉に、千冬はブレスレットに目をやる。僅かにピンク色に輝く鎖と、桜を模った飾り一つのデザイン。

暮桜、技術提供の為に解体された白騎士に次ぐ、束が千冬の為に作った専用機。

開発されて日は浅いが、それは常に千冬と共にある。

「束さんの想像以上に成長が速いよ。ちーちゃんだからかなあ」

「私だから？」

「ISは私の子どもだからね。束さんの愛するちーちゃんを、この子が愛さないわけが無いんだよ！」

「……………その説明は、よく分らん」

どちらかというと、納得できかねるといったところで。

千冬と束がいつものように話し、そして周りは様子見から動けずにいるうちに、チャイムが鳴り響く。

立っていた生徒たちが席に座り終わった頃、教室の前の扉が開き長髪の女性が入ってきた。

「皆さん、揃っているようですね。では、SHRを始めたいと思います」

綺麗な笑みを浮かべた女性は、一度黒板を向いて名前を書くと、もう一度生徒たちに向き直る。

「私は、一年間皆さんの担任となる、橘朱莉です。よろしくお願いします」

「よろしくお願いします！」

何人もの声が揃って返事を返した。朱莉は安堵したように息を吐く。

「それでは、今日の予定ではこの後に入学式となりますが……まだ時間があるので、先に自己紹介をしましょう」

では相沢さんから、と朱莉が指名する。はい、と席を立った女子生徒の自己紹介が始まって、次々と順番が回った。

すぐに千冬の番となり、席を立った彼女に視線が集中する。束と親しくする千冬に、生徒たちは興味津々であった。

「織斑千冬です。よろしく願います」

最後に軽く頭を下げて、千冬は座る。瞬間、妙な沈黙が教室に満ちた。

「えっと……つ、次、お願いね」

「……あ、はい！」

呆氣にとられたのは朱莉もだったが、気を取り直してどうにか次を促す。二列目の一番前の席の少女が、席を立った。けれど自己紹介が始まって、千冬に向けられる視線は減らず。それに小さく溜息を吐いた彼女に、束が不満げに言う。

「ちーちゃんまた人気者だね」

「煩わしいだけだ……」

「そうだね。ちーちゃんには束さんがいればオツケーなのに、ちーちゃん人気者で束さんはじえらしい確実だよ」

「……次、お前だぞ」

「えー」

束の前の席の女子生徒が座り、千冬の言葉通り順番が回ってくる

が、束は一向に話そうとしない。

それに困惑しつつ朱莉が促すも、結果は変わらず。千冬は体ごと自分を向いている束に、早くしろと呟いた。

「むう、面倒くさいな……篠ノ之束。はい終わり」

「えっ、ええと……」

文句を一言言ってから、一切生徒たちには顔を向けずに自己紹介を終わらせる。好奇の視線には、戸惑いや不快の感情が色濃くなりつつあった。

「で、では次、お願いね」

「はい」

それ以降の自己紹介は、順調の一言だった。

「だるいなあ、さっさと終わらせればいいのに」

「黙ってる」

一切聞く気の無い束と、とりあえずは名前を耳に入れていた千冬の一角に集められる視線だけは、減ることは無かったが。

その後に執り行われた入学式は、特に問題も無く終わり 名前順で千冬と離れた束が常時不機嫌だったが その日は終了となった。

すぐにでも授業を始めたいところだろうが、何分手探りな事も多く、それぞれのクラスの状況を教師たちで話し合う為だとか。

けれどこれによって、生徒たちは学園内を見て回る時間を多く得

られた。学園は教室やISの練習場ともなる複数のアリーナ、その他特別教室、施設、寮と、馬鹿みたいに広い。見学して回るにしても、時間はあるに越したことが無かった。

しかし、生徒たちが教室を出て学園内の見学に向かう中、一年一組だけは、奇妙な静けさを保っていた。

「ちーちゃん、この後どうしよつか？」

「……寮の部屋に行けばいいだろう。荷物の整理もしたいしな」  
「うんうん、それじゃそうしよつか！レッツゴーだよ！」

千冬と束が、原因だった。といっても、彼女たちが何かしたわけでは無く、生徒たちが様々な思惑を抱きながら、二人の行動に注目していた為に、一組の教室は静かだったのだ。

最も注目されているのは束であるが、それと同時に束と対等に接する千冬にも、自然と視線は集まる。寮へ向かうと廊下を歩いていた千冬は、纏わりつく束を引きずりながら、その視線に辟易していた。

「（鬱陶しい……）」

言葉にこそ出さなかったが、心中は穏やかでは無く。一切の表情を顔に出すことなく、千冬は歩き続けていた。

「篠ノ之博士！」

後ろから呼び止められたのは、束だった。千冬は足を止めて束を見るが、当の束は千冬の首に腕を回して上機嫌に笑っている。

つまりは、呼び止められた事を一切気にしていないわけで、千冬はそれを確認すると無言で歩き出した。

「あ、こら！待ちなさい！！」

歩き出した千冬と引きずられる束に、声をかけた生徒が慌てて追いかけてくる。

いつもの千冬なら、呼び止められた束に返事くらいいしろと言うところだったが、何分タイミングが悪く、

今の彼女は、最高に機嫌が悪かった。

「待ちなさいって言うてるでしょ！！」

けれど追いかけてきた生徒がそれを知るはずもなく、彼女は千冬たちの前に回り込んできた。

通せんぼされ、自然と足を止めざるを得なくなった千冬が、そこでようやく立ち止まる。気づいた束が、表情無くチラリと生徒に視線を向けた。

「篠ノ之博士、お会いできて光栄です。私は」

「なんで君は私とちーちゃんの前に立っているのかな？せつかくちーちゃんと一緒に部屋に行こうとしてるのに、それを邪魔する権利って君にあるの？無いよね？ようやくちーちゃんと二人つきりになれるのに、その時間を一秒でも削る事を君が許されると思ってるの？思っていないよね？だから早く私たちの前から消えて」

一切の温度の籠らない言葉を浴びせかけられた生徒が、目を見開いて固まる。心なしか顔色が悪い。

それは、彼女たちの周りで様子を伺っていた生徒たちも同じだった。

「やっぱり、篠ノ之博士って」

「テレビで見た通り？」

「他人に一切興味を持たないって言ってたけど」

「え、でもあの人は？」

「博士と一緒にいる人、誰？」

沈黙の後、騒がしさを増していく廊下。向けられる視線に様々な感情が見え始めて、千冬は目の前で未だ固まる生徒を放って歩き出す。

「あまり騒ぎを起こすな、束」

「どうでもいいでしょ？そんなことよりちーちゃんと束さんの愛の巢へ急ぐべきだと思うよ」

「愛の巢では無いだろ」

「じゃあこれからそうすることにしよう！」

「……はあ」

上機嫌に言った束に、溜息を吐き出して。変わらず向けられ続ける視線に、千冬はうんざりしながら歩き続けた。

## IS学園、入学（後書き）

千冬と束の学園生活スタート。

ただ、なんか学園ものみたいに長くなりそうな予感がひしひしと…  
…省略すべきなんでしょうかねえ……。



## 始まる学園生活

千冬の体に、衝撃が走る。

「ちーちゃん大好き！愛してる！！」  
「知っている」

それはいつもの事で、束が千冬の体後ろから飛びついたせいだった。

過程は分からないがいつもの事なので、あっさりとそれを受け止めて。そうして今度は隣に現れた少年が、千冬に笑う。

「千冬姉！」

「……………一夏、か？」

少年の口から飛び出した呼び方に、思わず目を丸くして千冬はその顔をジッと見つめた。

幼い自分の弟の面影の残る少年は、疑問を持ちながら呟かれた名前にはちくりと目を瞬かせて不思議そうに言った。

「当たり前だろ、どうしたんだよ急に」

「ああ、いや……………すまない。なんでもないんだ」

首を振って、自分よりも高い位置にある頭を撫でる。何とも不思議な気分を千冬は味わった。

「姉さん、ここにいたんですか」

「あ、箒ちゃん！どつたの？どうかしたの？」

「急にいなくなったので、探してたんです。千冬さん、すみません」  
「……いや、気にするな」

次に現れたのは箒で、彼女は千冬に抱き着く束を呆れた目で見ると、千冬に頭を下げた。

上げられた頭は、低いとはいえ千冬の思い描いたものよりも随分と高い位置にあつて、それにもまた不思議な気分を味わう。

知らぬ間に大きくなった二人が、何だか無性に寂しくなつて。千冬は僅かに目を伏せた。

「千冬姉？」

「どうかしましたか？」

両隣で首を傾げた二人が、千冬の前に回り込んでくる。気づけばその手がしっかりと握り合わされている事に、遂には完全に目を閉じた。

「（寂しい、ものだな）」

いつかは離れていくのだと分かっていても、目の前にすればとても寂しかった。一夏は大切な弟で、たった一人の家族だったから。

「（……捨てられたわけでは、無いというのに）」

残されてしまうことが、悲観的な気持ちを持たせるのか。それとも千冬の心に根付く、小さな黒い何かのせいかな。

沸いて溢れる寂しさに目を閉じて、ただ耐える事しか千冬には出来ない。

「大丈夫だよ、ちーちゃん」

そつと、束が千冬の耳元で囁いた。

「束さんは、ずっとちーちゃんと一緒にいるよ。ちーちゃんだけは絶対に離さないから」

「……………」

開いた視界いっぱい、束の顔が映りこむ。いつの間にか真正面から再度抱き着いてきた束に地面に押し倒されて、彼女の言葉にほつと安堵する自分がいるのに千冬は気づいた。

「……………束」

「なーに？ちーちゃん」

「私も、お前と」

何かを言おうとした千冬の言葉は、突然増した重みに息がつまり、途切れる。

「千冬姉！」

一夏が、千冬の体を起こして横から腰に手を回して抱きしめていた。

「俺は、千冬姉から離れたりしないって」

「一夏……………」

「姉さんを千冬さんだけに任せたりは出来ませんから」

「箒……………」

更に横、一夏と逆側から手が伸びて、箒が千冬に抱き着く。

正面を束、左右に一夏と篝。ぎゅうぎゅうと抱きしめられて、耐え切れずに千冬の体がまた後ろへと倒れ込む。

四人揃って一塊のまま倒れて、千冬の上に乗った束が笑った。

「ちーちゃん、人気者だね」

「ああ」

「束さんと、いつくんと、篝ちゃん。ちーちゃん、嬉しい？」

「そうだな……嬉しいな」

大切な人に囲まれるのは、なかなか悪くないと。目を閉じた千冬の体に、だんだんと重みが増していく。

「ちーちゃん、大好き」

「……知っている」

返した言葉に、返事は無い。重みは次第に千冬の呼吸器官を圧迫し、彼女の世界は急速に崩壊を始めた。

耐えかねた重みに千冬が目を開けると、その視界に広がったのは見慣れない天井だった。

「……………重い」

IS学園、寮部屋。寝ている千冬の体に折り重なって目を閉じる、束の姿があった。

「おはよう、束」

「うにゃ!？」

とりあえずは、と。千冬は手始めに、束をベッドから蹴り落とした。

ノートにペンを走らせて、千冬は教師の話を聞いていた。

入学式の翌日から本格的に始まった授業は、千冬と束にはどうにも退屈を感じさせるものだった。

なぜなら、束は授業の中心であるISの開発者であるし、千冬は世間に知られてこそいないが、現時点でISの操縦時間が最も長く、その知識も束から直接教えられている。

つまり、ISの授業は二人にとって既に知っていて当然の事ばかりだった。

「ちーちゃんってば真面目だね」

「お前もノートくらいは出しておけ」

「あつはは。束さんはISの生みの親だよ？束さん以上にISに詳しい人間はいないよ」

そう笑った束の机上に展開されているのは、普段展開されるものよりも小さなディスプレイが一つ。授業中という事で千冬が自重させた結果だ。

ISが発表されてからというもの、束は自身の開発した物を表だって使用することが増えた。情報開示を求められても、全て拒否しているが。

学園内であれば、直接の目は生徒と教師しか無い。使用しても、周囲で勝手に騒ぐだけで束と千冬には関わってこないと分かっているからだ。

それでも騒がしくなることに、千冬は不機嫌な顔をするが、普段通り行動しても勝手に周囲が騒ぐのだから、あまり違いは無い。

「次の授業はISを装備しての実践を行いますから、移動は迅速にお願いします」

授業終了のチャイムが鳴る直前、教師が次の授業の指示を出した。心なしか教室全体に張りつめた空気が満ちる。束によって各国にコアが配られているとはいえ、開発されたISは多くない。

殆どの生徒が、実際にISを装備するのは初めて、それ以外の数少ない生徒でさえ、一度か二度、装備したくらいだろう。緊張するのも仕方のない事と言えた。

「ちーちゃん、こんなくだらない授業はサボってお外飛んでみよつか！」

「駄目だ」

千冬と束だけは、何一つ変わり無かった。

ISを装備しての授業は、訓練機の数に制限があることから、一度全員に向けて説明をした後に、一つの訓練機に対して五人から行われることとなった。

「ちーちゃんと一緒じゃなきゃだ」

「我儘言っな」

その結果、千冬と束は別の組みに割り振られる。だが束はそれを頑として受け入れようとせず、千冬にくっ付いて離れない。

千冬は視界の端に、オロオロとする教師を見つけた。束相手では下手な事が出来ないのだろう、機嫌を損ねてしまえばISに関する情報が手に入らなくなる。

当てにならない事が分かって、千冬は抱き着いたままの束の頭に手を置いた。そのまま力を籠めて持ち上げる。

「ち、ちーちゃんの愛が過激すぎて束さん頭があああああ!!」  
「授業の間だけだ、大人しくしている」

そうして放り投げた先で、束が勢いよく地面に突っ伏して痙攣した。千冬はといえば、何事も無かったかのように自分の組みに向かつて行く。

クラスメイトの目が驚愕に見開かれていたが、千冬は気にせずに訓練機に目をやって、呆然としたままの班員を見回した。

「いいのか、やらなくて」  
「えっ、……あ!」

声をかけられてようやく思い出した少女が声をあげる。それによって教師も落ち着きを取り戻したらしく、チラチラと束と千冬に目をやっていたが、やがてISの装着を開始するようにと指示を出す。少女たちが宛がわれた訓練機の前に立つ。訓練機は打鉄、ブレードを主な装備とした近接戦に特化したISだ。

千冬は、同じ班の少女が打鉄を前に苦戦しているのを眺めていた。班の少女たちは全員がIS未経験者、一度でも装備した事のあるものなら何とかなるものも、全くの経験の無い少女たちでは苦戦するのも仕方が無い。

「(……いや、適性検査で乗ったことがあるのか?)」

IS学園に入学する前に、少女たちはISとの適性を計る検査を受けている筈だ。生憎と千冬はその検査を受けていないが、だとしてもたったの一度きり。苦戦することに変わりはない。

教師が順番に班を周っているようだが、千冬たちの所に来るのはまだ先になりそうだった。

「ね、ねえ、織斑さん」

「……なんだ？」

班員の一人が控えめに声をかけてきた。

「織斑さんって、篠ノ之博士と仲が良いん、だよな？」

「まあ、そうだな」

「ならさ、ISの装着の仕方とか、教えてもらえない？なんか、上手でなくて……」

「あと、篠ノ之博士の事、いろいろ教えてほしいなあ、なんて」

束と親しいという事から、千冬もまたISには詳しいと判断されたいらしい。判断こそ間違えてはいないが、千冬としては面倒極まりなかった。

「（ただ眺めていようと思ったんだがな……）」

この様子では、授業内で班員全員が装着するのは難しいだろうと考えていただけに、矛先が自分に向けられて溜息を吐きそうになるのを堪えた。あまり露骨に態度を出すと、相手に与える心象は悪くなる。

束は他人を全く気にせずにいるが、千冬は少なからず、円滑な人間関係の為にそれを気にかけていた。



「……ISに背を向けて、身を預けるんだ。あとは勝手に装着される」

「えっと、やってるんだけど……」

「緊張しなくていい。落ち着いて、ただ身を任せているだけで十分だ」

「う、うん」

ISを装着できずにいた少女が、深呼吸を繰り返してゆっくりと体をISに預ける。

ISから発せられた光が少女を包み、それはゆっくりとだがやがて収束していった。少女がISを身に纏って現れる。

驚いた顔をした少女が千冬を見て、笑みを浮かべて足を一步踏み出した。

「ありがとう、織斑さあつ！？」

ぐらりと傾く少女の体。ISを装着するのに苦戦するような少女が、装着した状態でどれくらい動けるのか。

答えとしては、ともに動けるわけもなく。踏み出した足は上手く動かず、そのまま重力に従って地面に向かって倒れようとした。

ISを装着している限り、ただ転んだだけで装着者が怪我をする事は無い。だが問題だったのは、その転んだ先に他の少女がいた事だった。

班員の少女は倒れ込んでくる少女に驚き、咄嗟の事で判断が下せず固まってしまっていた。このままISを装着した少女が倒れれば、下敷きとなり怪我をするだろう。

千冬は、そう判断した瞬間に、束が自分に与えたIS、暮桜を展開し装着した。瞬き一つにも満たない速さでの装着に気づけた少女はおらず、ただISを装着した千冬が倒れかけた少女を支えているのを見て、初めてその事実気づいた。

「織斑さん……?」

「そ、そのISは?」

「……私の専用機だ」

言葉少なに答えて、千冬は少女がきちんと立ったのを確認して手を離す。

暮桜を解除して地面に下りると、ISを装着したまま目を見開いて固まる少女を見上げた。

「次が待っているぞ」

「あ、はっ、はい!!」

慌ててISを解除する少女と、自分を見つめる少女たちから数歩分の距離を取って。

左手で光を反射するブレスレットに指を這わせると、千冬は聞こえてくる囁きに深く溜息を吐いた。

「（煩い、な）」

専用気持ちは、まだ世界でも片手で足りる数しかおらず。ましてや千冬が持つのは、国では無く束から与えられた機体。

束との関係から注目されるだけでは無く、これからは千冬を持つISでも注目されるだろうことは容易に予想がついた。

「無視しちゃえば良かったのに」

ギュッと抱き着いてきた束が、千冬の耳元で囁く。千冬に強制的に迫いやられた束だったが、再度戻ってきたようだ。

「わざわざちーちゃんが助けなくたっていいのに」

「一応は班員だ。それに、目の前で怪我をされるのも鬱陶しい」  
「気にしないで良いよそんなの」

束は拗ねたように言葉を紡いだ。

「優しいちーちゃんに、束さんはお餅を焼いちゃうよ。焼きまくっちゃうよ」

「……別に焼かなくてもいい」  
「うっ、ちーちゃんが愛を受け取ってくれない……」

バツサリと切った千冬に、束は毎度ながらしょんぼりとした風に千冬の首に顔を埋める。くすぐったさに僅かに千冬は身動きした。

「（にしても、本当に……）」

抱き留めた束の体に手を回しながら、千冬はクラスメイトの視線に目を閉じる。

「（騒がしくなりそうだ）」

千冬の前途多難な学園生活は、幕を開けたばかりだった。

## 厄介な人気者

IS学園に入学した生徒は、日本人だけでは無い。当然のように、黒髪の中には金髪といった日本人とは違う色が混ざる。

日本人の少女たちはISに興味を持っただけで入学した者が多数いるが、外国から入学した者たちにそれだけが理由なのは少数だ。少数では無い多数派は、それぞれの国からISの技術を多く取得してくること、また篠ノ之束に近づき、懇意にすることを目的に加えられる。既にISがその国の国防力に繋がるといえる程になっている今、開発者たる篠ノ之束とどれだけ良好な関係を築けるかはとても重要だった。

「あの、篠ノ之博士。よろしければ私たちとお食事でも」

「邪魔。ちーちゃん、束さんはお腹がすいたよ！」

「分かったから耳元で騒ぐな」

話しかけられたのを一蹴した束が、千冬に抱き着いて笑う。弁当箱を二つ持った千冬は、歩きづらそうに束を引き剥がしにかけりながら教室を出て行った。

いくら少女たちが束に近づこうとしても、当の束は少女たちに一切の興味も抱かず。それどころか心底鬱陶しそうに、視線すら向けずにいるのだから、少女たちは焦りを抱き、同時に

「なんなんですよ！」

「私たちがこんなにもお誘いしているというのに」

自尊心の高い少女は、そんな対応に憤慨する。けれど、国から頼

まれている目的の束に怒りをぶつけるなどという愚かな行為は、出来る筈も無い。

そうすると、その怒りの矛先は自然と、束の身近にあって自分たちにとって邪魔な存在へと向けられた。

「織斑千冬、篠ノ之博士といつも一緒にいて……」

「あの子さえいなければ、博士だって私たちの話を聞いて下さるわ」  
「そうよ。あの子が博士を無理矢理引き留めているんだわ」

向けた怒りを正当化するように少女たちは口々に言い、千冬への怒りを高める。

それは、入学式から一週間が経過した日。生徒たちもようやく、ISに慣れ始めた頃の事だった。

騒がしさから離れた場所を求めて千冬と束がやって来たのは、学園の屋上だった。

「ちーちゃん、あーん」

束の手に握られた箸に摘まれた唐揚げが、千冬の口元に差し出される。

それを、いつもの事かと千冬は口を開けて受け入れ、飲み込んでからお返しとばかりに自分の弁当箱の唐揚げを束に差し出した。

「んー、ちーちゃんの愛情満天だね!!」

「良かったな」

「うん! はい、ちーちゃん。あーん」

束の持つ弁当箱の中身は、殆どを千冬が食べてしまっている。対して、千冬の持つ弁当箱の中身は、同量だけ束が食べてしまっていた。

二人が持つ弁当を作ったのは千冬であり、中身は同じだ。そして千冬は、束が差し出してくるおかずを返す様に、自分の弁当箱からおかずを差し出す。

それを繰り返すうちに、二人の昼食は終わってしまうのだった。空になった弁当箱を仕舞い、千冬は座ったまま柵に寄りかかり空を見上げる。雲が流れる青空が広がっていた。

「ちーちゃん、眠そうだね」

投げ出す様に伸ばされた千冬の片足に寝転んだ束が、千冬を見上げて言った。

千冬の表情に変化は見られなかったが、その無表情から束は確かにそう読み取っていた。

「少しな」

そのことに、千冬は小さく頷いて返した。

「寝る？」

「……束はどうするんだ？」

「どうしよっかな」。天才束さんの頭脳は、寝てる時もフルスロットル！休む暇なんて無いからね」

寝るに寝られない束の目の下から隈が消える事は無い。千冬はそれを知っている。

こんな会話をしたのも、一度や二度では無かった。軽く目を閉じた千冬は、柵に頭を預けて体から力を抜いていくと、静かに息を吐

き出した。

「予鈴が鳴ったら、起こしてくれ」

「はいはい。ゆっくりおやすみ、ちーちゃん」

「……おやすみ」

しばらくして、千冬の口から寝息が聞こえ始めると、束は見上げたその寝顔に笑みを浮かべる。

「かわいいな、ちーちゃん」

鋭い目は閉じられて、引き結ばれた唇は少しだけ開いて。

あどけない寝顔を見られるのは、この世界で束と、一夏と篋だけだ。騒がしいのを嫌い、建前はともかく根本は束同様の千冬がこうも安らかに眠るのは、自分にとって大切な人間の前だけ。

つまり、この寝顔を見られるのは、千冬の大切な人間だけなのだ。

「ちーちゃんは愛情を、言葉じゃなくて態度で示してくれるもんね」

束さん感激、と。ゴロゴロと猫が懐くように千冬の腰に抱き着いて束は笑う。

しつこく自分に話しかけようとする人間がいるのは鬱陶しかったが、四六時中千冬と一緒にいられるのは、束にとって嬉しい事だった。それこそ、大人しく三年間をここで過ごしても良いと思うくらいに。

朝起きてから夜寝るまで一緒にいられる。それは誰よりも千冬の時間を共有できている事に他ならない。それは、千冬の弟の一夏よりも長い時間かもしれない。

「……まあでも、ここでもちーちゃんが人気者なのはジェラシーだ

けどね」

千冬に向けられるクラメイトの視線は変わりつつある。

これまでが、IS開発者の束と共にいる正体不明の一生徒に向けられる妬みや疑念、不審だったものが、授業にISの実技が入るようになってからは、誰よりも上手くISを操縦し、またISについて教えてくれる頼りになる生徒に向けられる尊敬、敬慕、と。

もちろん、誰よりも早く専用機を持つ人間として妬みを向けられるのも事実だが、それでもクラスの多数の生徒から、千冬は慕われ始めている。

それは幼稚園から中学校まで、束が見続けてきた光景と変わりなかった。

「ちーちゃんは束さんだけのものなのに……あ、いつくと篤ちゃんとは別枠ね」

誰にともなく言って、束は千冬を見上げる。変わらぬ寝顔がそこにあった。

「……興味ないなら、ちーちゃんも無視しちゃえばいいのになあ」

どこに行っても人気者な千冬に少しの嫉妬を抱きながら、束は千冬の寝顔を眺め続けた。

午後の授業が始まり、千冬はいつものようにノートを広げる。隣の束は、教壇に立つ教師である朱莉に一切の視線を向けずに、空中投影した小さなディスプレイを眺めていた。



「えー、それでは。今日は授業の前に、このクラスの代表を決めたいと思います」

「クラスの代表？」

「先生、それってなんですか？」

ぼんやりとノートを眺めていた千冬は、顔をあげて質問される朱莉を見る。

「クラス代表は、文字通りそのクラスの代表です。各クラスの代表で行われる対抗戦などがあり、対抗戦を通して全体の實力を測ります。實力が分かり、競い合えば向上心も生まれるでしょう。ちなみに、クラス代表は一年間変更が出来ませんから、その辺りも踏まえて考えるようにしてください。自薦、他薦は問いませんから、手早く決めてしまいましょう」

そう言いつつも、朱莉はなかなか決まらないだろうと考えていた。一週間が経ち、ISの操縦に慣れてきたとはいえ殆どが未だ初心者、経験者も初心者とさほど変わらないレベルでしかなく、そんな中で立候補する者がいるとは思えない。

一人だけ実力的に飛びぬけている生徒はいたが、自ら立候補するような人間とは朱莉には思えず、また誰かが推薦する可能性も低く思えた。

「それでは、誰か立候補、推薦をする人はいいますか？」

「はい！」

けれど朱莉の予想を裏切って、何人もの手が一度に上げられた。

「織斑さんを推薦します！」

「私も、織斑さんを」

「織斑さんが良いと思います」

次々上がる同じ名前に、千冬は訝しげな顔をし、束はちらりとディスプレイから視線をあげた。

どうにも面倒事に巻き込まれそうな気がして、それを確信へと変えたのは朱莉の一言。

「他にはいないみたいだし……では、織斑さんを一年一組の代表とします。効率化の為に、本人の辞退は認められないので、織斑さんもよろしく願いますね」

「……………分かりました」

先回りするように付け足された言葉に、千冬は溜息を飲み込んで頷いた。

それに生徒たちは笑みを浮かべて喜び始め、千冬はうんざりとした気持ちを抱えて椅子の背もたれに寄りかかる。束が睨むようにして静かに生徒たちを一瞥した。

「ちーちゃん、本当にやるの？」

「辞退は出来ないらしいから……仕方ないさ」

「でも」

「土日に戻る条件に影響が無いなら、どうでもいい」

「……………ん、分かったよ」

既に興味をなくしている千冬に、束も納得したように頷いて、仮想キーボードに手を伸ばす。

「（ちーちゃんが嫌がったら、潰しちゃお）」

至極当然のようにそんなことを思って、キーボードに手を滑らせ

る。始まった授業には、一度も顔をあげなかった。

## ある休日の予兆

千冬と束がIS学園に入学してから、二度目の土曜日。寮生活から解放される、二度目の休日。

週明け早々にクラスの代表という面倒な立場に祭り上げられた千冬だったが、最初に提示した条件であるこの帰宅だけは、どんな理由があろうと貫くつもりだ。

「（束の事を言えないな）」

この土日は千冬に便乗して勝手に帰宅している束が、妹の箒へその溢れすぎて止まらない愛情を注いでいるのは分かり切っている。それほど露骨では無いが、千冬は千冬で一夏への並々ならぬ愛情を抱いているのは確かであった。

そんな一夏と、千冬は今少し遅い昼食を共にしている。起き抜けに寮を出発して、つい先ほどようやく帰宅したのだ。

「なあ、千冬姉。学校は？どんな勉強するんだ？」

「基本はISに関する授業ばかりだ。一夏はどうなんだ？難しいか？」

「平気だった」

「分からないところがあるなら、私がいる間に聞いておく事だ。教えてやる」

「んー……じゃあ、後で宿題手伝ってほしい、かな」  
「いいぞ」

五日ぶりの姉の帰宅である事から、一夏としてはもう少々遊びを

中心としたい気持ちはあったが、姉が騒がしいのを嫌うのは十分に承知していた為。

とりあえずは今日一日をゆっくりと過ごしてもらおうと、天気の良い外には目を向けずに家で過ごすことを決めた。

「そういや、IS学園って女の人ばかりなんだよな」

「ああ」

「千冬姉のクラスも？」

「そうだ」

「……千冬姉、クラスの人とどんな話してるんだ？」

純粹な疑問から、一夏はそう問いかけた。

どういうわけか、千冬は学園の事を話そうとしない。一夏が問いかければ隠さず答えてくれるのだが、自分から言わないのだ。

そして、自発的に千冬の口から束以外の学園の人間の名前が出て来る事も無い。それはIS学園に入学する前から変わっていない事だったが、だからこそ余計に、一夏は千冬の人間関係、基友人関係に興味が沸いて仕方が無かった。

「……………」

「……千冬姉？」

しかし、その問いかけに千冬はなぜか無言を返す。その初めての答えに、一夏は不思議そうに瞬きして名前を呼んだ。

「どうかしたのか？」

「……ああ、いや。すまない……考えてはみたんだが……」

何とも不安を感じさせる前置きをして、千冬は眉尻を下げて口を開く。

「特に話していいいな」

「……話して、ない？」

「授業で必要なら話すが、それ以外はな。束と一緒にいるから、話す必要が無いんだ」

「……………千冬姉、束さん以外に友達、いる？」

「あれを友人と呼べるのか、正直分からんな」

千冬は考えるように箸を置くと顎に指をあてて、同じクラスの少女たちの事を思い出す。といっても、思い出せる事は存外多くは無かった。

「遠巻きに見ているばかりで、話しかけては来ても一言二言で離れていく。名前を知っているだけで、他は何も知らんな」

「じゃあ、話すのは束さんとだけ……………」

「静かでもいいさ」

離れたところで騒いでいて煩いが、と最後につけたして、千冬は温くなったお茶を啜る。

一夏はそんな姉の学園での姿に幼いながらに頭を抱えなくなった。長年、千冬の態度が一夏と箒たちに対するものと、束に対するもので違うのは分かっていたし、さらに言えばそれ以外に対する態度が一貫している事も分かり始めていた。

束は他人に興味を持っていない事を露骨にするが、千冬は他人に興味を持っていない事を露骨にしない。話しかけられれば答えるし、その答えも束のように全力で拒否するものではない。

けれど、自分から関わろうとしないのは束と同じ。千冬は束と一夏と箒にしか、自発的な行動を取らない。それが、一夏が千冬への理解を深めた結果得た答えだった。

「一夏はどうだ？友達は出来たか？」

「あ、うん。面白い奴がいてさ」

「ほう。それは良かったな」

「……………うん」

自分の事以上に姉の学園での事で心配になりながら、一夏は自分の学校での出来事を話し始めた。

千冬と束がIS学園の寮に戻ったのは、日曜日の夜遅く。エントランスで確認した時計の短針は九を指していた。

帰宅していようといなかつたと関係なしに千冬を求める束が、日曜日の朝から箒を引き連れて織斑家を訪れ、四人で思い思いに過ごした結果。千冬は一夏と箒が変わらず仲のいい友人である事に安堵した。箒の恋心は、未だ一方通行であるらしかったが。

受付にて戻ってきた手続きを終えた千冬が、束と共に寮の廊下を歩く。とうに夕飯もシャワーも終えたらしい少女たちが、女子しかない事から来る警戒心の薄さが分かる服装で歩き回っていた。

「あー！」

「織斑さん……………」

ちらほらと耳に届く少女たちに囁き声に気づきながら、千冬はそれを見無視して歩く。わざわざ囁きに反応して振り向いてやる性格では無かった。

「篠ノ之博士……！」

そして千冬の隣を歩く束は、堂々と名前を呼ばれても立ち止まら

なければ、一切の反応をしなかった。

呼ばれたのが束である事から千冬の足は止まらず、また束の足も止まらず、後ろからそれに慌てたらしい足音が近づいてくる。足音は一つでは無く、複数であった。

「待つてください、篠ノ之博士！」

三人の少女が、千冬と束の前に回り込んでくる。いくら寮の廊下が広くても、三人横並びになられては残る通路も少なく。二人は強制的にその足を止めざるを得なかった。

「お探しましたのよ、篠ノ之博士。どちらへ行ってらしたのですか？」

「私たち、是非とも博士とお話したいことがあったんですの」

「どうでしょう？ 私たちの部屋でお茶を飲みながらゆっくりお話しませんか？」

少女たちの目当てはあくまで束一人だった。

国からIS開発者である束と懇意にするように言われたのか、はたまたより多くの技術を得るための策か。

どちらにしろ、三人の少女の言葉に千冬は自身が必要であると考え、狭くなった通路を通り抜けてその場から立ち去ろうとした。

「ちーちゃん、どこ行くの？」

一步、横にずれたところで背中にのしかかる重み。首に束の腕が回され、その体重の殆どは千冬の体に預けられていた。

一人離れていく千冬を束が許す筈も無く、また束を引き連れた千冬を少女たちが逃がす筈も無く、道は現れた邪魔者に忌々しげに顔を歪めた少女たちによって閉ざされた。



「あなた、なんなんですか？」

「ずいぶんと博士と親しいようね？どういっつもりかしら」

「私たち、これから博士とお話するの。貴女は呼びじゃないのよ、さつさと消えてくれないかしら」

「（……煩いな）」

理不尽の一言に尽きる少女たちの物言いに、千冬は心中で思う。

どうにも、束と共にいる千冬は目の敵にされるらしかった。

チラリと視線だけで束を見れば、肩のあたりにある顔は無表情になっ  
ていて、その瞳は冷め切っている。見つめる先にいる少女たちを、人間と捉えているかも怪しいように思えた。

「道を開けてくれば、すぐに立ち去る」

「その前に、貴女が捕まえている篠ノ之博士を離してあげたらどうなの？」

「……………」

千冬の手は、下げられたまま一度も上がってはいない。千冬と束の状況は、どう見ても束が千冬を捕まえているとわかっていい。

しかし、それぞれの思考に囚われている少女たちの目には、そんな風には見えず。少女たちにとって都合の良い様にしか、二人の事を捕えていなかった。

「貴女みたいな一生徒というより、私たちと話した方が博士にとっても十分な利益になるわ」

「なんたって、私たちは三人ともIS適正Aランクですよ！」

「A判定は十人にも満たないわ。貴女なんて、Cランクが精々ですよっ？」

「よくてBかしら？ふふっ、どちらにせよ、これで分かったでしょ

う？貴女なんかが博士と一緒にいて良い筈が無いのよ！」

そして少女たちは気づけば千冬を完全なる敵と見做し、言葉による攻撃を開始する。

現在のIS学園において、入学前に行われたIS適正検査を元に割り当てられたランクは殆どがCまたはB。Aは少女たちの言葉通り十人にも満たず、それを超える適正の少女もまたいない。

「……そういえば、貴女専用機を持っているんですって？」

「篠ノ之博士が貴女に作ったって噂だけど」

「有り得ないわよね。大方、貴女が言いふらしたデマなんでしょう？」

少女たちの言葉は止まらない。千冬と束もまた、口を開かない束の表情は一貫して無のままであり、そしていつしか、千冬表情もまた束のものと近くなりつつあった。

「何とか言ったらどうなの？」

そうして与えられた機会に、けれど千冬は口を開かず。興味を示さない瞳を少女たちに向けた後、束の体を引き連れたまま少女たちに背を向けた。

「ちょ、ちよつと！？」

無言で立ち去ろうとする千冬に、逆に慌てた少女たちが走り出す。最初に廊下で呼び止めたとき同様、またも進行方向に回り込んできた少女たちにが、顔に怒りを浮かべて千冬を睨んだ。

「何処へ行くつもり？」

「……それを君たちに言う必要は無いだろう」

「いいえ、私たちは博士に用があるのよ。貴女がどこで何をしようと勝手だけれど、博士は置いて行ってくれないと」

「……………束」

千冬は、背中に引つ付いた束に声をかけた。無表情の束が一瞬にして、名前を呼ばれたことに対する喜びに染まる。

「お前に用事があるそうだぞ」

「束さんはそんなことよりちーちゃんとお部屋でのんびりお茶しながら愛を育みたいな！」

「……………」

束の返したずれた回答に、千冬は面倒くさそうな溜息を一つ吐き出した。きちんと答えると言わんばかりに、首に回された腕を外して束の体を廊下に落とす。

「うゝ、ちーちゃん酷い」

「お前が原因だろう。部屋に戻りたいなら、自分で何とかしろ」

「えー、でも束さんはこんなのと話すよりもちーちゃんの声を聞きたいんだけど」

「部屋で少しくらいなら付き合ってやる」

「あ、ほんと？」

「ああ」

それなら、とばかりにぴょんと立ち上がった束がまたも千冬の体に腕を回して、少女たちを見やる。

「篠ノ之博士！どうか私たちと……………」

「煩いよ。とりあえず今すぐその口閉じて呼吸止めとこつか？」

「え……………」

浴びせかけられた冷水にも似た言葉は、視線を向けられた事に喜んだ少女たちを一瞬にして困惑と混乱へと落とした。

束の表情は千冬に向けられた笑みを一切残してはおらず、無の一言。唯一、その瞳だけが　　珍しくも、どこことなく怒りを湛えているのが伺えた。

「正直、ちーちゃんを馬鹿にした君たちに言葉の一つも視線の一つもあげたくなんでないんだけどさ、これ以上邪魔するなら仕方ないよね。君たちさ、なんで束さんとちーちゃんの邪魔をするのかな？君たちが邪魔する権利なんて塵ほども無いんだけど。束さんはこれからちーちゃんと一緒に二人つきりでゆつくりと夜を過ごそうとしてるんだよ、それを邪魔されるのはとっても不愉快なんだよね。それになんか好き放題言ってるけど、Aランク？それがどうしたのさ」

束は片手で千冬の左手を取り、持ち上げたその左手首に唇を寄せた。

「ちーちゃんはランクで言ったらSだよ。それに、暮桜は束さんが一から十まで全部作ったちーちゃん専用の、ちーちゃんの為だけの専用機。ちーちゃん以上にESに愛されてる子はいないよ？」

前半の言葉は、千冬にとっても初耳であり、そして言葉全体は少女たちに大きな衝撃を与えた。

少女たちは、数少ない最高位のランクである事にそのプライドを更に高くしていたのだ。だからこそ、正体の知れぬ千冬相手にあっても強気でいられた。

しかし、束から齎された情報はそのプライドを打ち崩す弾丸であり、少女たちが驚きに目を見開き唇を戦慄かせるには十分であった。

「そ、そんな……」

「Sランク？本当にいるなんて」

目の前で謔言の様に呟く少女たちだけでは無く、衝撃の事実が密かに聞き耳を立てていた周りの少女たちにも伝染する。

俄かに騒がしくなった周囲を視線で一瞥してから、千冬は束に言った。

「私のランクがSだなんて、知らなかったぞ」

「言っただけだからね」。でも、当然だよ？ちーちゃんは私に愛されてて、私の子どもにも愛されてるんだから」

「……答えになっていない」

「んー、そもそもISはちーちゃんの為に作ったんだよ？なら、ちーちゃんが一番使いこなせて当たり前だよ」

何も不思議な事はないと、束は千冬に笑顔を見せる。千冬は静かに溜息を吐いた。

未だ呟き続ける少女たちには再度背を向けて、今度こそ足早にその場から立ち去る。衝撃の事実は、明日にはもう学園全体に広まっている事だろう。

騒がしい事を嫌う千冬は、基本は静かな学園生活を送ろうと考えていたのだが、それはどう頑張ろうとも無理な事なのだと悟らざるを得なかった。

「さあ、今日もベッドで愛を語らうとしようちーちゃん！ー」

「寝るだけだろう」

それでも、騒がしさの原因である彼女を手放そうと思わない事が、千冬の真実だった。



## 衝撃の事実、広まる

千冬と束の食費は無料と断言。ただし、それは食堂を使った場合に限る。

政府は二人がIS学園に入学するにわたり、二人の諸々の費用についてはほぼ免除にすることを条件として受け入れている。

束は、当然ながら政府にとっては目の届く場所で、それも自分たちが容易に監視できる場所にしてほしかったから。そして千冬は、そんな束を自分たちにとって都合の良いIS学園に入学させる為に、たった二人分の費用を免除するだけで束という爆弾を一か所に留めておけるのだから、政府にとっては非常に安い買い物だったろう。

なので、そういった理由から免除された食費のおかげで、千冬たちは無料で美味しい食事を食べる事が出来る。千冬自身が弁当を作るとなると、その材料費ばかりは別途で支給される生活費から出されるので、無料というわけでは無くなるが、時折、束のたつての希望で作ることもある。

けれど基本は、二人の食事はIS学園内の食堂で済まされた。無料ならば使わない手は無いからだ。

「…………ふむ」

やって来た食堂は、千冬と束同様に昼食を食べに来た制服姿の少女でいっぱいだった。

午前の授業が終わり、早々に教室を出たもののやはり混み合う事に変わりは無かったらしく、千冬は空いた席が無いかと食堂をぐるりと見回した。束は、千冬の分の食券を持って注文の列に並んでいる。

る。当然ながら嫌がっていたが、二人揃って並ぶよりも一人は席を確保するべきだと千冬に言われて、取り残されるようにして並ばされていた。

そうして席を確保するべく動き出した千冬は、四人掛けの空いている席を見つける。他に空いている席も無い事から、とりあえずは席の一つの椅子を引いて座った。

「（やはり、煩いな）」

何度も訪れた食堂とはいえ、その騒がしさに千冬は辟易する。出来るなら静かな空間で食事をしたいと何度も思ったが、食費免除はやはり魅力的であった。

注文を待つ列から離れた席で、千冬は束を探す。列の前方にその姿があり、無表情ながらその表情は酷く苛立っているのがよく分かった。といったも、周りはそれに気づいていないだろう。それでも遠巻きに、束に視線を寄越してはこそそと話していた。

「あの人だよ、Sランクの……」

「篠ノ之博士が専用機を作ったんでしょ？ いいなあ」

「でも、それならテレビで紹介されたりするんじゃないの？」

「織斑さん、だっけ？」

「博士と仲が良いみたいだけど……なにか知ってる？」

「さあ……」

そしてそれは、千冬も同じ事であった。

遠巻きに眺める少女たちは、興味深げに千冬を見ては小声で会話を交わす。聞こえてきた会話に千冬は煩いとは感じるも、それ以外は特に思ふことも無かった。

ただ、騒がしい空間で、自ら置いてきた束が早くやって来るのを待ち続ける。



「君、織斑千冬さんだよね？」

そうしていたところに、唐突に後ろから声をかけられて千冬は振り向いた。

眼鏡をかけた少女が一人、何が楽しいのか笑みを浮かべて立っている。首には、小さなデジタルカメラを提げていた。

「そうだが、私に何か用か？」

「取材させてほしいんだよね。織斑さんについて」

「私を、取材？」

千冬は驚いたとばかりに僅かに目を見開いて見せた。そう、と頷いた少女はメモ帳とボールペンを取り出すと、きらりと目を光らせる。

「IS開発者である篠ノ之博士と常に一緒にいる謎の美少女、その真実はIS適正Sランクの専用機持ち。これだけでも、私たち生徒からすれば興味を惹かれて仕方ないのに、君も篠ノ之博士も誰とも必要以上に距離を詰めようとしてない。遠目から観察するのはもう終わり、これからはどんどん攻めて攻めて攻めて攻めて、君たちの事を明らかにさせてもらうよ！……あ、ちなみに私は文野新菜。気軽に文ちゃんと呼んでくれていいから」

文ちゃん、文野はようやく言葉を止めると軽くウィンクをして、断りもなしに千冬の隣に座った。瞬間、千冬が目が細められ文野を睨むように見るが、文野は、

「取材が終わったらすぐに退くよ。だから、お願い！協力して」

ペンを片手にそう言うだけだった。

そんな彼女と、彼女と自分に視線を向ける周りの少女たちを鬱陶しく思いながら、千冬は溜息を飲み込む。ちらりと視線をやった注文待ちの列には、束が未だ並んでいた。

「……答えられることには答える。だから、早くしてくれ」  
「ご協力感謝します！では早速……」

早々に立ち去ってほしい千冬が了承すると、文野はかちりとペンを鳴らして質問を始める。

「篠ノ之博士との関係は？」  
「幼馴染だ。それ以外の答えは無い」  
「それはいつから？」  
「幼稚園の頃からだな。小中も一緒だった」  
「……にしては、仲が良すぎる気もするんだけど、その辺は？」  
「知らん」

にべも無く言い放つ千冬に、文野は少しばかり物足りない顔をしながら気を取り直したように笑みを浮かべた。

「君の持つISは、博士が君の為に作ったって言うけど、それって本当？」

「束が言うなら、本当なんじゃないのか」

「君は何も知らないの？」

「入学直前に突然渡されたからな。詳しい事は、私もあいつに聞かなければ分かんさ」

「ふむふむ……ところで、ISの操縦技術や知識がずば抜けてるって話があるんだけど」

「それが？」

「ISの操縦技術や知識は、博士直伝？」  
「多少はな」

知識については束直伝ではあるが、操縦技術については千冬の経験が大きい。

IS開発当初から、実際に装着し使用していたのは千冬ただ一人。調整の為に何度も装着していたので、稼働時間は百時間近くと言っても良い。

現時点のIS学園におけるISの実技は、装着から歩行、低速度での低空飛行を行っている段階であり、基礎の基礎といっても過言では無い程度で千冬が躓くはずもなく、慣れてしまっているが故に完璧に行われる動作は、少女たちの尊敬を集めた。

ただ、そんなことまで話すつもりも無い千冬は、この質問にこれ以上答えるつもりが無かったので口を閉ざし、それに文野はまたも物足りない顔をしながら次の質問へと切り替える。

強引に取材を取り付けたわりに、この辺りの空気は随分と読めるらしかった。

「次は、君の適正ランクなんだけど」  
「Sランクらしいな。私にそれ以上、話せる事は無い」

というよりもランクについて、何を話せと言うのか。文野はふむ、と考える様子を見せたが、すぐに次の質問をする。

「家族構成は？」  
「……………なに？」

一転して、ガラリと変わった質問の方向性。千冬は訝しげに文野を見た。

対して文野は、メモ帳をゆらゆらと左右に揺らして、にんまりと

笑って見せる。

「やっぱり、織斑さんについてもっと掘り下げたいしさ。さっきまでの質問は、噂が事実かどうか確かめたかったってのもあるの」

「そうか。なら、もう良いだろう」

「いやいやいや、是非とも答えてもらいたいんだけど。皆だって聞きたがってるからさ」

お願い、と言って文野は質問の答えを待った。けれどそれに、千冬はただ一言だけを返す。

「答えるつもりは無い」

冷めた視線が文野を射抜き、また聞き耳を立てて遠巻きに見ていた少女たちを射抜いた。

淡々とした様子は先ほどまでと変わりなかったが、新たに加わった冷たさが、好奇心で高まっていた少女たちの心を一気に冷やす。

けれど、それは一瞬の後に消え去り、千冬は興味ないとばかりに文野から視線を背け何も無いテーブルを眺め出した。

「……………えっと、織斑さん」

「なんだ？」

「あー、その、質問なんだけど、さ」

千冬の周りで異常なほどに静まり返った少女たちの中、文野だけは立ち直り、また質問を繰り返す。

「趣味、とかは？」

「無いな」

「あー、じゃあ、好きなもの……………」

「答えるつもりは無い」

それ以降の、千冬を掘り下げようとした文野の質問は、全て無いか答えるつもりは無いという回答しか得られなかった。

機嫌が悪いのかどうかも分からない無表情の千冬に、文野は困り始める。そうして諦めたばかりに、最後の質問を口にした。

「一年一組のクラス代表として、一言お願い」

質問では無く、お願いであつた。

「……精いっぱい頑張ろうと思う」

「んー、出来ればもう少しあると良いんだけど」

「悪いが、これ以上言える事は無い」

「なら、適当にそれっぽく脚色しても良い？」

「……好きにしろ」

その辺りについて、千冬は特に興味も無く。駄目だと言ってもされるだろうことを思うと、何かを言うのも面倒になっていた。

「ちーちゃん!!」

最後の最後に写真でも、と文野が言おうとしたところで、声が割って入る。二人分のトレイを持った束が、見事なバランス感覚のもと千冬の元へ走って来ていた。

やって来た束がトレイをテーブルに置いて、我慢できないとばかりに千冬に抱き着く。隣の文野は目に入っていないらしくった。

「一人で寂しかったよちーちゃん!束さん思わず周りの全部を石ころに変えたくなっちゃったよ!」

「やめる。ありがとな、束」

「そのちーちゃんの一言で束さん幸せでお腹いっぱい!!」

ぐりぐりと座っている千冬之首筋に顔を埋めた束に、千冬は適当に置かれたトレイを引き寄せて言う。

「早く食べるぞ。昼休みが終わる」

「はいはい………で、君はいつまでそこにいるのかな？」

「へ？」

上機嫌が打って変わって無表情に、けれどその瞳に敵意を宿して、束は千冬の隣に座る文野を睨んだ。

「話聞いてたよね？これからちーちゃんと束さんはご飯なんだけど、そこに君が座ってる理由は無いんだよ。しかも誰の許可を持ってちーちゃんの隣に座ってるの？そこは束さんの席であって君のじゃないよ、邪魔だよ」

「つごめんなさい」

一から十まで拒絶を言われて、文野は体を震わせて席を立つ。とてもではないが、これ以上は千冬に取材など出来ようも無かった。もちろんそれは、束にも同じことであり。上手くすれば二人どちらにも取材が出来るかもしれないと、抱いていた甘い考えは儚く消えた。

「ちーちゃん、漬物あげるー」

「……こちらにもあるんだが」

「じゃあ、それちよーだい」

「仕方ないな」

二つ並んだ焼き魚定食を食べさせ合う千冬と束は、ただの幼馴染というには異様すぎる。

けれど、それを聞けるような少女はその場におらず、デジタルカメラを握りしめた文野の存在は、既に二人の意識の外に追いやられていた。

翌日の朝、教室の並ぶ廊下に設置された掲示板の前は、少女たちで賑わっていた。

教室にやって来た千冬と束は、その騒がしさに顔を見合わせる。

「煩いね。何を騒いでるんだか」

「私たちには関係ない事だろう。行くぞ」

大した興味を抱くわけでも無く、千冬は一組の教室の扉に手をかけた。

「あ、織斑さん！」

珍しく、千冬を呼び止める声が少女たちの中から飛んで、千冬は扉にかけていた手をそのままに顔だけを振り返る。

随分と慌てているらしい少女は、千冬たちと同じ一組の生徒だ。

少女は落ち着きない動作で千冬と束に駆け寄り、必要以上に大きな声で話し出す。

「あの知らせ、もう見た？」

「知らせ？」

千冬は不思議そうに単語を繰り返した。

少女が指差した先を辿ると、少女たちの団体と目が合う。その頭の向こうに、掲示板に貼られた大きな紙の上半分が僅かに見えて、その事を言っているのだろうかと考えて首を振る。

「いや。知らせというのは？」

「見た方が早いよ。こっち」

少女に連れられるままに、千冬は少女たちの団体へと突入する。

当然ながら、千冬のすぐ後ろを束がくっ付いてきた。

千冬が進もうとすると、少女たちの団体は一斉に真つ二つに割れ、掲示板へと一直線に道が出来る。それは大そう楽でよかったが、千冬はあまりいい気にならなかった。

辿り着いた掲示板に貼られた紙を見上げる。紙は二枚貼っており、右側の紙はどうやら新聞らしかった。

『謎のSランク少女、織斑千冬に迫る!!』

千冬は沈黙した。

新聞には束が千冬におかずを差し出している写真が大きく載せられ、見出しの通り、内容は千冬についてのものばかり書かれている。書き手は文野だったようで、昨日の千冬への質問と、その回答も一緒に載せられていた。

「……………」

「ちーちゃん、怖い顔してる」

顔を覗きこんだ束が、むっとした表情で呟く。千冬の事がこうも広められるのは、束も嬉しくなかった。

「織斑さん、そっちじゃなくてこっち！」



千冬と束の意識を引き寄せたのは、少女の声。  
その声に従って、二人は新聞の横の紙を見る。そちらは新聞に比べて小さく、A4程度のサイズだった。

『クラス代表対抗戦について』

真っ白の紙に黒の太文字で書かれた題名は、来月の中ごろ、五月中旬にクラス代表を行う事を知らせる為のもの。

その下に書かれた日程や多数の要項にサッと目を通して、千冬はそれらが自分に関係するものであることに、心底から溜息を吐き出した。

「面倒だな……」

束以外には聞き取れない小声で呟いた千冬表情は、いつもと変わらず無表情。ただ、その目だけは目の前の面倒事に対する疲れを見せていた。

「ちーちゃん、大丈夫？なんなら束さんが潰しちゃってもいいよ？」

「……それはそれで、騒ぎになるだろうからな。遠慮しておく」

「むう。ちーちゃんが嫌ならやらなくてもいいのに」

「そっいうわけにもいかない」

嫌な事から逃げ続けられると、千冬は考えておらず、その辺りはまた束と違う思考である。

ただ、やると言っても面倒であることは絶対に変わらず、千冬はどうやって穏便に済ませるかを考えた。

「織斑千冬さん!!」

真つ二つに割れたまま千冬たちを囲んでいた少女たちの団体の外から、声が飛んだ。

「ふふつ、こんなに早く貴女と決着をつけられるなんて、学園も粹な計らいをしてくれるわ！」

言いながら、少女たちの団体を掻き分けてきたのは三人の少女。見覚えのあるその三人は、寮にて千冬を貶し、束に一切の慈悲を与えられずに言い捨てられた少女たちだった。

「聞いたわよ。貴女、一組の代表なんですって？ 私は三組の代表よ！ この意味、分かるわよね？」

「……対抗戦で戦うという事か？」

「ええ、そうよ。あんなふざけた事を言っておいて、まさか棄権や辞退なんてしないでしょうね」

「ふざけた事……？」

少女の言葉に、千冬は思い当たらず僅かに顔を顰めた。

すると、少女はそれよ、と新聞を指差す。正確には指を辿った先、新聞のある一角を指しており、そこを確かめた千冬は目を瞬かせた。

『クラス代表として、他クラスに絶対に負けるような事はしません』

質問コーナーの最後、一年一組の代表としての一言として書かれた千冬の言葉だった。

喧嘩を売っているともとれる過激な言葉は、千冬が実際に言った言葉とはかけ離れている。つまり、多大な脚色、純粹な脚色しかなかった。

「私に負けるつもりが無いなんて、そんな大口をよく叩けたわね。後悔させてあげるから」

睨みをきかせる少女に対して、千冬は何も言わない。そうして、もういいかと、掲示板に背を向けて少女たちの団体から抜け出そうと歩き出す。

「ちょ、ちよつと!？」

突然の行動に呆気にとられた少女が呼び止めたが、千冬は振り返らず教室へと入り、扉を閉める。

そうして自分の席に座ると、瞬間、向けられたクラスの少女たちの視線に目を閉じた。

「束……」

「なに? ちーちゃん」

「あとで屋上に行くが、お前も来るか？」

「行く!!」

周りの騒がしさに、唯一の安らぎを求めた。

## 衝撃の事実、広まる（後書き）

更新速度がちょっと遅くなりそうです。あと、学園生活が長そうな二人……。

## 勘違いの少女たち

顔をあげて見た空は高く、けれど確かに、いつもよりも近くにある。

雲の無い快晴の空。見えないシールドで風を感じられないのは少し残念であったが、久しぶりに飛んだ高い空に千冬は静かに目を閉じた。

『ちーちゃん、どんな感じ?』  
「いい感じだ」

ISのプライベートチャンネルの機能を使って飛ばされた通信に、つい唇を動かして答えながら、目を開けて見下ろした先に束を見る。肉眼では随分と小さく見えるだろう姿も、ISを装着した今なら何の問題も無く見る事が出来た。束は、三枚の仮想ディスプレイとキーボードを展開している。

『うんうん、そうだね。それじゃ、思いっきりやつちやっていいからね!』  
「ああ」

短く答えて、千冬は向かって飛んで来る小型ミサイルに、剣を構えた。

IS学園で、授業以外で生徒がISを使用する機会は少ない。

使用を禁止されているわけでは無いが、訓練機である打鉄の使用申請の手続きが面倒なのだ。

必要な書類を書いて提出するだけだが、訓練機とはいえISを使用させて何かあれば問題となる為、使用する理由、それに対する教師たちによる許可を出すための場所の指定や時間の指定と、どうにも手間と時間がかかる。

そして生徒たちは、提出する書類の使用する理由の欄でいつも手を止めてしまうのだ。何を書けばいいのか、考え過ぎてペンが進まない。そして時間だけが過ぎていく。

だから、生徒たちは授業以外でISを使用しない。だから、授業以外でISを使用する際に練習場所として提供される各アリーナには、まずもって人がいない。

ISに比べれば楽に申請が通るアリーナの使用許可がおりたのは、千冬がアリーナの使用許可を申請してから翌日の事だった。

未だ他に使用者のいないアリーナだからこそその早さだったのだろう。

「はっ!!」

飛んで来る小型ミサイルを叩き斬る。次々と真つ二つに斬り捨てられ、爆発があちこちで起こった。

四方八方から数多く飛んで来るミサイルは、白騎士事件を彷彿とさせる。実際に比べると随分とミサイルは小さいが。

「おー、いいね。さっすがちーちゃん!」

好調な千冬に束も笑みを浮かべ、最後のミサイルを飛ばす。綺麗に縦に斬られたそれが爆発して、度重なる爆発に乱れた髪を千冬は乱雑に払った。

もつすぐ行われるクラス代表対抗戦に向けて、そして何より、外

で高く飛ばうと言い出したのは束だ。前者は必要の無い口実に過ぎない。

空中においても、これまで培ってきた剣道の成果を存分に発揮して剣を振るう千冬の姿を見て、束は満足そうだった。

ゆっくりと地上に下りてきた千冬に駆け寄る。暮桜にバイザーは無く、そうして見えた表情は無表情ながらどこか楽しそうで、束は飛びついた。

「ちーちゃんが一番は确实だね！敵なしだよ！」

「別に一番じゃなくても構わないがな」

「普通にやつても、あっさりばっさりどしゃどしゃ落ちるよ？ちーちゃんと暮桜が負けるわけ無いしね！」

負けるようなものを渡す筈が無いでしょ、と言った束に、千冬はだるうな、と頷く。束が開発したものが、他の誰かが開発したものより優れているのは、近くで見続けてきた千冬がよく知っていた。

「束」

「お？」

不意に、千冬は束を抱き上げると空へ飛んだ。突然の行動に驚いて束が瞬きを繰り返すが、すぐにギュッと千冬の首に腕を回す。

「こういう時は、束さんお姫様抱っこがいいな」

「また今度な」

「わーい！」

千冬の左腕に座るような形で抱かれたことに、少しだけ不満を零して笑う。

シールドギリギリ、アリーナを眼下に見るような高さまで飛んで

止まった千冬が、目尻を緩ませた。

見渡す限りの青空の向こうに、海が見える。IS学園は海に囲まれているので、見回せば陸も空も青色だった。

「ねえ、ちーちゃん」

「なんだ？」

「今の世界は、楽しい？」

二人揃って青を眺めていたら、束がポツリと呟くように尋ねた。  
その問いかけに千冬はふむ、と考える様に目を細めると、

「面倒事は多いし、煩い事も多くて楽しくない時もあるな」

「そっか」

「だが」

束が千冬を見る。同じように束を見上げていた千冬と目が合った。

「一夏と篤がいるし、何よりお前もいるからな。こいつで飛ぶのも嫌いじゃないし……楽しい事の方が、多いと思うぞ」

言って、千冬はお前はどうかんだ、と束に問う。

千冬を見つめていた束が、いつもと違った静かな笑みを浮かべた。

「私も、ちーちゃんがいるから、大満足」

下りてきた唇は軽く重なるだけで、いつもと違う静かに、けれど確かに向けられた束の感情に、千冬は目を閉じた。



間近に迫ったクラス代表選の話が、少女たちの間で飛び交うようになった頃。

特に何かが変わることも無く過ごしてきた千冬と束は、担任である朱莉に呼び出された。

「ごめんなさいね、呼び出して」

「いえ」

朱莉は困ったように笑って、自分と向かい合って座る千冬と束に話し出す。

「実は、クラス代表対抗戦の事なんだけど……織斑さんは、篠ノ之さんから専用機を貰ってるのよね？」

「はい」

千冬の専用機の事が少女たちの間で話されるようになってすぐ、千冬は一度、朱莉に呼び出されていた。

専用機があるということは、国に配分されたISコア以外のコアがあることとなり、その扱いについて、つまりは所属などを確認する必要がある。

本来ならば勝手に作りだされた物とされ没収される可能性もあるが、製作者は篠ノ之束。IS開発者本人であり、その彼女が千冬の持つ専用機に関しては不干渉を提示した為に、下手に手出しできなくなった状態だ。

現時点での千冬の専用機、暮桜は束所有の物という考えになっている。関わってこなければそれで良いと、千冬も束もその考えには何も言っていない。

「その専用機なんだけれど……」

朱莉がチラリと千冬の左手首のブレスレット、暮桜に目をやる。  
それに束が、何か文句でもあるのかと言うように朱莉を睨み、千冬は静かに言葉の続きを待った。

束の視線に押された様子を見せた朱莉が、それでもはつきりと言葉を続ける。

「対抗戦では、他の参加者同様に打鉄を使用してほしいの。今回は初の対抗戦で、ISの性能では無く、操縦者自身の実力を測りたいし、一人だけ専用機だと、生徒たちにも不満を持つ子が出て来ると思うから」

朱莉の言い分はもつともだった。実力差を明確にするならば、基本条件は同じにした方がよい。

上としては千冬の持つ専用機がどのようなものかデータが欲しいという考えもあつただろうが、今回それは見送りとされたようだ。

「構いません」

千冬としても、わざわざ大衆の前で敢えて披露しようと思つはずも無く、言われた言葉に頷いて返す。

多少は文句を言われるかと考えていた朱莉は、あっさりと頷いた千冬に思わず、いいのと再度問いかけた。

「困ることはありませんので」

別の機体で勝負をしろと言われたところで、千冬はそれほど問題に思っていなかった。

束もまた、千冬がそれで良いなら良いと考えていた。

「話は終わりですか？」

「え、ええ」

「それなら、私たちはこれで失礼します」

呼び止められることも無く、二人は部屋を後にする。  
クラス代表対抗戦まで、一週間を切った日だった。

クラス代表対抗戦はトーナメント方式で行われる。総当たり戦よりも、優劣が目に見えてはつきりするからだ。

「貴女を倒して、私の方が篠ノ之博士に相応しい事を教えてあげる  
！」

「……………」

一気に時は流れ、トーナメント決勝戦。

千冬は歓声に満ちるアリーナの上空で、対戦相手である三組の少女と相対していた。対抗戦の発表があった日に、千冬に宣戦布告をした少女である。

「にしても、やはり専用機の噂は嘘だったのかしら？訓練機で試合に参加するだなんて」

「学園側の意向だ。こちらの方がフェアだからな」

「……………あらそう」

機嫌を悪くしたように吐き捨てた相手の少女に、千冬は試合開始の笛を待つ。

実のところ、千冬と少女の実力の差はこれまでの試合を見れば一目瞭然であった。片や世界初のIS操縦者にして唯一の専用機持ち、片やISに対しては未だ素人同然の少女。肩書だけでも実力の差は

分かり切っている。

『やつちゃえ、ちーちゃん!』

『……ああ』

個人間秘匿通信で、上機嫌の束がそう声をかけてきた。千冬側のピットの出口、アリーナギリギリにその姿がある。

危ないだろう、と一瞬思うも、束ならば危険は無いかとすぐに思い直した。

試合開始の笛が鳴る。笛と同時に三組の少女がブレードをその手に展開しようとし、けれどそれよりも早く、一瞬にしてその右手にブレードを持った千冬が、少女に猛攻をしかけた。

「っああああ!」

悲鳴があがる。勝負は十秒と必要が無かった。

シールドエネルギーを削られ、尽きた打鉄がアリーナの地面へと落ちて行く。それは、この対抗戦で何度となく千冬が眺めた光景。

千冬の相手として、このIS学園の生徒たち、生徒どころか教師ですら、役不足であった。

「優勝、一年一組代表、織斑千冬」

聞こえた声に、大きな歓声があがるのを後ろに聞きながら、千冬は束の待つピットに戻った。

「お疲れ様、ちーちゃん」

「言う程、疲れていないさ」

「ふふふ、さすが束さんのちーちゃんだね。まあ最初から分かり切っていた結果だけだね!」

誰よりも千冬の勝利を信じていた束が笑う。展開を解除した千冬が床に降り立った瞬間に飛びついて、受け止められた瞬間にその唇に口づけた。

「っん」

幸いにもピットに二人以外の人はおらず、また観客たちからも二人の姿は見えない。

すぐに離れた唇に呆れたような溜息を吐いて、千冬は束が満足するまで、その体を抱きしめていた。

「千冬様！」

翌日、教室へと向かう廊下を歩いていた二人は、唐突に呼び止められた。

クラス代表対抗戦が終わり、初めて見るIS同士の試合の余韻に浮足立つ少女たちが目立つ廊下は騒がしく、また千冬はそんな少女たちの注目の的である。

圧倒的な實力を持ち、他人に興味を持たない束が執着する少女。加えて、少女たちから見ても美人な容姿というのが相俟って、十人が十人振り返る勢いだ。

そんな廊下の、注目の中で、それも普通では無い呼び止められ方をして、千冬は少しばかり目を細めて振り返る。

振り返った先にいたのは、頬を赤く染めた三組の少女と、少女の友人の二人だった。

「おはようございます、千冬様！」

「おはようございます!」

「…………おはよう」

挨拶には挨拶で返す礼儀を持ち合わせていた千冬が訝しみながらも答えると、少女たちは途端に顔を見合わせてキヤツキヤと騒ぎ出した。

「返してくれたわ!」

「なんてお優しいのかしら」

「(…………なんなんだ)」

昨日まで、束の傍にいる千冬を目の敵にしていた少女たちと同一人物と思えない身の変わりよう。

騒ぐばかりで呼び止めた理由を話しその無い少女たちに、千冬の腕に抱き着いていた束の力が強まった。それにも溜息を吐く。

「何の用だ」

聞けば、少女たちははつと我に返ったように千冬たちに視線を戻して口を開いた。

「私、昨日の千冬様との戦いで目が覚めたんです」

胸に手を当てて、大げさとも思える様に少女は高らかに話す。

「あれだけの實力を持ちながら、むやみやたらに誇示しない。威張るでもなく、ただ淡々と私たちを見守って下さる。そのお心に、感動しましたの」

「…………見守る?」

「いつも一歩、離れた場所から私たちを見守っておいででしょう?」

私たちは千冬様をずっと見ていたのですよ、気づいて当然ですわ」  
「……………」

どうにも勘違いをしているようだ、と千冬は困り果てた。彼女が少女たちから離れた場所にいるのは、単に騒ぎに近づきたくないからではない。

「そんな千冬様にあんなことを言うなんて、私はどうかしてしましたわ」

「……………」

「そのお詫びに、これからは誠心誠意尽くさせてほしいんです。お許しくありませんか？」

「……………いや」

「駄目に決まってるでしょ」

敵意を通り越して殺意すら抱いた声が、千冬の隣から飛び出した。

「ちーちゃんは東さんのちーちゃんだよ？必要以上に近寄ったら消すから」

「ですが、篠ノ之博士……………」

「いこ、ちーちゃん」

東が千冬の手を取って歩き出す。けれど、千冬はその場から足を動かさず、東の手を握り返して少女たちを見た。

「私に何を思おうが勝手にすればいいが、尽くす必要は無い」

それははつきりとした拒絶だった。そうして千冬は東に手を引かれるままに歩き出し、少女たちの前から立ち去る。

残された少女たちは、そんな二人の後ろ姿を見届けて、やがて

「この気持ちを捨てさせないなんて、お優しいわ……」

ただこれ以上、関わりたくなかった千冬の態度は、またも勘違いされてしまっていた。

恋は盲目、恋とは違つかもしれないこれもまた、盲目であることに変わりはない。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0576z/>

---

千冬と束は似た者同士

2012年1月8日22時51分発行